

栃木県埋蔵文化財調査報告 第39集

道路建設地内遺跡発掘調査報告

辻の内遺跡

昭和 56 年 3 月

栃木県教育委員会

## はじめに

昭和55年に本県において開催された第35回国民体育大会「栃の葉国体」は県民の熱意が稔り成功裡に終了することができました。当国体のメイン会場となった栃木県総合運動公園に通じる、一般県道栃木・宇都宮線と宇都宮環状線の交差する道路建設予定地内に本遺跡が存在することが判明したのは昭和53年4月でありました。このため当委員会は本遺跡の取扱いについて土木部と協議した結果記録保存調査を行うこととし、以来調査を続けてまいりましたが、このほど全ての作業が終了し、「辻の内遺跡発掘調査報告書」として刊行するはこびとなりました。

本遺跡調査においては幸い中世集落、墓塚群の検出等貴重な成果を上げ記録にとどめることができました。関係各位におかれまして保護施策の資料として御活用いただければ幸いです。

発掘調査に際しては、土木部、宇都宮市教育委員会をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。発刊にあたり厚くお礼申しあげます。

昭和56年3月

栃木県教育委員会教育長  
渡辺幹雄

## 例 言

1. 本報告書は、県道宇都宮―栃木線道路改良工事と、県道宇都宮環状線内に所在した、宇都宮市西川田町内の辻の内遺跡第1次、第2次発掘調査報告書である。
2. 本事業に用いた発掘調査費は全額土木部の負担により、栃木県教育委員会が主体となり実施したものである。
3. 本報告書は木村等が作成した。
4. 調査に際しては、種々御協力いただいた県土木部、宇都宮土木事務所、宇都宮市教育委員会に謝意を表するとともに西川田町自治会に深く感謝したい。

# 辻の内遺跡発掘調査報告

## 本文目次

○ はじめに	
○ 例言	
I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	2
2 周辺の遺跡	2
3 遺跡の範囲	2
III 発掘調査の成果	3
1 発掘調査の方法と経過	3
2 発掘調査成果の概要と地区割り	3
3 中世遺構の調査	6
a 方形竪穴遺構	6
b 掘立柱建物・堀・ピット群	20
c 土城	21
d 墓塚	23
e 火葬墓	24
f 地下式土塚	25
g 溝	30
h 井戸	33
i その他の遺構	40
4 竪穴住居跡の調査	40
5 大溝の調査	54
IV まとめ	59

## 挿 図 目 次

第1図	付近の遺跡 .....	3
第2図	社の内遺跡グリッド配置図 .....	5
第3図	1号方形竪穴遺構実測図 .....	6
第4図	2・3号方形竪穴遺構、1号掘立柱建物、集石実測図 .....	7
第5図	2・3号方形竪穴遺構、集石断面図 .....	8
第6図	4号方形竪穴遺構実測図 .....	9
第7図	5号方形竪穴遺構実測図 .....	9
第8図	6号方形竪穴遺構実測図 .....	10
第9図	7号方形竪穴遺構実測図 .....	11
第10図	8・13号方形竪穴遺構実測図 .....	12
第11図	10号方形竪穴遺構実測図 .....	13
第12図	9・11・12号方形竪穴遺構、5号溝、1号井戸実測図 .....	14
第13図	14号方形竪穴遺構、4号溝実測図 .....	16
第14図	15号方形竪穴遺構実測図 .....	17
第15図	16号方形竪穴遺構実測図 .....	18
第16図	17号方形竪穴遺構実測図 .....	18
第17図	18号方形竪穴遺構、4号溝実測図 .....	19
第18図	63～66号土壌実測図 .....	22
第19図	1～4号墓塚実測図 .....	23
第20図	1号地下式土壌実測図 .....	26
第21図	2号地下式土壌実測図 .....	27
第22図	3号地下式土壌実測図 .....	29
第23図	4号地下式土壌実測図 .....	30
第24図	2号溝南北断面図 .....	30
第25図	3号溝南北断面図 .....	31
第26図	6号溝南北断面図 .....	32
第27図	7号溝東西断面図 .....	32
第28図	2・3・5～7号井戸実測図 .....	34
第29図	4号井戸、楕円形土壌実測図 .....	35
第30図	8・9号井戸実測図 .....	36
第31図	10～13号井戸実測図 .....	37

第32图	中世遺構出土遺物実測図	38
第33图	中世遺構出土遺物実測図	39
第34图	1号住居跡実測図	41
第35图	2号住居跡実測図	42
第36图	2号住居跡竈実測図	42
第37图	3号住居跡実測図	43
第38图	3号住居跡竈実測図	43
第39图	4号住居跡実測図	44
第40图	4号住居跡竈実測図	44
第41图	5号住居跡実測図	45
第42图	5号住居跡竈実測図	45
第43图	6号住居跡実測図	46
第44图	6号住居跡竈実測図	46
第45图	7号住居跡実測図	47
第46图	8号住居跡実測図	47
第47图	8号住居跡竈実測図	48
第48图	9号住居跡実測図	48
第49图	10号住居跡実測図	49
第50图	9号住居跡竈実測図	50
第51图	10号住居跡竈実測図	50
第52图	11号住居跡実測図	51
第53图	11号住居跡竈実測図	51
第54图	住居跡出土土器実測図	52
第55图	住居跡出土土器実測図	53
第56图	11号住居跡出土土器実測図	54
第57图	1号溝 (B区) 南北断面図	54
第58图	1号溝 (E区) 東西断面図	55
第59图	1号溝 (B区) 出土遺物実測図	55
付図 1	A区全測図	
付図 2	B区全測図	
付図 3	C区全測図	
付図 4	D区全測図	
付図 5	E区全測図	

## 圖 版 目 次

- |  |   |
|--|---|
| <p>図版1 上 調査区遠望<br/>下 A区全景</p> <p>図版2 上 B区全景<br/>下 C区北部全景</p> <p>図版3 上 C区西部全景<br/>下 C区東部全景</p> <p>図版4 上 D区全景<br/>下 E区全景</p> <p>図版5 上 1号方形竪穴遺構<br/>下 2号方形竪穴遺構</p> <p>図版6 上 3号方形竪穴遺構<br/>下 4号方形竪穴遺構</p> <p>図版7 上 5号方形竪穴遺構<br/>下 6号方形竪穴遺構</p> <p>図版8 上 7号方形竪穴遺構<br/>下 8号方形竪穴遺構</p> <p>図版9 上 8号方形竪穴遺構埋土断面<br/>下 9・11号方形竪穴遺構、5号溝、<br/>1号井戸</p> <p>図版10 上 10号方形竪穴遺構<br/>下 10号方形竪穴遺構内木炭出土状<br/>況</p> <p>図版11 上 11号方形竪穴遺構<br/>下 12号方形竪穴遺構</p> <p>図版12 上 13号方形竪穴遺構<br/>下 13号方形竪穴遺構埋土断面</p> <p>図版13 上 8・13号方形竪穴遺構(南から)<br/>下 16号方形竪穴遺構</p> <p>図版14 上 18号方形竪穴遺構<br/>下 17号方形竪穴遺構</p> <p>図版15 上 1号掘立柱建物<br/>下 1号墓塚人骨検出状況</p> | <p>図版16 上 3号墓塚人骨検出状況<br/>下 2号墓塚人骨検出状況</p> <p>図版17 上 1号地下式土壇竪埋土断面<br/>下 2号地下式土壇</p> <p>図版18 上 2号地下式土壇竪埋<br/>下 3号地下式土壇竪埋2</p> <p>図版19 上 1号溝(B区)<br/>下 1号溝(E区)</p> <p>図版20 上 4号溝埋土断面<br/>下 4号溝内遺物出土状況</p> <p>図版21 上 5号溝埋土断面<br/>下 6号溝埋土断面</p> <p>図版22 上 7号溝埋土断面<br/>下 7号溝</p> <p>図版23 上 9号井戸<br/>下 1号井戸埋土断面</p> <p>図版24 上 11号井戸埋土断面<br/>下 11号井戸</p> <p>図版25 上 集石<br/>下 土師甕上器出土状況</p> <p>図版26 上 1号住居跡<br/>下 2号住居跡</p> <p>図版27 上 3号住居跡<br/>下 4号住居跡</p> <p>図版28 上 5号住居跡<br/>下 5号住居跡竈</p> <p>図版29 上 6号住居跡<br/>下 7号住居跡</p> <p>図版30 上 D区検出住居跡<br/>下 9号住居跡</p> <p>図版31 上 10号住居跡<br/>下 10号住居跡竈</p> |
|--|---|

図版32 上 11号住居跡

下 2号住居跡竪

図版33 中世遺構および住居跡出土遺物

図版34 住居跡、1号溝出土遺物

## I 発掘調査の概要

### 1 発掘調査に至る経過

昭和52年度に実施した道路建設予定地内の遺跡所在調査の結果、県道宇都宮・栃木線改良工事と県道宇都宮環状線の交差する宇都宮市西川田地内には辻の内遺跡が所在することが判明しました。

これにより昭和53年3月13日付け道建第243号に土木部長より教育委員会あて宇都宮市西川田地内の遺跡所在の再確認の依頼があり、これをうけて当委員会では早急に再調査を実施し、遺跡の範囲が明確に指通できないため確認調査を実施する方向で、昭和53年4月4日付け文化第106号にて土木部長あて、昭和53年4月17日～4月24日までの期間に確認調査を実施し、その結果により、本調査実施の有無について協議する旨の回答を提出した。

確認調査は道路建設予定敷内に打ち込まれているセンター杭を使用し、グリットを設定し確認調査を実施した。調査結果多数の遺構が検出され、平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡であることが判明した。

この結果をうけて教育委員会と土木部との協議を行なったところ、本調査を実施することで協議が成立した。しかし発掘調査予定地内には作物の植え付けがなされている地区もあるため、当該地区は作物の取り入れが終了するのをまって第2次調査として実施することとした。

第1次調査は昭和53年5月10日から行なうこととし、昭和53年5月11日付文化第106号にて土木部長あて発掘調査実施の通知を行なった。第1次調査は主に県道宇都宮・栃木線の道路改良工事予定地（道路建設課工事施行地区）に対して調査を実施した。

第2次調査は作物の植付けのなされている県道宇都宮・栃木線の道路改良工事予定地（道路建設課工事施行地区）と県道宇都宮環状線（都市施設課工事施行地区）に対して昭和53年11月1日から実施することで、昭和53年10月24日付文化第106号にて土木部長あて通知を行なった。

調査は第1次、第2次と分かれる調査ではあったが、長期間の調査により多大な成果をおさめることができた。

調査体制は下記のとおりである。

調査主体者 栃木県教育委員会

調査担当者 柳川 宏（現県立鹿沼高等学校教諭）

木村 等（文化課）

なお今回に要した費用は全て土木部の負担により実施したものである。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

辻の内遺跡は、栃木県宇都宮市西川田町辻の内に所在する。西川田町は宇都宮市の南西部にあたり、古代の河内郡の一部になっている。

栃木県南半部は、宝積寺・宝木・田原面の台地が発達し、それらが関東平野の北端部を成している。遺跡は宝木面の台地上に立地し、標高は88～89mで、姿川との比高差は、約2mである。この宝木面の台地は、県中南部に形成され、樹枝状の浅い谷が複雑に開折されている。これらの浅い谷の一つが遺跡の南東部にも見られる。

### 2 周辺の遺跡（第1図）

周辺の古墳時代の遺跡は、当遺跡の乗る南北に延びる台地上（姿川左岸）と姿川右岸の台地上に古墳として見られる。代表的なものとしては、塚山古墳群（19・1863）、砥上山神社古墳（1926）・姿川中央小南古墳（1923）・姿川中央小敷地内古墳（1601）・西川田泉宮神社古墳（1921）・大日塚古墳（11）・綾女塚古墳（24）・泉宮神社古墳（1894）などがあげられる。また、姿川右岸の古墳としては、亀塚古墳（宇都宮市・20）、亀塚古墳（339）などがあげられる。

奈良・平安時代の土師器を出土する遺跡は、台地上ほぼ全面的に見られる。これは、同台地上に小枝谷が入り組み、その谷の縁辺に集落が立地するためである。であるから、台地全面にあたかも集落が認められるように見える。

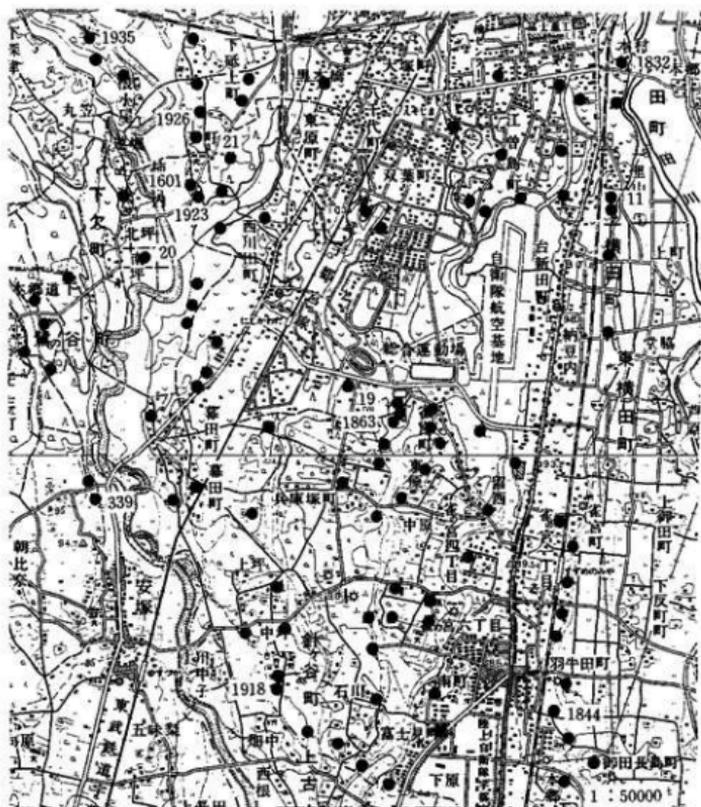
中世の遺跡としては城館址以外には確認されていない。ただし、遺跡周辺の農家で聞いた話から、数基の地下式土壇の存在が同台地上に予想される。

中世初期の下野国東南部は、宇都宮・小山両氏によって分割支配されていた。本遺跡一帯は、宇都宮氏の本拠地である宇都宮城からわずか5km南西であり、また、多功（石橋町）一帯を同氏が支配地としていることから考えて、宇都宮氏の所領であった可能性が考えられる。

### 3 遺跡の範囲

竪穴住居跡の分布範囲は、地上の遺物の散布の有無で判断したが、調査によって遺構が確認された地点でさえも、調査前では数片の遺物が表面採集できた程度である。従って、明確なその範囲はおさえがたい。しかし、遺物の散布は、本調査区よりもむしろ姿川に近い台地上に多いことから、集落の中心はそちらの方面にあると考えられる。

中世の遺構も、竪穴住居の集落跡同様、遺物の散布がほとんどないことから、その範囲は決



大日塚古墳(11)、塚山古墳(19)、亀塚古墳(20)、愛宕塚古墳(21)  
 龜塚古墳(339)、姿川中央小敷地内古墳(1601)、上野古墳(1832)  
 茂原多功神塚古墳(1844)、塚山古墳群(1863)、八幡神社古墳(1918)  
 姿川中央小南古墳(1923)、砥上山神社古墳(1926)、無名墳(1935)

※番号の記入されない遺跡は、奈良・平安時代の集落地である。

遺跡番号は、『栃木県遺跡地図』(S. 50)に従った。

第1図 付近の遺跡

めがたい。ただ、調査南限からさらに100 m前後の地点で青磁片を表面採集しており、このあたりにも遺構の存在が考えられる。

また、集落跡に伴うものかは不明であるが、地下式土壇が周辺地区(500m以内の台地上)で3基確認されていることも参考としてあげておきたい。

### Ⅲ 発掘調査の成果

#### 1 調査の方法と経過(第2回)

辻の内遺跡の調査は、初めにトレンチによる遺構確認を行った(53年4月17日～4月27日)。調査の結果、ピット群・土壇・竪穴住居跡・溝・火葬墓等の存在を確認した。また、遺構確認面まで約60～80cmと深く、遺構密度も高いため、調査予定期間内で作業を終了させるために遺構確認面であるローム上面までの土をブルドーザーで削平した。

遺構検出面まで掘り下げた後、任意の方向で10mの方眼を調査地区内に設定し、遺構平面図作成の基準とした。遺構平面図は、簡易遺り方測量と平板測量を併用して作成した。

本遺跡の第1次調査は、昭和53年5月10日～6月28日まで、第2次調査は、昭和53年11月1日～12月20日まで行った。両調査は、当初10日間をブルドーザーによる表土削平にあて、その後、遺構の平面プラン検出を行った。遺構の掘り下げは調査終了10日前位に終り、残りの日数を平面図作成にあてた。

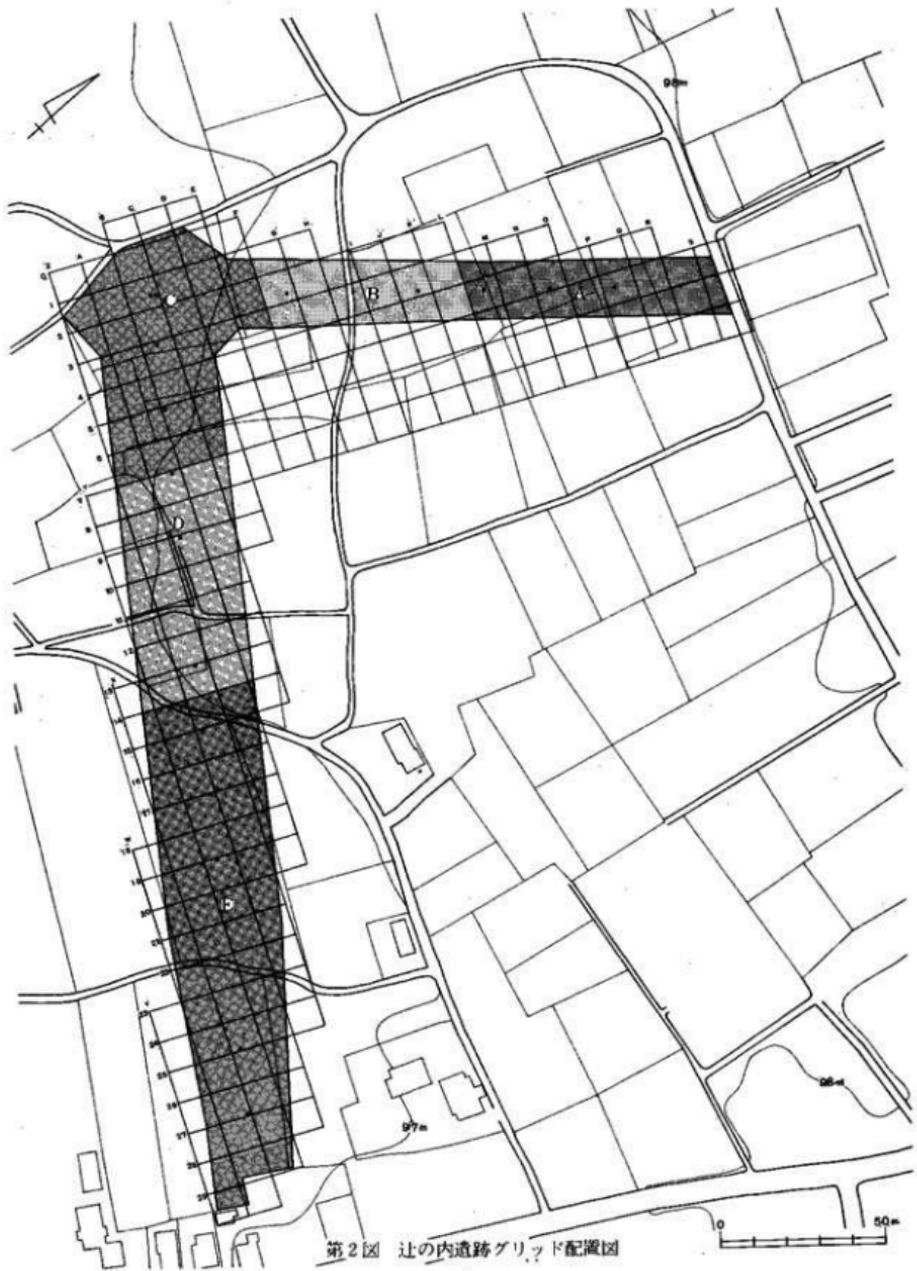
なお、調査は2次に渡ったが、本報告書内ではそれらは区別せず遺構のブロックで遺構全体図を分割した(A～E区)。

#### 2 発掘調査成果の概要と地区割り

調査区は、L字形の道路敷部分であるため台地平坦部にトレンチを入れたようなかっこうになった。調査区内では、いくつかの遺構のまとまりが確認できた。これらのまとまりと、掲載上の図版の制約から、調査区を北から南、続いて西から東へ、A・B・C・D・Eの五区に分割して、取扱ひ掲載することとした。

検出した遺構は、A区で、竪穴住居跡3軒・土壇40余基・ピット群・井戸2基、B区で、竪穴住居跡3軒・土壇5基・井戸1基・溝2条・火葬墓1、C区で、竪穴住居跡2軒・土壇100余基・ピット群・掘立柱建物3棟・堀1・井戸9基・溝5条・方形竪穴遺構18基・墓壇4・火葬墓1・地下式土壇4、D区で、竪穴住居跡3軒・土壇43基、E区で、溝1条・土壇1基である。

検出した遺構のうち、竪穴住居跡、1号溝は古代のものであり、これら以外はすべて中世以降の遺構である。



第2図 辻の内遺跡グリッド配置図

### 3 中世遺構の調査

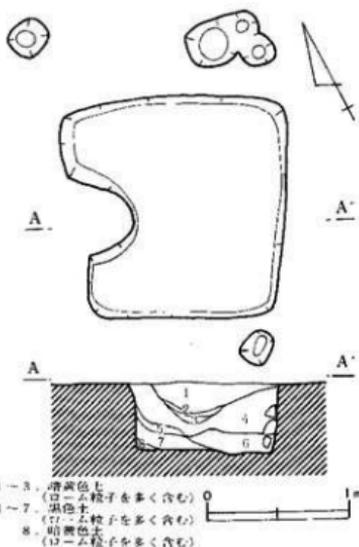
中世の遺構は、A区竪穴住居跡周辺のピット群とC区の遺構群である。

以下、それぞれの遺構について記す。

#### a 方形竪穴遺構

##### 1号方形竪穴遺構（第3図、図版5）

1号掘立柱建物の南約6mの所に位置し、平面規模 $1.6 \times 1.6$ m、深さ0.5mの凹形の竪穴遺構である。北西壁は、内側への張り出しを持ち、その平面形は半円に近い。壁は、ほぼ垂直に造られており、張り出し部の壁も同様である。床面は、平坦である。



第3図 1号方形竪穴遺構実測図

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土である。断面図でピットを埋めている第2-3層は、柱痕跡に堆積した土と考えられる。柱の太さは、図から復元すると約16cmとなる。また、ピットの掘方は、垂直よりも遺構のやや外方に向って掘られている。

本遺構は、1号掘立柱建物と重複するが新旧関係は不明であり、また、遺構の北西部は、土壌に切られている。

出土遺物は皆無である。

##### 3号方形竪穴遺構（第4・5図、図版6）

1号掘立柱建物と重複する位置にあり、平面規模 $1.9 \times 1.3$ m、深さ0.5mの凹形の遺構であ

注1  
埋土は、ロームの小ブロックを含む黒色腐植土で、断面観察から自然堆積と考えられる。なお、2層と3層の間に約1cmの灰層が観察できる。

出土遺物は皆無である。

##### 2号方形竪穴遺構（第4・5図、図版5）

1号掘立柱建物と重複する位置にあり、平面規模 $1.7 \times 1.6$ m、深さ0.2mの正方形に近い竪穴遺構である。壁はほぼ垂直に造られ、北西と南東の壁中央にはピットが設けられている。ピットは、径30cmで、床面から約40cmの深さである。床面は平坦である。



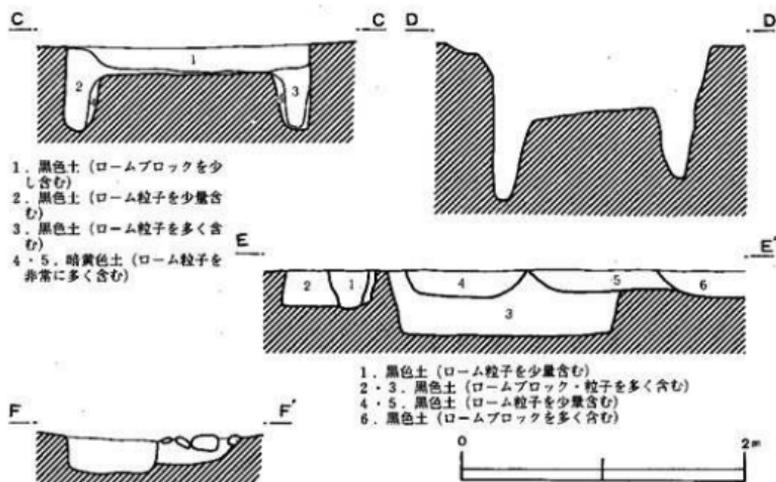
第4图 2·3号方形整穴遗構、1号孤立柱建物、集石表测图

る。南西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は台形に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られ、北西と南東の壁中央には、ピットが設けられている。ピットは、径30cmで、遺構の床面から約55cmの深さである。床面は平坦であるが、南東から北西にやや傾斜する。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

本遺構は、土壌に切られている。また、1号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物は皆無である。



第5図 2・3号方形竪穴遺構、集石断面図

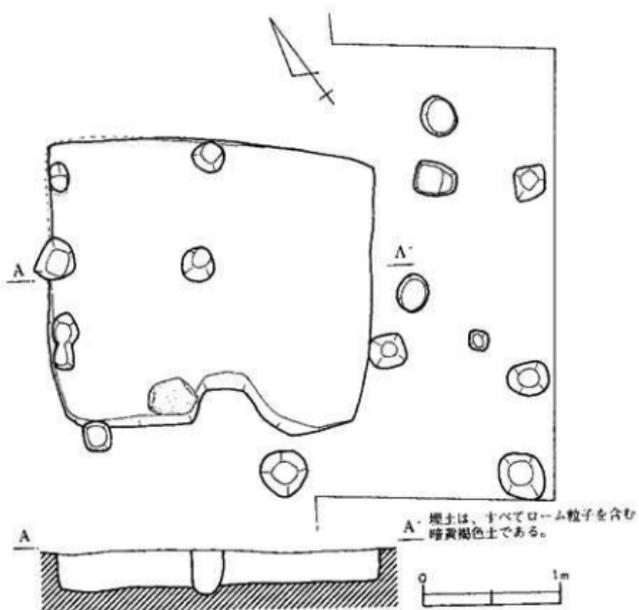
#### 4号方形竪穴遺構 (第6図、図版6)

堀の柱穴と重複する位置にあり、平面規模2.1×2.3m、深さ0.3mの凹形の竪穴遺構である。南西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は台形に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

本遺構は、堀の柱穴やいくつかのピットと切り合うが、それらとの新旧関係は不明である。また、ピットの位置や埋土の類似性から明らかに本遺構に伴うと判断できるピットは、遺構内外に見られない。

出土遺物は皆無である。



第6図 4号方形竪穴遺構実測図

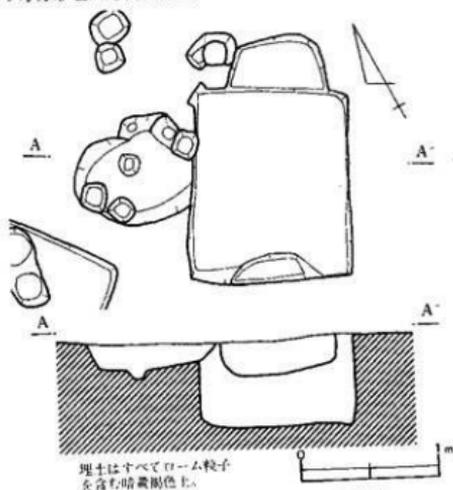
5号方形竪穴遺構

(第7図、図版7)

1号獨立柱建物の西約4mの所に位置し、平面規模1.4×1.2m、深さ0.7mの凹形の竪穴遺構である。南壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

本遺構は、土壌に切られている。



第7図 5号方形竪穴遺構実測図

出土遺物は皆無である。

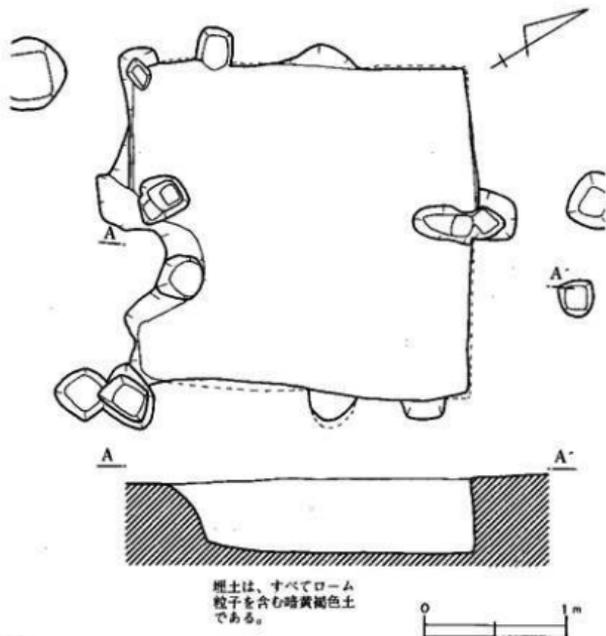
#### 6号方形竪穴遺構（第8図、図版7）

堀の南2mの所に位置し、平面規模2.4×2.3m、深さ0.5mの凹形の竪穴遺構である。南西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。壁は、張り出し部で約60度の傾斜を持つ他はすべてほぼ垂直に造られている。床面は平坦である。

埋土は、床面直上に厚さ約1cmの黒色腐植土、その上に厚さ約3cmの木炭小片を伴う灰層の順で堆積したもので、さらにその上にローム粒子を含む黒色腐植土が堆積している。

本遺構は、遺構内外のピットとの新旧関係は不明であり、かつ、ピットの位置や埋土の類似性から本遺構に伴うと言えるものはない。

出土遺物は皆無である。

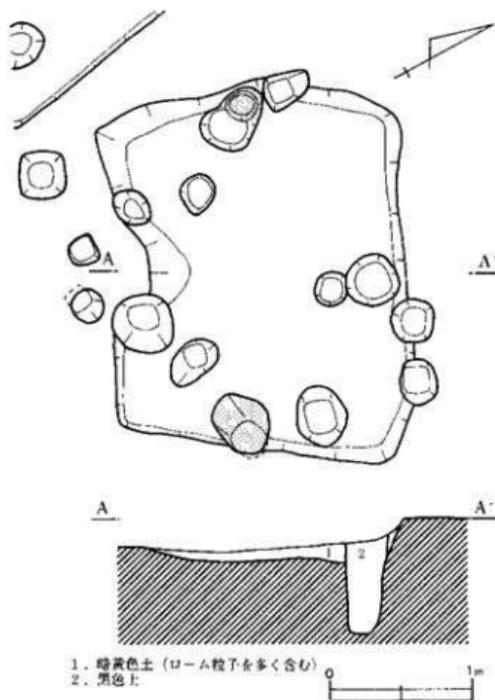


第8図 6号方形竪穴遺構実測図

#### 7号方形竪穴遺構（第9図、図版8）

堀の南2mの所に位置し、平面規模2.0×2.6m、深さ0.3mの凹形の竪穴遺構である。南西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。また、北西と南東の壁中央には、ピットが設けられている。ピットは、径30cmで、床面から50cmの深さである。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。ただし、遺構の床面からは、部分的には厚さが約1cmになる灰層を検出した。この灰層から青磁の碗が出土している。



第9図 7号方形竪穴遺構実測図

本遺構は、数個のビットと切り合うが、断面図に示した本遺構を切るビット以外とは新旧関係は不明である。遺構内外のビットは、その位置と深さから判断するところでは、岡示した2つが遺構に伴うと言える。つまり、ビットの位置が壁のほぼ中央にあたり、遺構床面からの深さが50cmと他のビットのように浅くない。

出土遺物は、灰層中出土の青磁碗(第32図1)と埋土上半出土の内耳鍋破片である。

#### 8号方形竪穴遺構(第10図、図版8・9・13)

5号溝の北3mの所に位置し、平面規模1.6×1.4m、深さ0.6mの円形の竪穴遺構である。北西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は方形に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床は平坦である。

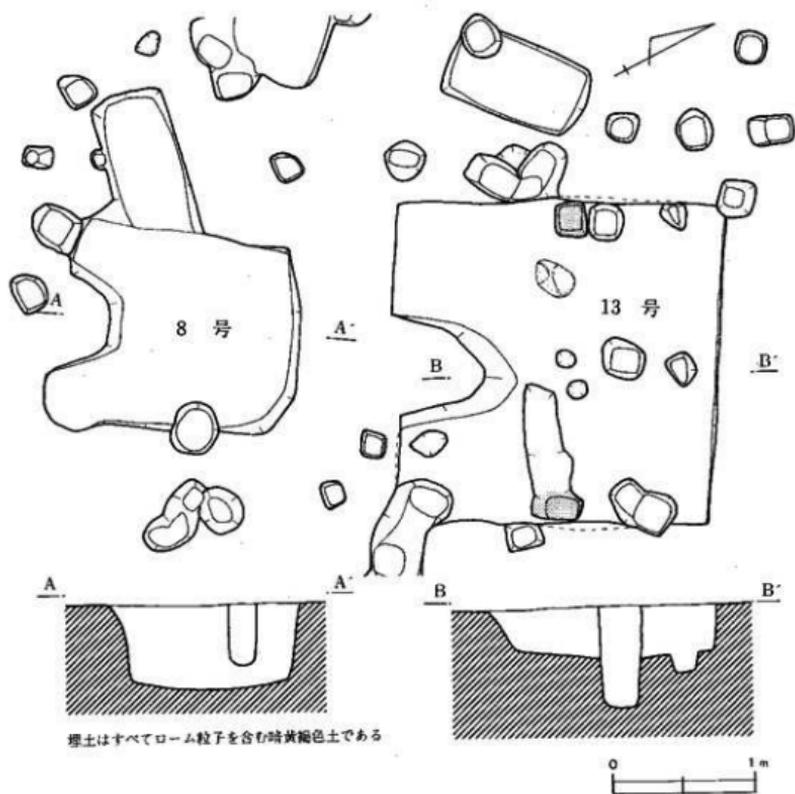
埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単層である。

本遺構は、土塊やビットに切られている。

出土遺物は皆無である。

#### 9号方形竪穴遺構(第12図、図版9)

5号溝に切られる位置にあり、平面規模2.4×2.4m、深さ0.4mの円形の竪穴遺構である。南東壁中央の南寄りには内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床面は平坦である。



埋土はすべてローム粒子を含む暗黄褐色土である

第10図 8・13号方形竪穴遺構実測図

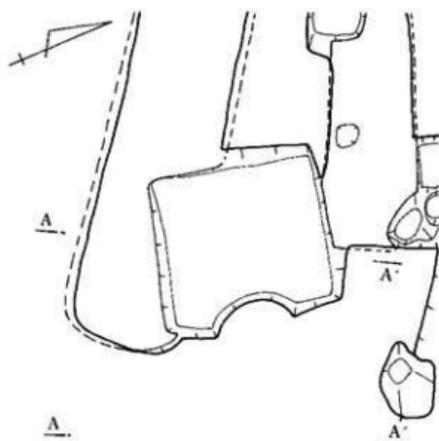
埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。また、床面上で5cm前後のロームブロックが多数見られた。

本遺構は、5号溝（この遺構は、1号井戸に切られている）・11号方形竪穴遺構に切られている。また、本遺構と切り合うピットとの新旧関係は不明である。

出土遺物は皆無である。

10号方形竪穴遺構（第11図、図版10）

1号地下式土壌の西8mの所に位置し、平面規模1.2×1.3m、深さ0.5mの凹形の竪穴遺構である。東壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床面は平垣である。



- 1・2. 暗黄褐色土  
 3. 暗黄褐色土(炭化物を含む)  
 4. 暗黄褐色土(ローム粒子を多く含む)  
 5. 暗黄褐色土(木炭を少量含む)  
 6. 暗黄褐色土(木炭を多く含む)

第11図 10号方形竪穴遺構平面図

11号方形竪穴遺構 (第12図、図版9・11)

5号溝の南約1mの所に位置し、平面規模1.7×1.5m、深さ0.5mの凹形の竪穴遺構である。東壁中央には内側への張り出しを持ち、その平面形は台形に近い。遺構の壁の傾斜は急であり、北と南の壁中央にはピットが設けられている。ピットは、径25cmで、床面から約40cmの深さである。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

遺構は、9号方形竪穴遺構に切られている。

出土遺物は皆無である。

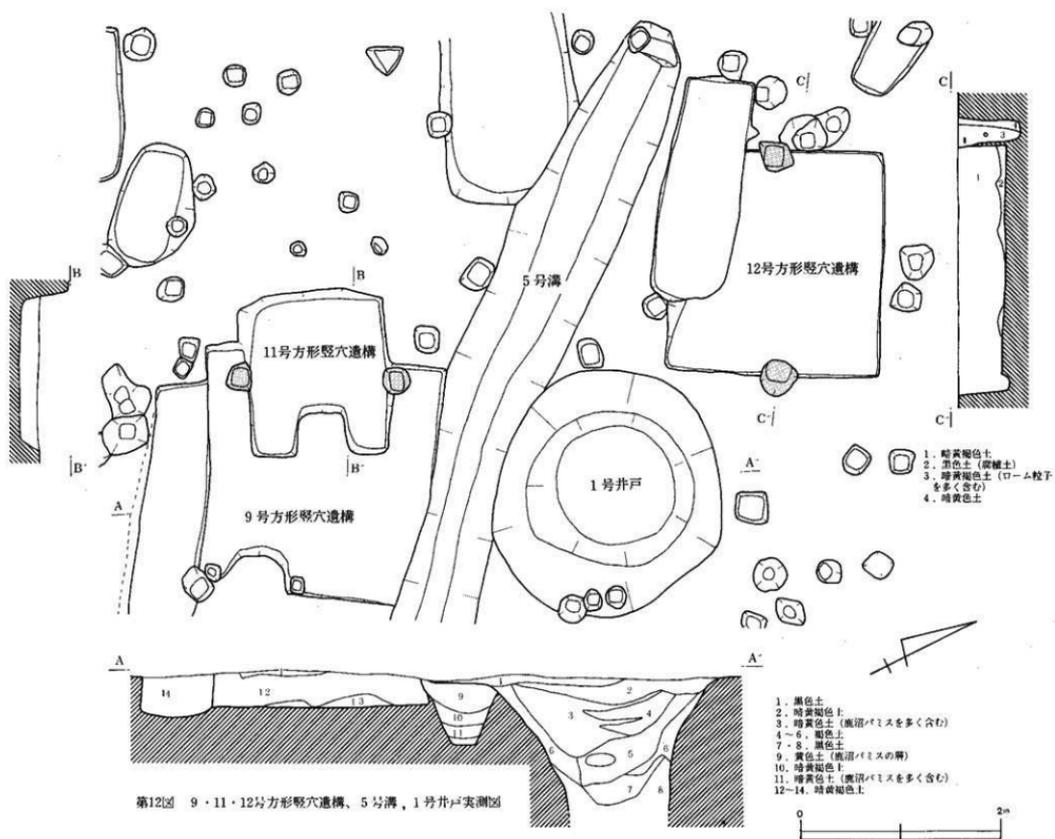
12号方形竪穴遺構 (第12図、図版11)

5号溝の南1mの所に位置し、平面規模2.3×2.1m、深さ0.5mの正方形の竪穴遺構である。北西壁は土壌に切られているため、張り出し部の有無は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上り、北西と南東の壁中央にはピットが設けられている。ピットは、径30cmで、床面から50cmの深さである。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層であるが、わずかに床面直上で部分的に黒色

埋土は、土壌によって一部切られる。遺構の床面には、約5cmの厚さで一面に木炭が見られ、木炭の上にはローム粒子を含む黒色腐植土が堆積している。木炭は5cm前後の大きさのものも含まれ、また、これらに伴って竹や茅状の炭化物が見られ、床面上では少量の灰も検出した。

出土遺物は、木炭と伴出した陶器(常滑)・土師質土器である。



第12図 9・11・12号方形竪穴遺構、5号溝、1号井戸実測図

腐植土が見られる。

遺構は、土壌に切られている。他のピットとの切り合いは不明である。

出土遺物は皆無である。

#### 13号方形竪穴遺構（第10図、図版12）

4号溝の屈折部から東へ8mの所に位置し、平面規模2.3×2.3m、深さ0.4mの凹形の竪穴遺構である。南西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。壁は、ほぼ垂直に立ち上り、張り出し部では約45度の傾斜を持って立ち上る。北西と南東の壁際中央には、ピットが設けられている。ピットは、1辺が35cmの方形で、床から35cmの深さである。床面は平坦である。埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

遺構は、断面図ラインにかかるピットと南隅にあるピットに切られている。他のピットとの切り合い関係は不明である。また、遺構周辺のピットは、埋土の状況やその位置から本遺構に伴うと考えられない。

出土遺物は、埋土中出土の陶器片のみである。

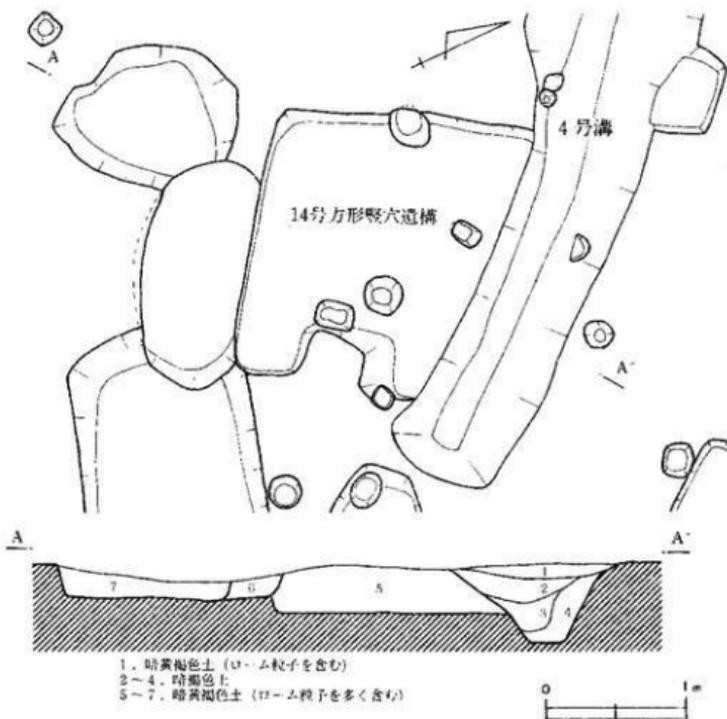
#### 14号方形竪穴遺構（第13図、図版13）

4号溝に切られる所に位置し、平面規模2.0×1.8m以上、深さ0.3mの凹形の竪穴遺構である。南東壁には内側への張り出しがあり、その平面形は台形に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が大部分を占める。床面直上には灰のうすい層が見られ、西隅付近では、厚さ約5cmに及ぶ。灰の中には、焼土と茅状の炭化物が含まれる。

遺構は、ピット・4号溝・土壌に切られている。

出土遺物は皆無である。



第13図 14号方形竪穴遺構、4号溝実測図

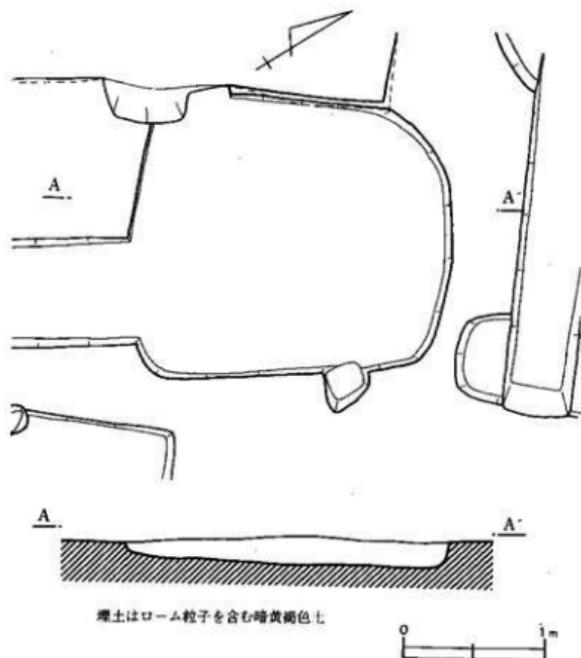
15号方形竪穴遺構 (第14図)

2号井戸の南に位置し、東西2.0m、南北2.3m、深さ0.2mの隅丸正方形の竪穴遺構である。壁はゆるい傾斜で立ち上る。床面は平坦であり、特に踏み固めた痕跡はない。

埋土は、ローム粒子を含む黒色褐色土の単一層である。

遺構は、南辺と南西隅を上層に切られている。ピットとの切り合いは不明である。

出土遺物は皆無である。



第14図 15号方形竪穴遺構実測図

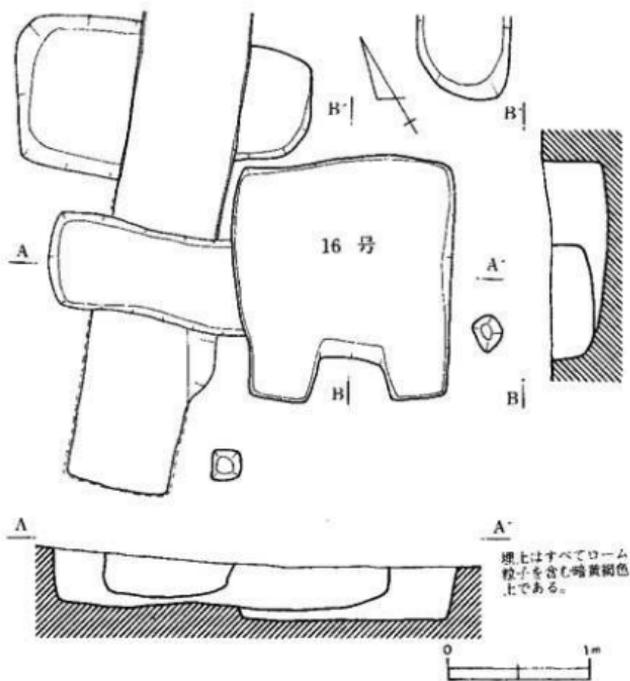
16号方形竪穴遺構（第15図、図版13）

4号溝の南2mに位置し、平面規模1.7×1.6m、深さ0.5mの凹形の竪穴遺構である。南西壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は台形に近い。壁は、張り出し部を含めてほぼ垂直に立ち上る。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

遺構は、土壌に切られている。

出土遺物は皆無である。



第15図 16号方形竪穴遺構実測図

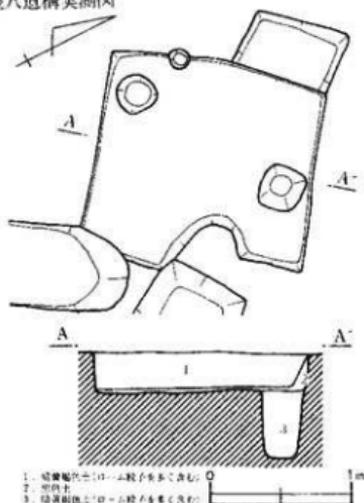
17号方形竪穴遺構 (第16図、図版14)

4号溝の屈折部付近に位置し、平面規模1.4×1.5m、深さ0.3mの凹形の竪穴遺構である。南東壁中央に張り出し部を持ち、その平面形は半円に近い。壁は、張り出し部を含めてほぼ垂直に造られている。

埋土は、床面直上の厚さ約5cmの灰層と、その上に堆積しているローム粒子を含む黒色腐植土である。

遺構は、北部と南部を上壁に切れ、断面図ラインにかかるビットを切っている。他のビットとの新旧関係は不明である。

出土遺物は皆無である。



第16図 17号方形竪穴遺構実測図

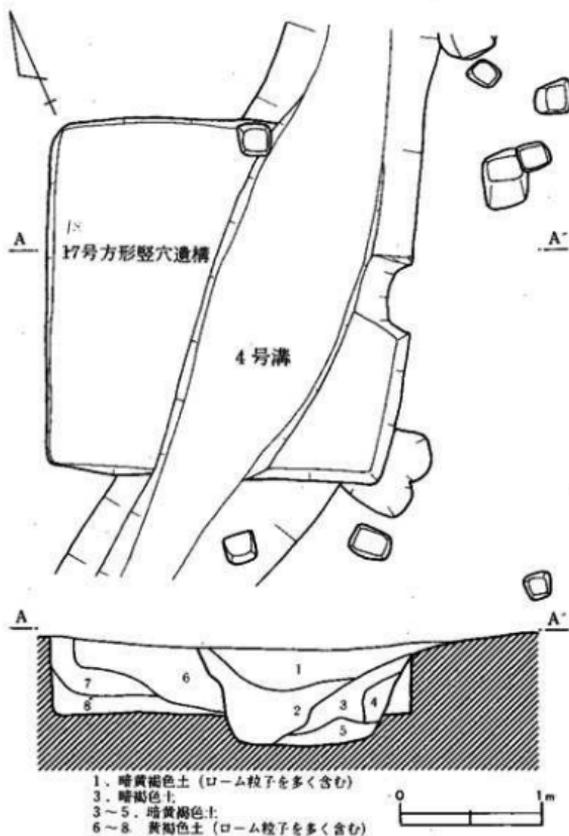
18号方形竪穴遺構 (第17図、図版14)

4号溝に切られる所に位置し、平面規模2.5×2.5m、深さ0.6mの凹形の竪穴遺構である。南東壁中央には内側への張り出しがあり、その平面形は半円に近い。壁は、張り出し部も含めてほぼ垂直に造られている。床面は平坦である。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

4号溝は、本遺構を切り、ピットと本遺構との新旧関係は不明である。

出土遺物は皆無である。



第17図 18号方形竪穴遺構

## b 掘立柱建物・堀・ピット群

### 1号掘立柱建物（第4図、図版15）

C区東部検出の東西棟掘立柱建物（長軸N-58°-W）で、規模は1間（3.5m）×3間（2.33m等間）である。柱の掘方は、径30cm、深さ60cmの円筒形を呈し、土壌に切られている。また、本遺構と2・3号方形竅穴遺構は、掘方自体は切り合わないが、その位置が重複する所にある。出土遺物は皆無である。

### 2号掘立柱建物（付図3）

C区東部、1号掘立柱建物南西で検出した東西棟掘立柱建物（長軸N-59°-W）であり、その規模は1間（2.6m）×4間（7.4m）である。柱の掘り方は、径30cm、深さ約40cmの円筒形を呈し、土壌に切られている。

1号掘立柱建物と本遺構の棟通りは、約2.2m離れてほぼ平行である。出土遺物は皆無である。

### ・3号掘立柱建物（付図3）

C区北部、堀の西で検出の南北棟掘立柱建物（長軸N-43°-E）であり、その規模は1（2.1m）×2間（2.25m等間）である。柱の掘方は径約30cm、深さ20cmの円筒形を呈す。建物は、ピットと切り合う位置にある。出土遺物は皆無である。

### 堀（付図3）

C区北部検出の東西方向の堀である。掘立柱の遺構で、その規模は5間（2.4m等間）以上である。遺構の掘方は径25cm、深さ40cmの円筒形を呈す。遺構は、土壌や4号方形竅穴遺構と切り合うが新旧関係は不明である。遺構の西限は、3号掘立柱建物の東1.5m位置となり、東限は調査区外である。出土遺物は皆無である。

### ピット群（付図1・3）

4つの掘立柱遺構の柱掘方と形状・規模・埋土の状況で類似するピット（径30～40cm、深さ10～60cm）がC区では100個以上検出されている。その類似性から、これらのいくつかは建物の掘方と考えることができる。また、ピットの埋土中からは、内耳鍋や土師質土器の小片がしばしば出土する。

ピットは、方形竅穴遺構より古いものと新しいものがあり、また、縦長の土壌より新しいものはほとんどない。溝や井戸とピットの切り合いを直接確認したものはないが、溝より古い縦

長の土壌がピットより新しいから、ピットは溝に先行するものが多いと推考できる。

ピットの検出される範囲は、西・南部で調査区の外側、北部では3号溝、東部では7号溝が限界となっている。逆に4号溝の西、3号溝の北、7号溝の東では、ピットの検出は皆無である。

出土遺物は、土師質土器（第32図2～5）と内耳鍋の小片である。これらは、ピット埋土中から出土したものであり、径30cm以内という遺構の規模から考えて、柱を抜いてから短時間に埋設したものである。従って、これらの遺物は遺構の時期をほぼ示すものと考えられる。

2は、小形の杯形土器である。3は、12号方形竪穴と接するピットから出土したものである。小形の杯形土器で、底部に焼成後に穿孔された穴がある。5は、杯形土器で口縁部に煤の付着が見られる。2～4は、底部の糸切り跡痕の上に板目状の圧痕を有す。

A区のピットにも、C区ピット同様径30cm、深さ30cm以上のものがいくつか認められるが、建物の柱掘方としてまとまるものがない。出土遺物は皆無である。

### c 土 壌

A区では、その北部に現在の畦畔の方向にほぼ平行した状態で10数基、B区では、2基、C区では、その南部を中心に数十基、D区では、その中央部に10数基、E区では、1号溝を切つて1基検出している。

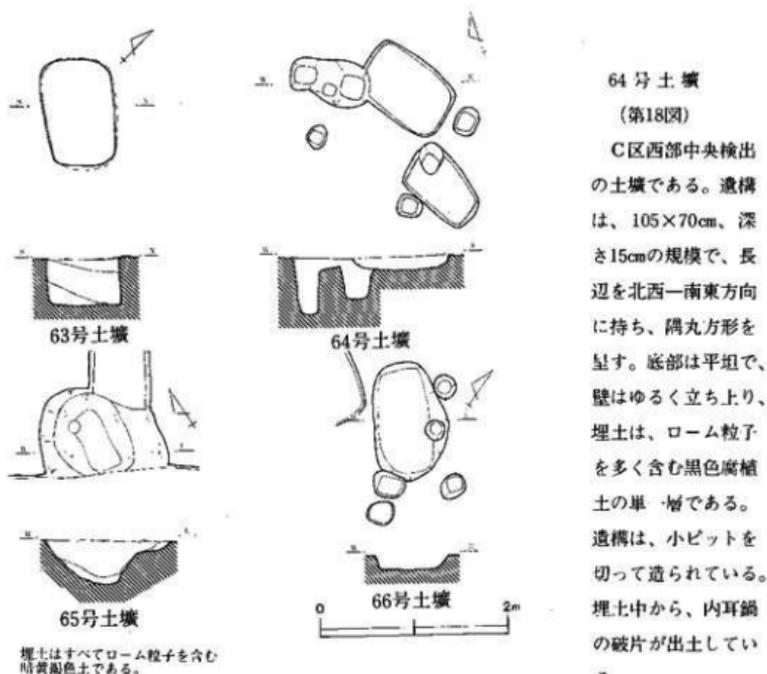
縦長の土壌は、現在でも“イモ穴”として造られており、従って検出した土壌にも近世以降のものが存在すると考えられる。しかし、土壌には、遺物がほとんど伴わず他の遺構と切り合う例も少ないため、その時間的位置づけが難しい。ここでは、遺物や切り合いの比較的多いC区の土壌を取り上げることにする。

C区の土壌には、1m内外の規模を持つものと縦長の“イモ穴”状のものがある。両者の埋土は、ロームの粒子や小ブロックを含む黒色腐植土の単一層である。また、土壌は、ピット・井戸・方形竪穴遺構（第12・18・31図）より新しいことが土層断面から確認できる。

4～6号溝は、土壌を切っているが、例外として32・34・35・47号土壌に切られている。

#### 63号土壌（第18図）

C区北西部検出の土壌である。遺構は115×75cm、深さ50cmの規模で、長辺を北西—南東方向に持ち隅丸方形を呈す。壁は、垂直もしくは、ややオーバーハングの状態で立ち上り、その造りは丁寧なものである。底部は平坦である。埋土は、ローム粒子を多く含む黒色腐植土が自然堆積したものである。埋土中から、内耳鍋の小片と土師質土器が出土している。



第18図 63～66号土壌実測図

#### 65号土壌 (第18図)

C区南東部検出の土壌である。遺構は、その平面形が120×100cmの長楕円形で、また、その深さは、45cmである。長軸はほぼ磁北の方向と一致する。壁は、だらだらと立ち上り、凹凸の激しい粗雑な造りである。底部も平坦ではない。埋土は、ローマブロックの混じる黒色腐植土が自然堆積したものである。埋土中から、内耳鍋の破片が出土している。

#### 66号土壌 (第18図)

C区西部中央検出の土壌である。遺構は、125×70cmの長楕円形で、また、その深さは15cmである。長軸は、ほぼ北西—南東方向を向いている。底部は平坦で、壁はゆるく立ち上る。遺構の造りは丁寧である。埋土は、ローマ粒子を少量含む黒色腐植土である。遺構は、南東部を小ピットに切られている。他のピットとの切り合い関係は不明である。埋土中から内耳鍋と土師質土器の破片が出土している。

出土遺物は、土師質土器 (第32図8) と内耳鍋 (第33図20) であり、他は、小片のため図化

は不可能である。8は杯形土器で、底部の糸切り離し痕の上に板目状圧痕を有す。20は内耳鍋である。口縁部が外反する器高の大きいものである。

縦長の土壌（4・32・67号土壌等）は、壁が垂直かややオーバーハングし、底部が平坦である。深さは0.1~1mとまちまちであるが、埋土はどれもローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

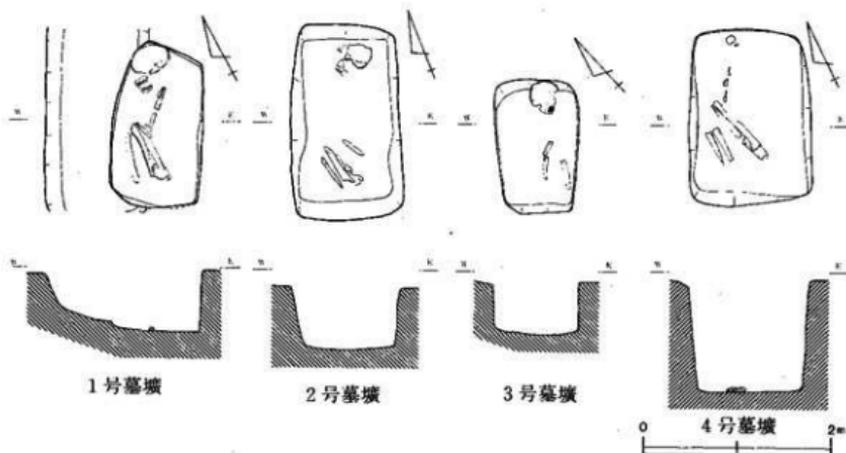
出土遺物には、土師質土器・内耳鍋が少数あるが、ほとんどが小片であり図化できるものは、4号土壌（第32図7）と67号土壌（第32図6）出土の土師質土器のみである。6・7は、杯形土器であり、底部糸切り離し痕の上に板目状圧痕を有す。

#### d 墓 墳

人骨を伴い明らかに墓墳とわかる遺構を4基検出した。遺構は、4基ともC区東部にあり、3m内外の範囲にまとまっている。またその長軸方向もほぼ等しく北東-南西であり、人骨の頭の位置も、墓墳内北東部である。

##### 1号墓墳（第19図、図版15）

遺構の平面形は、90×50cmを測る不整の長方形で、深さは約35cmである。壁は、ほぼ垂直に造られており、一部オーバーハングになっている。また、底部もほぼ平坦である。埋土は、大きなロームブロックと黒色腐植土の混じったものである。遺構は土壌67と切り合っているが新旧



第19図 1~4号墓墳実測図

は不可能である。8は杯形土器で、底部の糸切り離し痕の上に板目状圧痕を有す。20は内耳鍋である。口縁部が外反する器高の大きいものである。

縦長の土壇（4・32・67号土壇等）は、壁が垂直かややオーバーハングし、底部が平坦である。深さは0.1～1mとまちまちであるが、埋土はどれもローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。

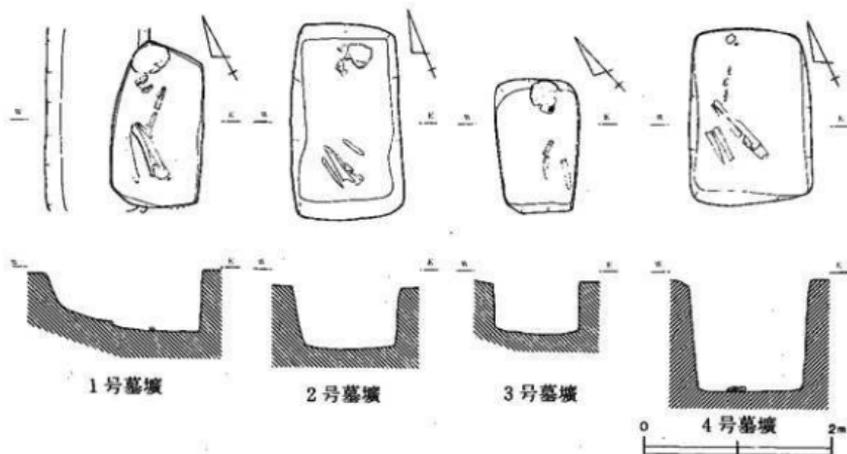
出土遺物には、土師質土器・内耳鍋が少数あるが、ほとんどが小片であり図化できるものは、4号土壇（第32図7）と67号土壇（第32図6）出土の土師質土器のみである。6・7は、杯形土器であり、底部糸切り離し痕の上に板目状圧痕を有す。

#### d 墓 塚

人骨を伴い明らかに墓塚とわかる遺構を4基検出した。遺構は、4基ともC区東部にあり、3m内外の範囲にまとまっている。またその長軸方向もほぼ等しく北東—南西であり、人骨の頭の位置も、墓塚内北東部である。

##### 1号墓塚（第19図、図版15）

遺構の平面形は、90×50cmを測る不整の長方形で、深さは約35cmである。壁は、ほぼ垂直に造られており、一部オーバーハングになっている。また、底部もほぼ平坦である。埋土は、大きなロームブロックと黒色腐植土の混じったものである。遺構は土壇67と切り合っているが新旧



第19図 1～4号墓塚実測図

関係は不明である。

検出した人骨は、膝を折り曲げて頭を北にしている。

出土遺物は皆無である。

#### 2 号 墓 塚 (第19図、図版16)

遺構の平面形は、110×55cmの長方形で、深さは、約30cmである。壁は、ほぼ垂直に、底部は、ほぼ平坦に造られている。埋土は、大きなロームブロックと黒色腐植土の混じったものである。

検出した人骨は、膝を折り曲げて頭を北にしている。

出土遺物は皆無である。

#### 3 号 墓 塚 (第19図、図版16)

遺構の平面形は、75×40cmの長方形で、深さは、約30cmである。壁はほぼ垂直に、底部もほぼ平坦に造られている。埋土は、大きなロームブロックと黒色腐植土の混じったものである。

検出した人骨は、膝を折り曲げて頭を北にしている。

出土遺物は皆無である。

#### 4 号 墓 塚 (第19図)

遺構の平面形は、95×65cmの長方形で、深さは、約60cmである。壁は、ほぼ垂直に、底部はほぼ平坦に、造られている。埋土は、大きなロームブロックと黒色腐植土の混じったものである。

検出した人骨は、膝を折り曲げて頭を北にしている。

出土遺物は皆無である。

#### e 火 葬 墓 (付図2・3)

火葬墓は、焼土や骨片がローム直上の黒色腐植土層中で検出され、掘方はローム面まで及んでいない。従って墓塚にあたる掘方は、判別しえなかった。また、遺跡全体の遺構の検出は、ローム上面の黒色腐植土をブルドーザーで排除した後行なったため、火葬墓が他に存在した可能性もある。

#### 1 号 墓

C区南端、8号住居跡の西4mで検出。250×150cmの範囲に、焼けて小片となった骨や木炭粒子・焼土が黒色腐植土中で検出された。これらを含む層は、厚さ5cm弱である。掘り方は検出していない。

遺物は、骨、焼土に伴って「宣和通寶」(1119～1124年)が出土している(第32図17、図版33)。

## 2 号 墓

B区北部、4号住居跡の北11mで検出。80×80cmの範囲に、焼けて小片となった骨や木炭粒子・焼土が黒色腐植土中で検出された。掘方は検出していない。

遺物は皆無である。

### f 地下式土壌

#### 1号地下式土壌（第20図、図版17）

本遺構は、C区中央部、5号溝と6号溝のほぼ中間点に位置する。

遺構は、竪坑とその北側に取付く地下室に分けられ、地下室は、竪坑から地下室に至る部分と、この部分から東・西・北に設けられた三つの地下室部に分けられる。主軸は、N-17-Eである。

竪坑の平面形は、直径約150cmのほぼ円形を呈す。深さは、約120cmである。断面形は、上半部がロート状、下半部が円筒形を呈す。底部は、平坦で地下室の方へゆるく傾斜する。壁は、工具痕を全面に有するが丁寧な仕上げと言える。足掛け状の遺構は、検出していない。

地下室の平面形は、三つの台形状の地下室が東・西・北の三方に張り出した状態である。地下室の床全体は、ほぼ水平で竪坑の底部との明確な境はないが約5cm低くなっている。

東室はその平面形が、奥壁幅約130cm、奥行約70cmの不正な台形である。断面形は、上幅約110cm、下幅約130cm、高さ約87cmの台形を呈す。ただし、天井部は、ほとんど剥落・落盤しているが、残存する部分からほぼ水平になると思われる。西・北室の天井部も残存部の観察から水平であると判断できる。

壁は、幅約15cmほどの工具痕を全面に残すが、全体としては丁寧な造りである。壁面下半は、鹿沼パミス層に達している。

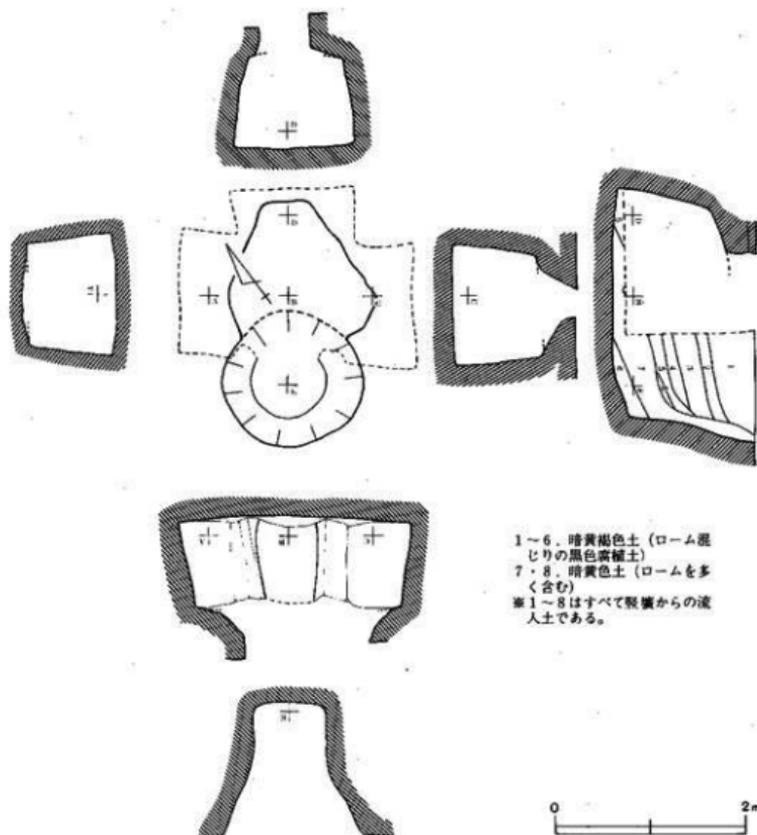
北室はその平面形が、奥壁幅約130cm、奥行約60cmの不整な台形である。断面形は、上幅約100cm、下幅126cm、高さ約95cmの台形である。天井部はほとんど落下している。

壁は、東室同様の工具痕を残すが、丁寧な造りである。

西室は、その平面形が、奥壁幅約135cm、奥行55cmの長方形である。断面形は、上幅107cm、下幅140cm、高さ92cmの台形である。天井部は大部分が落下している。

なお、竪坑から地下室に至る部分の天井部は、落下しておりその形態は不明である。

本遺構は、表土削平時に初めて天井部が落下したもので、調査前は竪坑のみが埋没し、地下室部分は、空洞であった。竪坑の埋土は、流れこみによる自然堆積であり、この中から内耳鍋の小片と土師質土器（第32図9）が出土している。9は、小形の杯形土器で口唇部に煤の付着が見られる。底部には、糸切り鎌し痕の上に板目状圧痕が見られる。



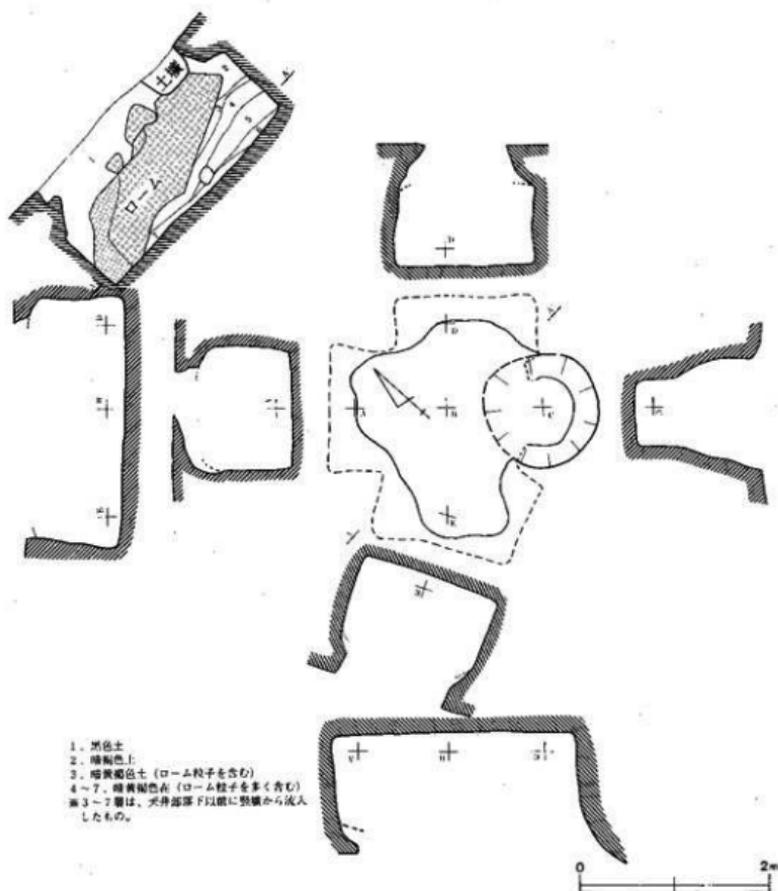
第20図 1号地下式土壇実測図

2号地下式土壇 (第21図、図版17)

本遺構は、C区堀の北側に接して位置する。

遺構は、堅壇とその北側に取付く地下室に分けられ、地下室は堅壇から地下室に至る部分と、この部分から東・西・北に設けられた三つの地下室部に分けられる。主軸は、N-38°-Wである。

堅壇の平面形は、直径約120 cmのほぼ円形を呈す。深さは約135 cmである。断面形は、上部



第21図 2号地下式土壌実測図

がロート状に開き、下部が円筒形を呈す。底部は、平坦で水平である。壁は、上半部の剥落が激しいが、下半部では工具痕を全面に有す。全体としては丁寧な造りである。足掛け状の遺構は、検出していない。

地下室の平面形は、三つの台形状の地下室が東・西・北の三方に張り出した状態である。地下室の床全体は、ほぼ平坦で水平であり、壁壁との高低差も全くない。

東室は、その平面形が、奥壁幅約150cm、奥行約120cmの長方形である。断面形は、上幅約145cm、下幅約130cm、高さ83cmの長方形を呈す。ただし、天井部はほとんど落下しているが、

残存部からほぼ水平と考えた。

壁は、幅15～20cmほどの工具痕を残すが、全体としては、丁寧な造りである。壁面下半は、鹿沼パミス層に達している。

北室は、その平面形が、奥壁幅約140cm、奥行約60cmの不正な台形である。断面形は、上幅約80cm、下幅75cm、高さ約140cmの逆台形である。天井部はほとんど剥落・落下していて旧状を想定することは困難である。

壁は、東室同様の工具痕を残すが、丁寧な造りである。

西室は、その平面形が、奥壁幅約150cm、奥行95cmのほぼ長方形を呈す。断面形は、上幅145cm、下幅約150cm、高さ約135cmのほぼ長方形である。天井部は、大部分が落下しているが、落下した天井部のロームを観察すると、天井部は、ほぼ水平であったことがわかる。

本遺構は、確認時にすでに完全に落下・埋没していた。埋土は、落下した天井のロームを境にして、竪堀からの流れ込み土と落下後の埋土に分けられる。前者は、自然堆積と考えられ、竪堀底部直上から内耳鍋の破片が、また、地下室中央の床面直上でこね鉢状の石製品が出土している。後者も、自然堆積であり、土壌に埋土を切られている。この埋土中から内耳鍋の破片と土師質土器(第32図10)が出土している。10は、杯形土器で底部に糸切り離し痕を有す。

### 3号地下式土壌(第22図、図版18)

本遺構は、C区3号溝の南4mに位置する。

遺構は、2つの竪堀1・2とその北側に取付く地下室に分けられる。これらは、確認時には、完全に埋没していた。主軸は、N-52-Eである。

竪堀1は、その平面形が直径約100cmの円形を呈す。深さは、約140cmである。断面形は、上部がやや開く円筒状である。底部は、ほぼ平坦で、地下室に向かってゆるく傾斜している。壁は、工具痕を全面に残す粗雑な造りである。足掛け状の遺構は、検出していない。

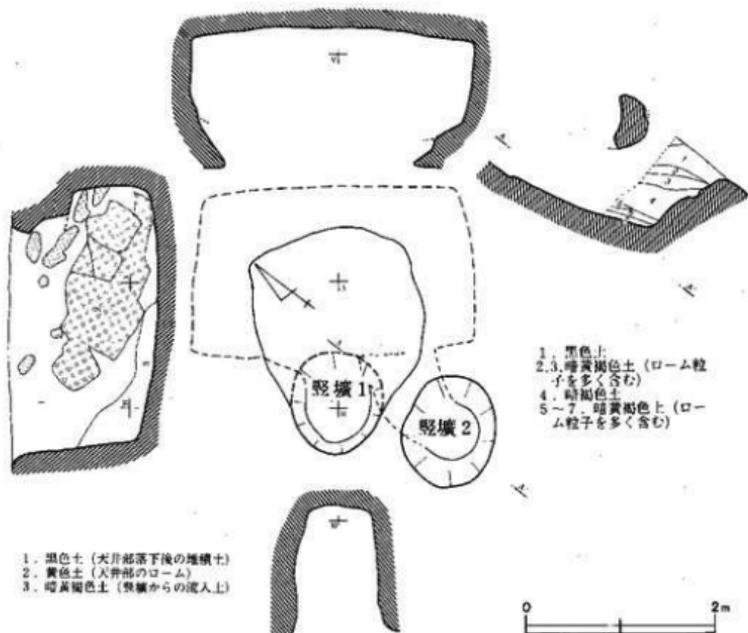
竪堀2は、その平面形が直径約100cmの円形を呈す。深さは、約110cmである。断面形は、ローム状を呈す。底部は、平坦で地下室の方へゆるく傾斜する。壁は、工具痕を全面に残す粗雑な造りである。足掛け状の遺構が、南壁上半部で1個検出された。

地下室の平面形は、東西300cm、南北180cmの長方形である。断面形は、高さ約90cmの外側にふくらむ長方形で、天井の中央部は、落下しているが、落下した地下室を埋めている天井部のロームを観察すると、ほぼ水平であったことがわかる。

床は、竪堀1からゆるく傾斜して、地下室中央部で最も底くなり、地下室壁際では、中央部より10cm程高くなる。また、竪堀2から地下室に至る部分には、明瞭な2cm程の段差がある。

壁は、幅15cm前後の工具痕が荒々しく残る粗雑な造りである。

埋土は、竪堀1からの流れ込み土の上に天井の落下ロームが堆積し、その上に、黒色土が堆



第22図 3号地下式土塼実測図

積した状態である。埋土はすべて自然堆積と判断できる。出土遺物には、内耳鍋、土師質土器釘（第32図16）があるが出土層位は、釘を除いて落下ロームの上の層である。釘は、角釘で頭部が長方形に造られている。

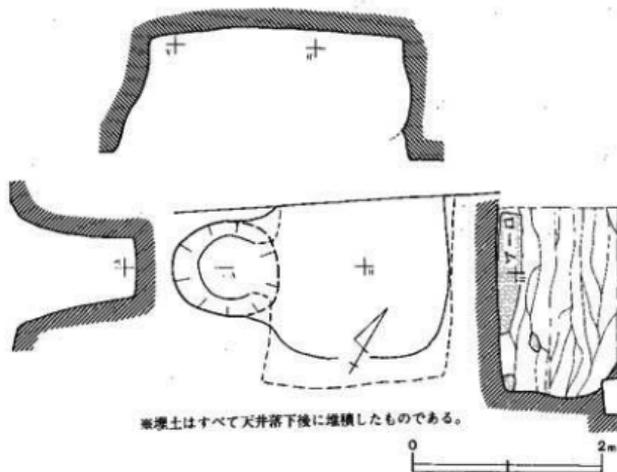
竪坑2の埋土は、自然堆積であり、この中から5cm前後の川原石数個と青磁碗・常滑・土師質土器（第32図11）・内耳鍋それぞれの小片が出土している。青磁碗は小片であるが、外表面に銅葉文を配するものであることがわかる。釉薬は、やや暗い緑色で、貫入が見られる。

2つの竪坑はその埋土の切り合いから新旧関係はつかめなかったが、地下室の正面中央にくる竪坑1が先行するものと判断できる。

#### 4号地下式土塼（第23図）

本遺構は、C区3号溝の南約3mに位置し、4号地下式土塼の西約2mの所にある。地下室の西部は調査区外に及んだため未調査である。

遺構は、竪坑とその北側に取付く地下室に分けられ、確認時には両者とも完全に埋没してい



第23図 4号地下式土壙実測図

のと思われる。断面形は、高さ約90cmの外わんする長方形で、天井の中央部は落下しているが、落下して地下室を埋めているロームを観察すると、天井部はほぼ水平であったことがわかる。

床は、壙壁からゆるく傾斜して地下室に至り、中央部が最も低くなるが全体としてみれば、ほぼ平坦と言える。地下室床と壙壁底部との明瞭な境は存在しない。

壁は、幅15cm前後の工具痕が荒々しく残る粗雑な造りである。

埋土は、断面観察の位置が壙壁から離れていたため、そこからの流れ込み土は見られず、床面直上には落下した天井のロームが、その上には黒色土が自然堆積している。埋土上半で、土師質土器・内耳鍋片が出土している。

埋土は、土壙に切られている。

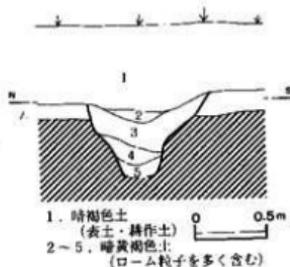
## g 溝

### 2号溝 (付図2、第24図)

B区中央に検出した溝で、1号溝とほぼ平行に東西方向に延びる。

遺構は、幅0.75m、深さ0.6mで、断面形は底部をU形とするV字状である。溝はほぼ一直線に東西方向へ延びて調査区外に及ぶ。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が自然堆



第24図 2号溝南北断面図

積したものである。調査区東壁の土層断面によると、本溝の掘方は、耕作土直下から確認することができる。

出土遺物は皆無である。

### 3号溝（付図3、第25図）

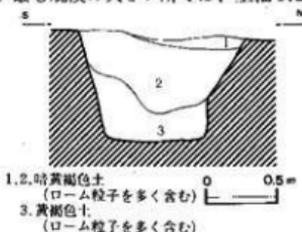
C区北部で検出した溝である。遺構は、ほぼ東西方向にまっすぐ延び、調査区東部で終る。遺構の西限は、調査区外に及ぶため不明である。

遺構は、その西部と東部で規模を異にしていることから、何度か造り直されている可能性がある。このことは、遺構の埋土断面では確認できない。最も規模の大きい所では、上幅1.2m、下幅0.7m、深さ0.8mである。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が自然堆積したものであり、その中に、水が流れた痕跡を認めることはできない。

遺構は、ピット、土壌と切り合うがその新旧関係は不明である。また、C区でピットの検出された範囲は、この溝を境としてその南側に限られる。

出土遺物は、埋土中出土の土師質土器（第32図14）・内耳鍋の小片である。14は、杯形土器で内湾ぎみに立ち上る体部を持つ。底部には糸切り離し痕を有す。



第25図 3号溝南北断面図

### 4号溝（第13図、図版20）

C区西部で検出の溝であり、東端を5号溝にほぼ接して西に延び、北折して調査区外に及ぶ。規模は、上幅1.1m、下幅0.2m、深さ0.8mで、掘方はV字状を呈す。埋土は、自然堆積である。

遺構は、方形竪穴遺構、土壌を切るが、ピットとの新旧関係は不明である。

出土遺物は、すべて埋土下半からのもので土師質土器（第32図12・13）と内耳鍋（第33図18・19）がある。12・13は、杯形土器であり、底部に糸切り離し痕を有す。18は、2個一対の内耳を持つ土鍋であり、外面には煤の付着が顕著である。19は、口縁部が外反する内耳鍋であり、外面には煤の付着が顕著である。

### 5号溝（第12図、図版21）

C区中央部で検出した東西の溝である。規模は、幅1.1m、長さ7mで、V字状を呈す。埋土は、ほとんど鹿沼バミス土である。遺構は、9号方形竪穴遺構を切り、1号井戸に切られている。出土遺物は無い。

宝木段丘においては、宝木ローム中に鹿沼バミス層が見られる。本遺構埋土として見られる大量の鹿沼バミスは、この土層まで掘り込まれた遺構の掘り上げ土と考えられる。C区において鹿沼バミス層に達する掘方を持つ遺構は、地下式土壇と井戸である。5号溝の周辺では、1・3・4号井戸、1号地下式土壇がこれにあたる。1号井戸は、5号溝と埋土が切り合うため除かれる。すなわち、5号溝の埋土は、3・4号井戸、1号地下式土壇のいずれかの掘り上げ土と推考でき、5号溝と1号井戸の構築の間には、井戸もしくは地下式土壇が造られていることも考えられる。

#### 6号溝 (第26図、図版21)

C区南部で検出した東西の溝で、西の端で北へゆるくカーブする。全長約27mである。規模は、幅約1m、深さ約0.4mであり、底部はほぼ平坦である。



埋土はすべてローム粒子を含む暗黄褐色土である。

第26図 6号溝南北断面図

埋土は、ロームブロックの混じる黒色腐植土が自然堆積したものである。

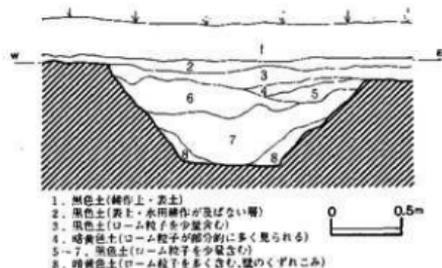
本遺構は、32・34・35・47号土壇によって切られ、また、これら以外の土壇(但し、本遺構と切り合うもの)より

新しい。

出土物には、内耳鍋・土師質土器それぞれの小片が少量あるのみである。

#### 7号溝 (第27図、図版22)

C区東部で検出した溝である。遺構は、ほぼ南北方向にまっすぐ延び、調査区南限付近で約110°西方に折れて、調査区外に及ぶ。遺構規模は、その断面観察によると上幅1.8m、F幅0.7m、深さ0.7mである。



1. 黒色土(耕作土・表土)
2. 黒色土(表土・水田耕作が及ばない層)
3. 褐色土(ローム粒子を少量含む)
4. 暗黄褐色土(ローム粒子が部分的に多く見られる)
- 5-7. 黒色土(ローム粒子を少量含む)
8. 暗黄褐色土(ローム粒子を多く含む、壁のくずれこみ)

第27図 7号溝南北断面図

遺構は、耕作土直下から掘り込まれており、埋土は自然堆積したものである。ローム粒子を含む黒色腐植土の溝埋土には、水が流れた痕跡は認められない。

遺構は、ピットと切り合うが、その新旧関係は不明である。またC区でピットの検出される範囲は、この溝を境としてその西側に限られる。

出土遺物は、溝埋土中出土の土師質土器・内耳鍋の小片である。

## h 井戸

### 1号井戸（第11図、図版9・23）

C区中央に位置する素掘りの井戸であり、5号溝を切っている。

平面形は、径約2.4mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、その上半部が鹿沼バミスを大量に含む層で、下半部が黒色腐植土である。

遺物には、埋土中から出土した須恵器の甕・蓋・常滑の大甕の破片がある。

本遺構はピットと切り合うが、新旧関係は不明である。

### 2号井戸（第28図）

C区西部に位置する素掘りの井戸であり、16号方形竪穴遺構の南約4mの所にあたる。

平面形は、径約1.7mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が自然堆積したものであり、土壌に切られている。

出土遺物は皆無である。

### 3号井戸（第28図）

C区西部に位置する素掘りの井戸であり、5号溝の南約4mの所にあたる。

平面形は、径約2.2mのほぼ円形で、断面形は、上半部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が自然堆積したものであり、土壌に切られている。

出土遺物は皆無である。

### 4号井戸（第29図）

C区中央部に位置する素掘りの井戸であり、1号円形土壌を切って構築されている。

平面形は、径約2.5mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、上半部が鹿沼バミスを含む層、下半部が黒色腐植土層である。

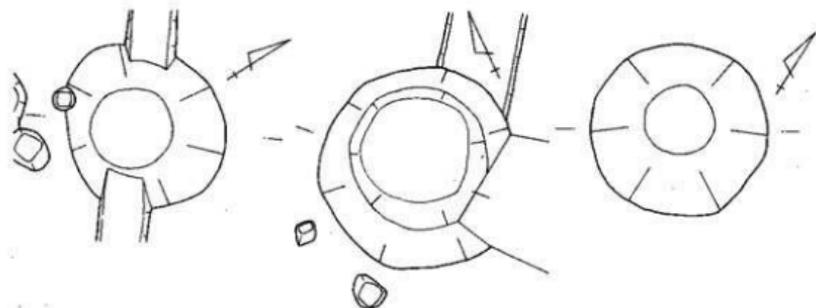
出土遺物は、埋土上半から出土した内耳鍋と麁状のタタキ目を持つ常滑の小片である。

### 5号井戸（第28図）

C区東部に位置する素掘りの井戸であり、4・6号方形竪穴遺構の南・東にあたる。

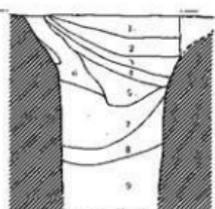
平面形は、径約1.9mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が自然堆積したものである。



2号井戸

1. 黒色土
2. 暗黄褐色土 (ローム  
粒子を多く含む)
- 3-5. 黒色土



3号井戸



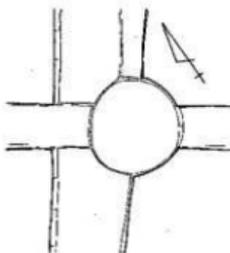
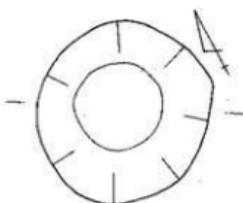
6号井戸

3号井戸

1. 暗黄褐色土
- 2,3. 黒色土
- 4,5. 暗黄褐色土 (ローム粒子を含む)
6. 黒色土
7. 暗褐色土
- 8,9. 黒色土

6号井戸

1. 黒色土
2. 暗黄褐色土
3. 黒色土
- 4-7. 暗黄褐色土
8. 黄褐色土 (ロームの層)
9. 暗黄褐色土
10. 黄褐色土



7号井戸



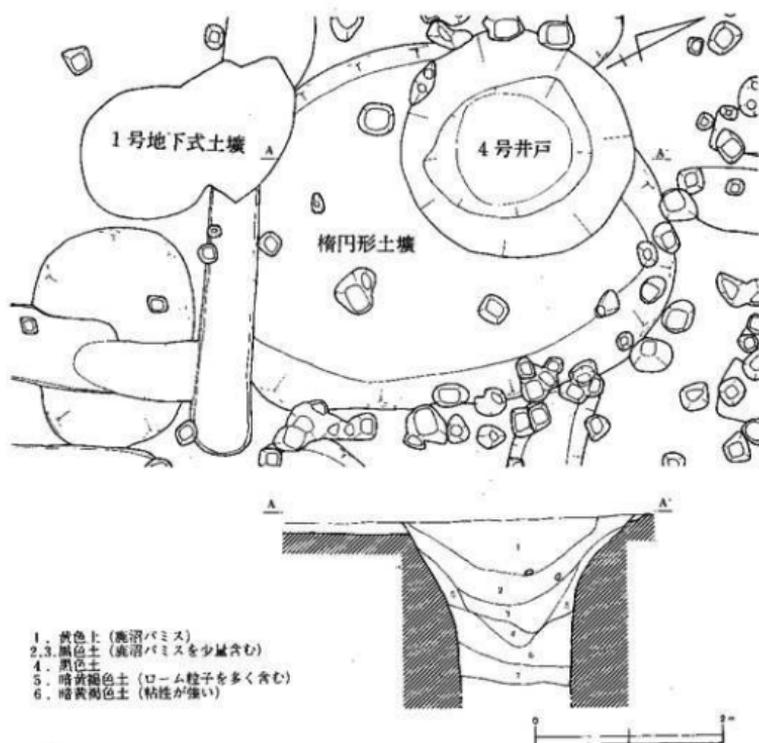
5号井戸



5号井戸

1. 黒色土
- 2-5. 暗黄褐色土 (ロームと炭屑  
パミスの粒子を含む)
6. 黒色土





第29図 4号井戸、橢円形土壌実測図

出土遺物は、埋土下半から出土した内耳鍋(第32図21)と常滑(第32図15)の破片である。

#### 6号井戸(第28図)

B区北部に位置し、4号住居跡の西14mにあたる。

平面形は、約1.8mのほぼ円形で、断面形は上部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土が自然堆積したものである。

遺物には、埋土上半から出土した須恵器杯形土器の小片があるのみである。

#### 7号井戸(第28図)

C区北西部に位置する素掘りの井戸であり、土壌に切られる。

平面形は、径約1.0mのほぼ円形で、断面形は、円筒状を呈す。  
埋土は、黒色腐植土である。出土遺物は皆無である。

#### 8号井戸（第30図）

A区北部に位置する素掘りの井戸であり、土壌に切られている。

平面形は、径約1.0mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子の混じる黒色腐植土が自然堆積したものである。

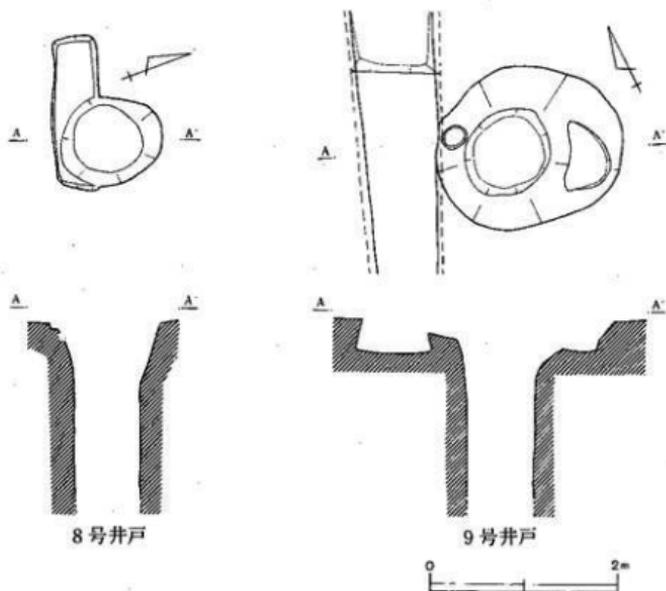
出土遺物には、埋土中から出土した内耳鐃の破片がある。

#### 9号井戸（第30図）

A区中央部に位置する素掘りの井戸であり、土壌に切られている。

平面形は、東西2.0m、南北1.8mのほぼ円形で、断面形は、掘方上部がやや外方に開く。

埋土は、ローム粒子の混じる黒色腐植土が自然堆積したものである。出土遺物は皆無である。



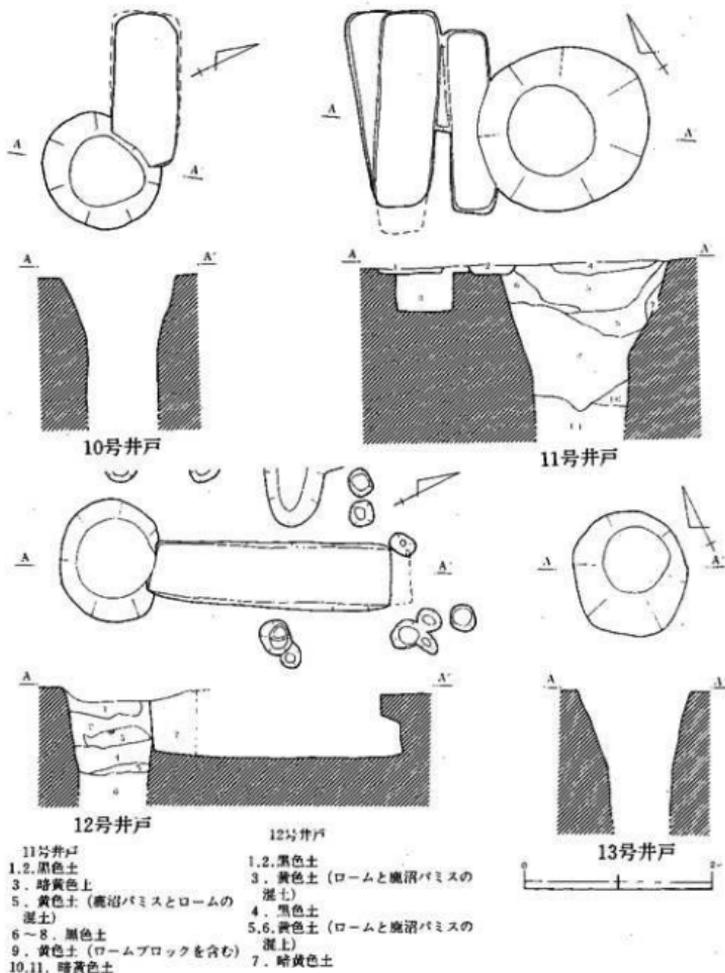
第30図 8・9号井戸実測図

10号井戸 (第31図、図版24)

C区南東部に位置する素掘りの井戸であり、土壁に切られている。

平面形は、径約1.2mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子の混じる黒色腐植土が自然堆積である。出土遺物は皆無である。



第31図 10~13号井戸実測図

11号井戸 (第31図、図版24)

C区南東部に位置し、土壌に切られる。

平面形は、径約1.8mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

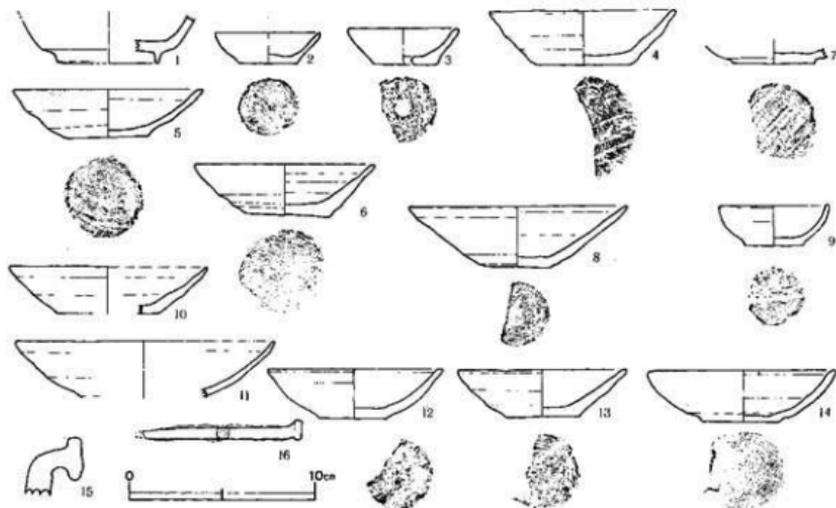
埋土は、上半に大量の鹿沼バミス・ロームブロック、下半に黒色腐植土が堆積したものである。埋土にロームブロックや鹿沼バミスが多いことから少なくとも上半部は人為的な埋没と考えられる。出土遺物は皆無である。

12号井戸 (第31図)

C区南東部に位置し、土壌に切られている。

平面形は、径約1.1mのほぼ円形で、断面形は、円筒形を呈す。

埋土は、黒色土・ローム・鹿沼バミスの混土である。出土遺物は皆無である。

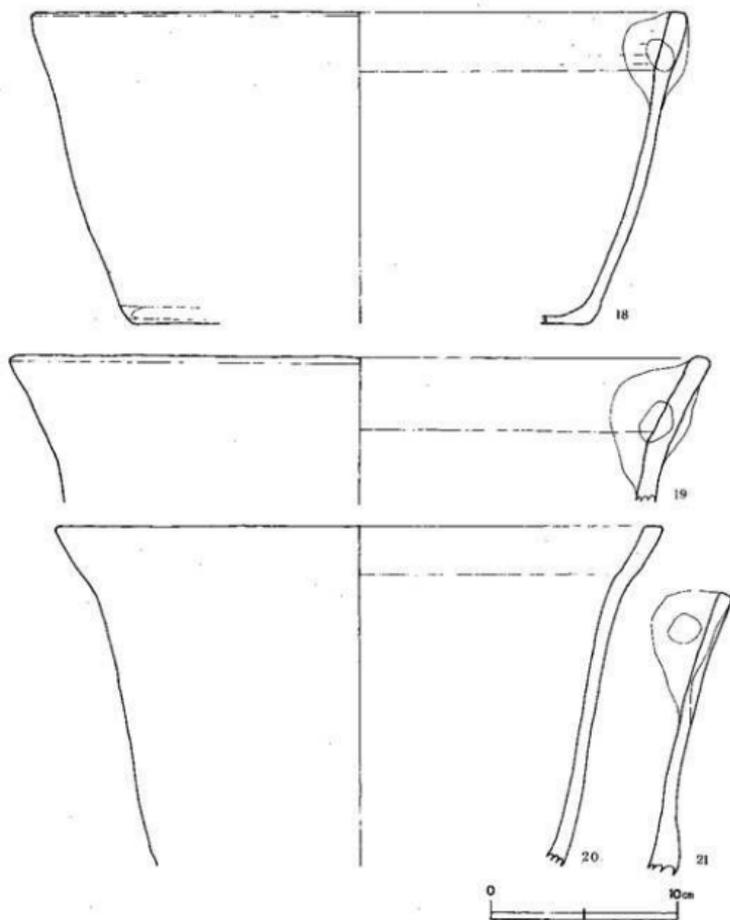


- (1：7号方形竅穴、2～5：小ピット、6：67号土壌、  
 7：4号土壌、8：66号土壌、9：1号地下式土壌、  
 10：2号地下式土壌、11・16：3号地下式土壌、  
 12・13：3号溝、14：3号溝、15：5号井戸、17：1号火葬墓)



17

第32図 中世遺構出土遺物実測図



(18・19：4号溝、20：66号土壇、21：5号井戸)

第33図 中世遺構出土遺物実測図

13号井戸 (第31図)

C区最東部に位置する。

平面形は、径約1.2mのほぼ円形で、断面形は、上部がロート状を呈す。

埋土は、ローム粒子の混じる黒色腐植土が自然堆積したものである。出土遺物は皆無である。

#### i その他の遺構

##### 楕円形土壇（第29図）

C区中央、4号井戸に切られ、1号地下式土壇と接する位置にある。

遺構の平面形は、5.0×3.9mの南北に長い楕円形を呈す。掘方は深さ15cmの皿状であり、壁と呼べるような急角度の立ち上りはない。床はほぼ平坦で、非常に硬く踏み固められている。埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。遺構は、土壇・井戸に切られ、遺構内外のピットは、本遺構の前後もしくは同時期に造られたものである。

出土遺物には床面直上で出土した常滑の甕と土師質土器の破片がある。

##### 集石（第4図、図版25）

3号方形竪穴遺構の北側で検出した遺構で、縦長の土壇の壁をこわして構築されている。集石は、径60cm、深さ15cmの円形掘方内に川原石によって造られたものであり、西端を別の縦長の土壇に切られている。出土遺物は皆無である。

## 4 竪穴住居跡の調査

### 1号住居跡（第34図、図版26）

A区中央部に位置し、2号住居跡の北10mである。

本遺構の平面形は5.9×5.8m以上の隅丸方形を呈し、北壁には竈が設けられている。主軸は、N-12°-Eである。

壁は、高さ36cmであり、急角度で立ち上る。

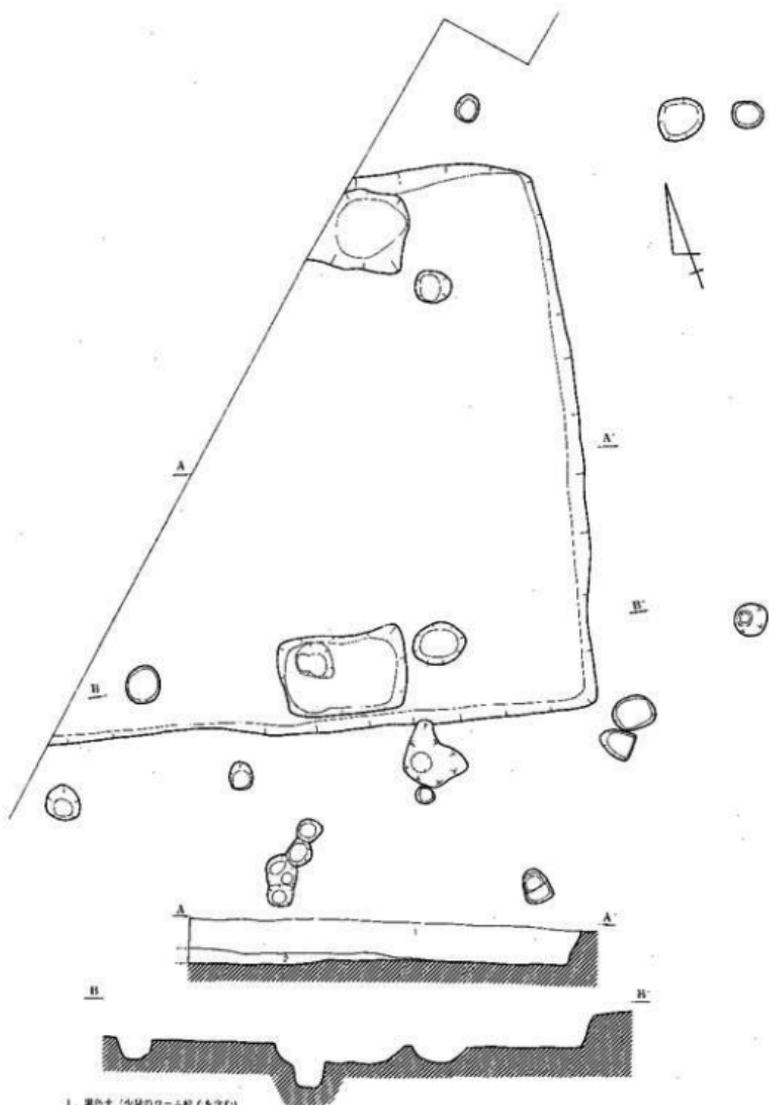
床は平坦であるが、踏み固められたような硬い部分はない。周溝は見られない。南壁際には、1.3×0.8m、深さ約0.2mの方形の土壇が設けられている。竈東側に接して径0.8m、深さ0.2m、の円形の土壇が設けられている。

柱穴は、床面から20cm前後の浅い掘方で、径約40cmである。屋外柱穴は存在しない。

竈は、調査区外に及ぶが、焼土が遺構北西部に検出されたため、その位置を北壁に考えた。

埋土は、ローム粒子を含む黒色土であり、床面直上には焼土混じりの土が薄く堆積する。遺構は自然埋没である。

出土遺物は、埋土中出土の土師器杯形土器2点である。1は、小形で丸底の杯形土器であり体部外面に稜を持つ。2は、丸底の杯形土器であり体部外面に稜を持つ。この他に、埋土中から須恵器蓋形土器の宝珠状つまみ部が出土している。



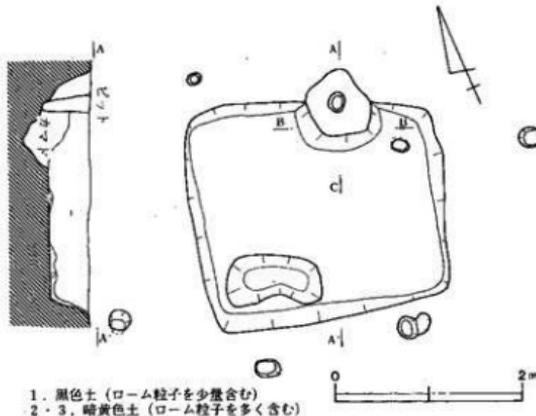
1. 黄粘土 (少量のローソク粒子を含む)
2. 暗褐色土 (ローソク粒子が非常に多い)

第34区 1号住居跡実測図

2号住居跡 (第35・36図、図版26)

A区中央部に位置し、1号住居跡の南10mである。

本遺構の平面形は2.4×2.7mの不整な隅丸方形を呈し、北壁には竈が設けられている。主軸



第35図 2号住居跡実測図

は、N-16°-E である。

壁は、高さ40cmであり、急角度で立ち上る。

床は、平坦であるが踏み固められたような硬い部分はない。周溝は見られない。

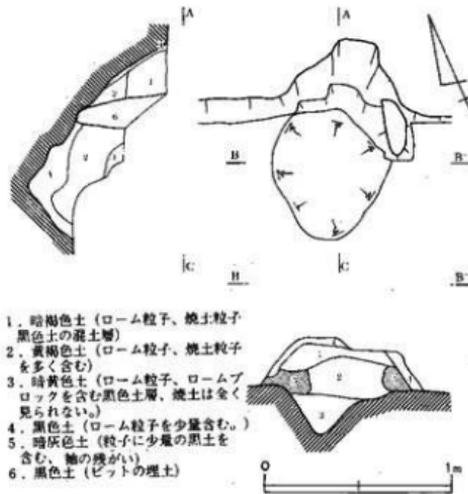
南西隅には、1×0.4m、深さ0.3mの土壇が施けられている。

柱穴は、屋内、屋外ともに存在しない。

竈は、壁と床を掘り込んで構築されている。袖は、黒色土混りのロームで造られ、天井部は、崩落している。煙道部の掘方は壁を80cmほど掘り込み造られている。

埋土は、ローム混りの黒色土が自然堆積したものである。また、竈は小ピットによって切られている。

出土遺物に図示で



第36図 2号住居跡竈実測図

きるものはないが、破片を見ると、体部外面に稜を持つ丸底の土師器杯形土器や同じく土師器で、扁平な半球状を呈す丸底の杯形土器（内外面に磨きを有す）があることがわかる。

### 3号住居跡

（第37・38図、図版27）

A区南部に位置し、2号住居跡の南7mである。

本遺構の平面形は、3.2×3.9mの隅丸方形を呈し、北壁には竈が設けられている。主軸は、N-16°-Eである。

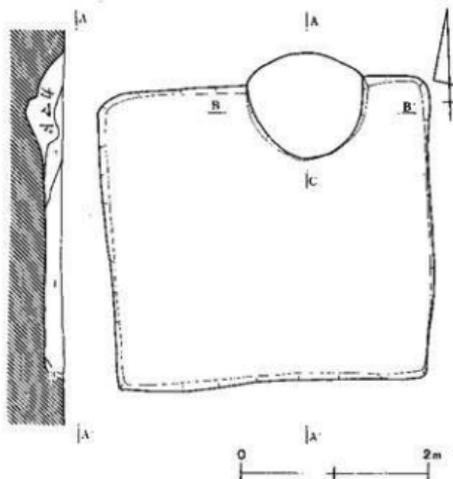
壁は、高さ18cmであり、急角度で立ち上る。

床は、平坦であるが踏み固められたような硬い部分はない。周溝は見られない。竈の東側には、径60cmの土壇が設けられている。柱穴は、屋内、屋外ともに存在しない。

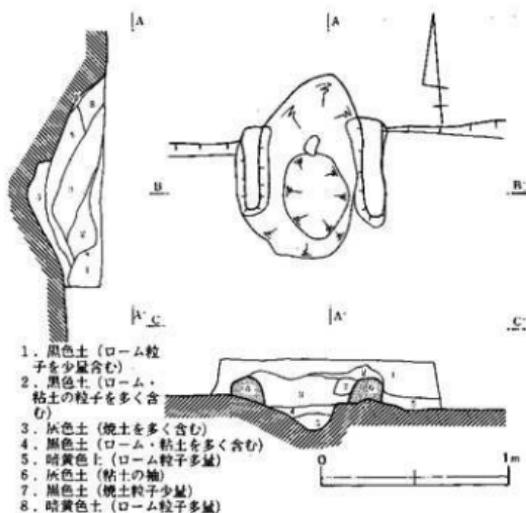
竈は、壁と床を掘り込んで構築されている。袖は、粘質土によって造られ、天井部は崩落している。

埋土は、ローム混じりの黒色土が自然堆積したものである。

出土遺物は、竈中から出土した土師器杯形土器（4）と床面上から出土した土師器変形土器（3）



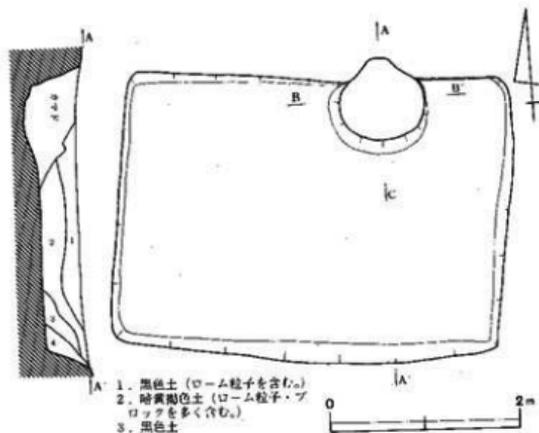
第37図 3号住居跡実測図



1. 黒色土（ローム粒子を少量含む）
2. 黒色土（ローム・粘土の粒子を多く含む）
3. 灰色土（焼土を多く含む）
4. 黒色土（ローム・粘土を多く含む）
5. 暗黄色土（ローム粒子多量）
6. 灰色土（粘土の袖）
7. 黒色土（焼土粒子少量）
8. 暗黄色土（ローム粒子多量）

第38図 3号住居跡竈実測図

2点である。4は、偏平な半球状を呈す器形で、底部が丸底の杯形土器である。3は胴部が球状を呈す丸底の小形甕形土器である。この他に、破片であるが体部外面に稜を持つ丸底の土師器杯形土器が埋土中より出土している。



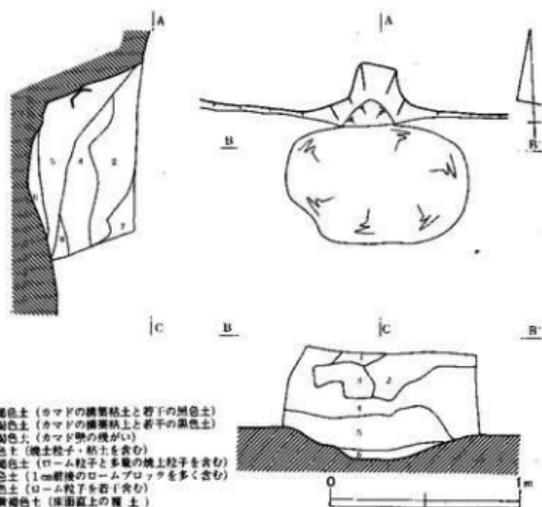
第39図 4号住居跡実測図

4号住居跡  
(第39・40図、図版27)  
B区北部に位置し、  
5号住居跡の北10mで  
ある。

本遺構の平面形は、  
3×4.1mの隅丸方形  
を呈し、北壁には竈が  
設けられている。主轴  
は、N-9°-Eである。  
壁は、高さ40cmであ  
り、急角度で立ち上る。  
床は、平坦であるが  
踏み固められたような  
硬い部分はない。周溝  
は見られない。柱穴は、  
屋内・屋外ともに存在  
しない。

竈は、壁を円形に、  
床を浅い皿状に掘り込  
んで構築している。袖  
・天井部は残存しない。  
埋土は、ローム混り  
の黒色腐植土が自然堆  
積したものである。

出土遺物は、床面上  
から出土した土師器杯  
形土器2点である。5  
は、偏平な半球形を呈



第40図 4号住居跡竈実測図

す丸底の杯形土器である。6は、体部外面に稜を持ち、口縁部がやや内湾する丸底の杯形土器である。

5号住居跡  
(第41・42図、図版28)  
B区中央部に位置し、4号住居跡の南10mである。

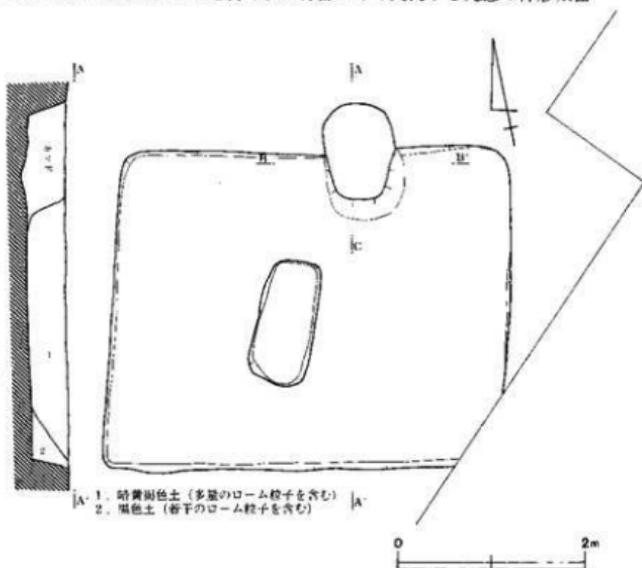
本遺構の平面形は、3.4×4.2mの隅丸方形を呈し、北壁には竈が設けられている。主軸は、N-14°-Eである。

壁は、高さ40cmであり、急角度で立ち上る。

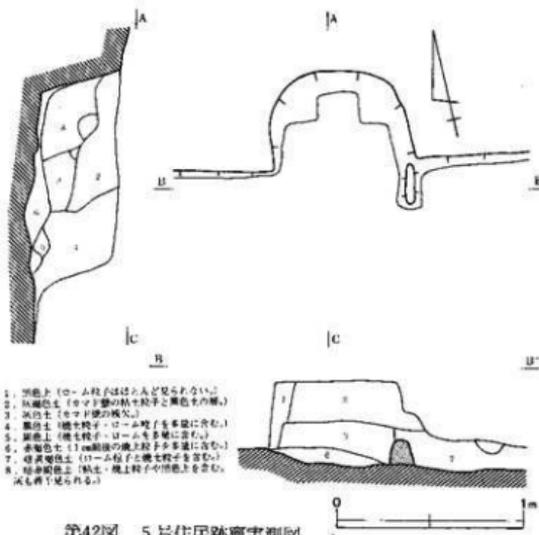
床は、平坦であるが踏み固められたような部分はない。周溝は見られない。柱穴は、屋内・屋外ともに存在しない。

竈は、壁を凸状に掘り込んで構築している。軸は、粘質土によって造られており、天井部は、残存していない。

埋土は、ローム混りの黒色腐植土が自然堆積したものである。住居跡中央部は、



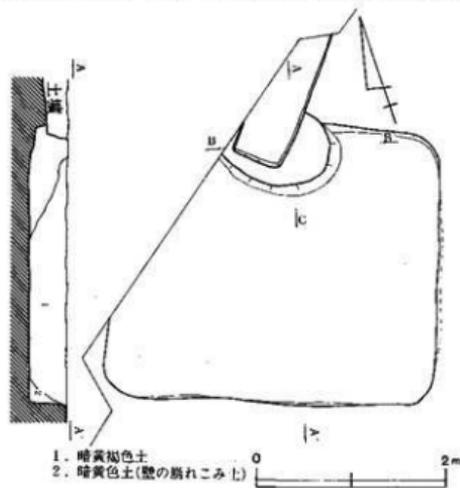
第41図 5号住居跡実測図



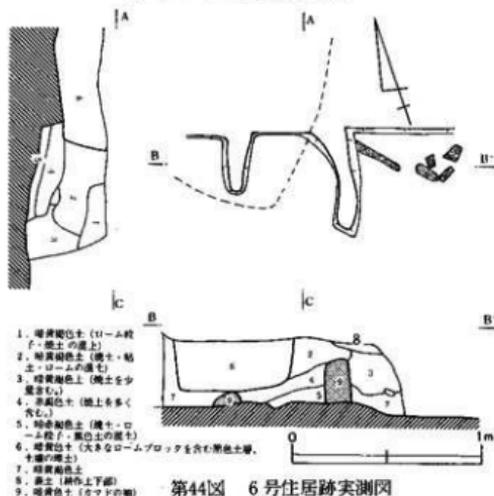
第42図 5号住居跡竈実測図

土壁に切られている。

出土遺物は、床面上から出土した土師器杯形土器2点(9・7)と埋土中出土の土師器杯形土器(10)・埴形土器(8)である。7は、体部外面に稜を持つ丸底の杯形土器である。8は、半球形を呈する埴形土器で、体部外面に低い稜を持つ。9は、偏平な半球形を呈する器形で、丸底の杯形土器である。10は、体部外面に稜を有す丸底の杯形土器である。



第43図 6号住居跡実測図



第44図 6号住居跡実測図

### 6号住居跡

(第43・44図、図版29)

B区南部に位置し、7号住居跡北25mである。

本遺構の平面形は、2.9 × 3.5mの隅丸方形を呈し、北壁には竈が設けられている。

上軸は、N-21°-Eである。

壁は、高さ40cmであり、ほぼ垂直に立ち上る。

床は、平坦で硬く踏み固められている。周溝は見られない。柱穴は、屋内・屋外ともに存在しない。

竈は、土壁に切られており、粘質土で造られた袖部が残存するのみである。

埋土は、ローム混じりの黒色腐植土が自然堆積したものである。

出土遺物には、埋土中出土の土師器杯形土器がある。12は、偏平な半球状を呈す丸底の杯形土器である。

この他に破片ではあるが、体部外面に稜を持つ丸底の土師器杯形土器が出土している。

### 7号住居跡

(第45図、図版29)

C区中央部に位置し、8号住居跡の北60m、6号住居跡の南である。

本遺構の平面形は、3×3.6mの隅丸方形を呈し、北壁中央には竈が設けられている。

主軸は磁北方向である。

壁は、高さ15cmであり、急角度で立ち上る。

床は、平坦であるが、踏み固められたような硬い部分はない。周溝は、見られない。柱穴は、その埋土の状況から中世のピットと判別が困難である。また、4つのピットをむすぶ線が正四角形を造るようなピットの位置関係はない。以上のことから住居跡に伴う柱穴は存在しないと考えられる。

なお、屋外柱穴についても、それと判断できるものは存在しない。

竈は、壁と床を掘り込んで構築されているが袖等の施設は残存しない。

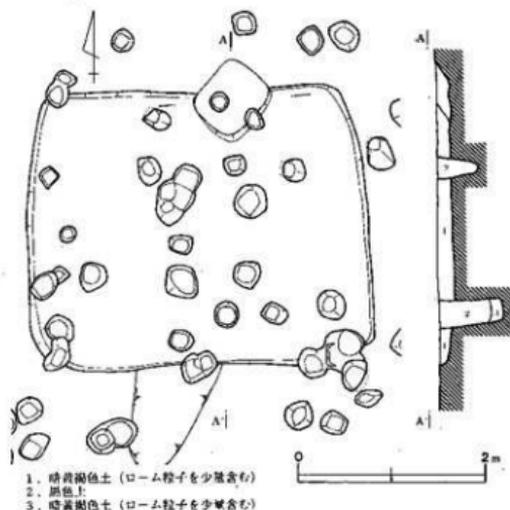
埋土は、ローム粒子を含む黒色腐植土の単一層である。また中世のピットがこの埋土を切っている。

出土遺物は、数片の土師器破片のみである。

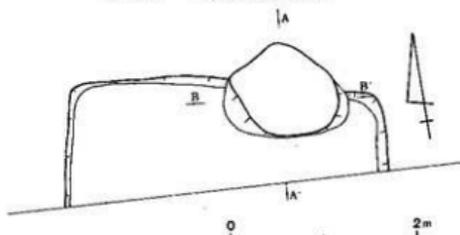
### 8号住居跡 (第46・47図)

C区南端に位置し、7号住居跡から南60mである。

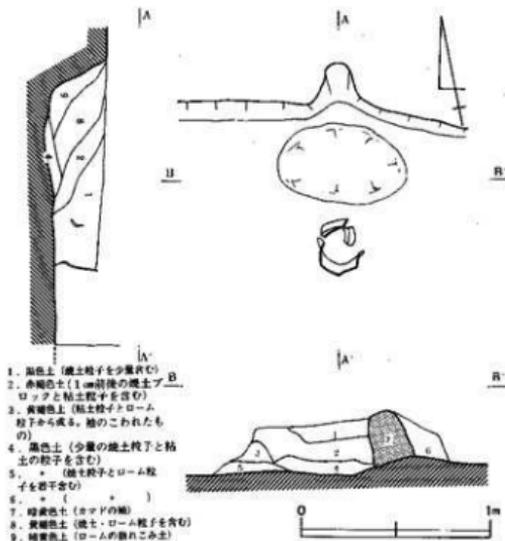
本遺構の平面形は、東西3.4mで、南壁は調査区外に及ぶため不明であるが、隅丸方形にな



第45図 7号住居跡実測図

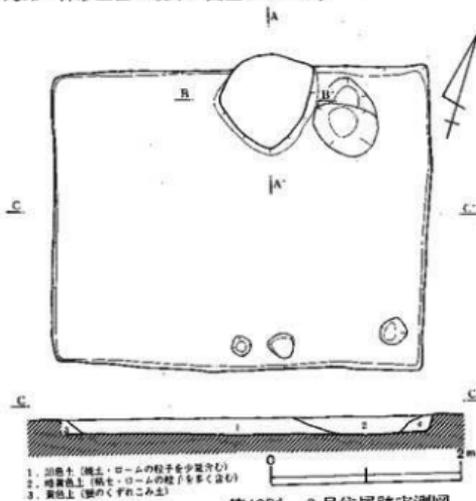


第46図 8号住居跡実測図



第47図 8号住居跡実測図

変形土器の3点である。11は、体部下端と底部全面を剝削り調整した高台付須恵器杯形土器である。13は、体部に稜を持ち、口縁部がやや内弯する丸底の杯形土器である。16は、口縁部が胴部から直線的に開く変形土器で、全体として薄く造られている。この他に、偏平な半球状を呈す丸底の杯形土器の破片が出土している。



第48図 9号住居跡実測図

ると考えられる。竈は、北壁に造られており、袖の一部が残存する。

壁は、高さ40cmであり、急角度で立ち上る。

床は、平坦であるが踏み固められていない。周溝は検出されない。柱穴は、調査範囲内では検出していない。

埋土は、ローム粒子の混じる黒色土が自然堆積したものである。

出土遺物は、竈周囲の床面上出土であり、須恵器杯形土器・土師器杯形土器・

#### 9号住居跡

(第48・50図、図版30)

D区東部に位置し、10m以内に10・11号住居跡がある。

本遺構の平面形は、3.7×4.2mの隅丸方形である。

竈は北壁中央に設けられている。主軸はN-11°-Eである。

壁は、高さ30cmであり、急角度で立ち上る。

床は平坦であるが踏み固

められていない。周溝は検出していない。北東隅には、径50cmの土壇が設けられている。柱穴は、プランのコーナー付近にあり、掘方の規模は、およそ径40cm、深さ40cmで、さらに径約25cmの柱痕跡を確認している。屋外柱穴は検出していない。

竈は、床・壁を掘り込んで造られている。袖は、粘質土によって造られ、天井部は残存していない。

埋土は、ローム粒子の混じる黒色腐植土が自然堆積したものである。

出土遺物は、小片のみで図化できるものがない。しかし、破片を

見ると、体部外面に稜を持つ丸底の土師器杯形土器や扁平半球状を呈す丸底の土師器杯形土器が含まれていることがわかる。

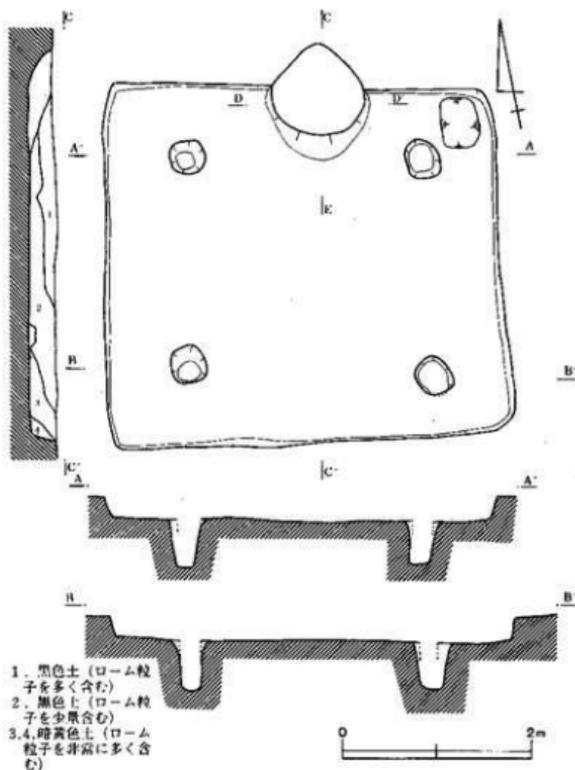
10号住居跡 (第49・51・54・55図、図版31)

D区東部に位置し、9・11号住居跡に隣接する。

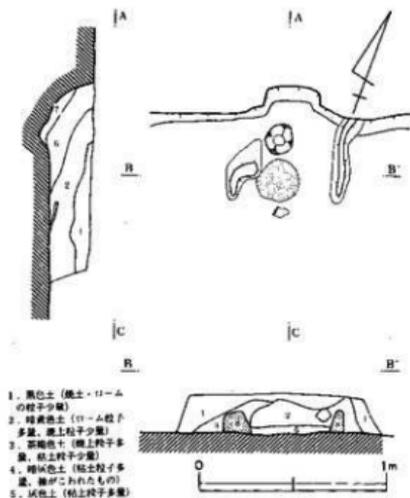
本遺構の平面形は、3.2×3.5mの隅丸方形である。竈は北壁中央やや東寄りに造られている。土軸は、ほぼ磁北方向である。

壁は、高さ20cmであり、急角度で立ち上る。

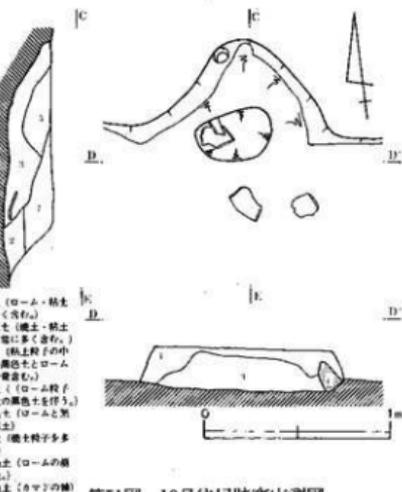
床は平坦であるが踏み固められていない。なお、周溝は見られない。柱穴は屋内・屋外ともに存在しない。



第49図 10号住居跡実測図



第50図 9号住居跡竈実測図



第51図 10号住居跡竈実測図

壁は、高さ50cmであり、垂直に近い状態で立ち上る。

床は、平坦であるが踏み固められていない。カマドの東側・住居跡の北東隅には、径30cmの土竈が設けられている。柱穴は、住居跡内外ともに存在しない。

竈は、北壁に凸形の掘方、床に小円形の掘方を設けて構築されている。袖は、ローム混じりの粘質土によって造られている。天井部は残存しない。残存する両袖の中間の床が赤く焼けていることからこの部分が焚口と考えられる。

埋土は、ローム混じりの黒色腐植土が自然堆積したものである。

出土遺物は、土師器杯形土器2点(14・15)と土師器甕形土器3点(17・18・19)で、17・18は竈中から出土したものである。15は、体部外面に横を持つ丸底の杯形土器である。14は、扁平な半球形を呈す丸底の杯形土器である。17は、胴部のふくらみがほとんどなく、ややくびれた頸部から直線的に開く口縁部を持つ甕形土器である。18は、胴部が球形を呈し、口縁部が外反する甕形土器である。19は、胴部の張った大形の甕形土器である。

#### 11号住居跡

(第52・53・55・56岡、岡版32)

D区東部に位置し、9・10号と隣接する。

本遺構の平面形は、3×3.5mの隅丸方形である。竈は北壁中央よりやや東寄りに設けられている。

竈は、北壁に凸形の掘方、床に径1mの掘方を設けて構築されている。袖は、ローム混じりの粘質土によって造られている。天井部は残存しない。

埋土は、ローム混じりの黒色腐植土が自然堆積したものである。

出土遺物は、土師器杯形土器

1点(21)と土師器変形土器6点

(20・22~26)で、22・24・26は

竈内から出土したものである。

21は、口縁部がやや内弯する丸

底の杯形土器である。20は、大

形の変形土器の底部付近である。

22は、長胴の変形土器である。

胴部はふくらみをほとんど持た

ず、口縁部は外反する。23・24

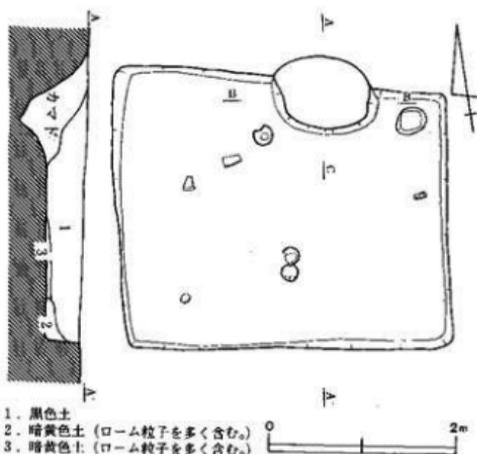
は、胴部の張る変形土器の口縁

部であり、どちらも非常に焼成

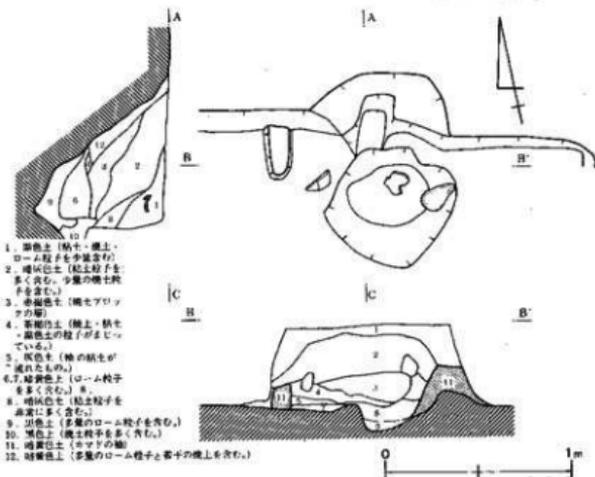
・胎土が良い。26は、長胴の変

形土器である。25は、胴部が球

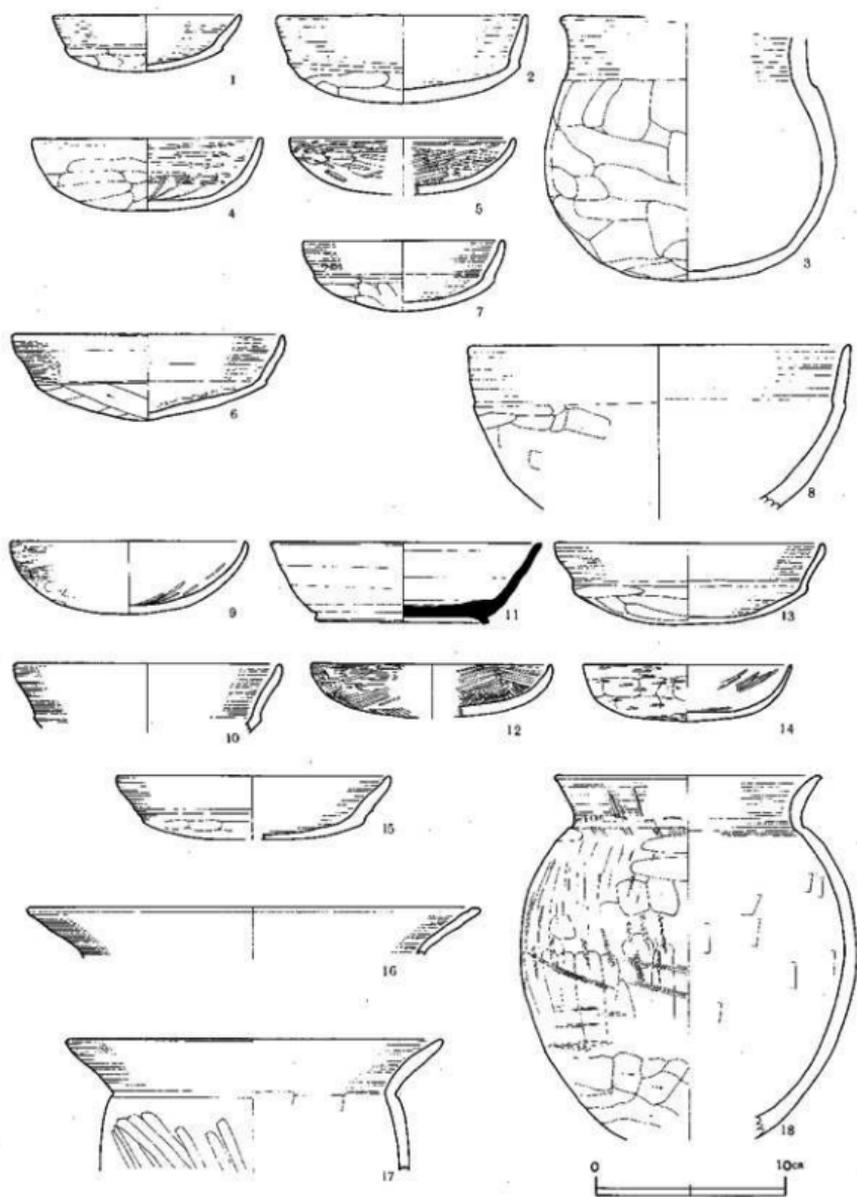
形を呈し、口縁部の外反する変



第52図 11号住居跡実測図

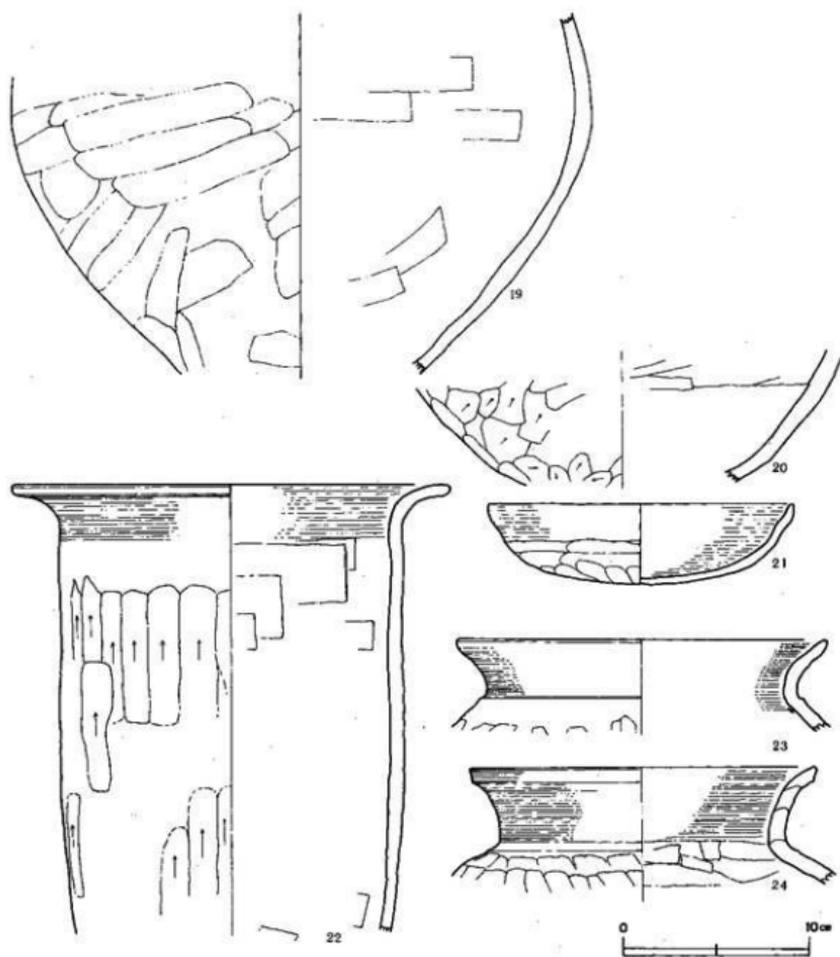


第53図 11号住居跡実測図

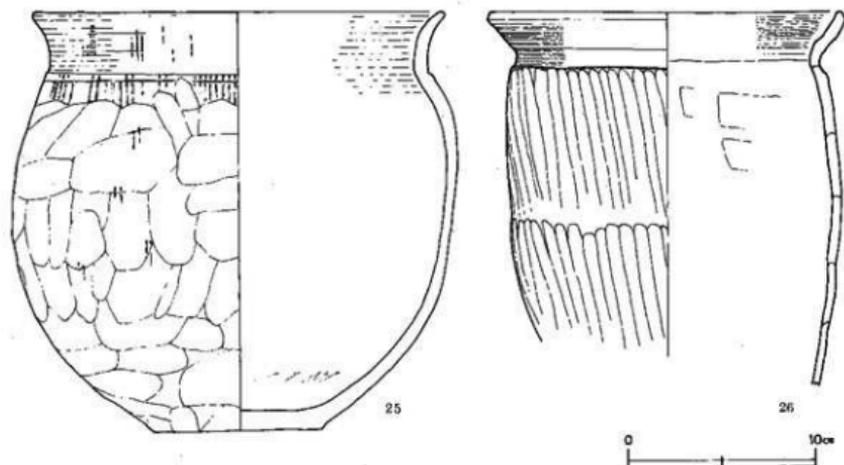


第54图 住居跡出土土器実測图 (1号: 1·2, 3号: 3·4, 4号: 5·6, 5号: 7~10, 6号: 12, 8号: 11·13·16, 10号: 14·15·17·18)

形土器である。この他に、偏平な半球形を呈す土師器杯形土器の破片が出土している。



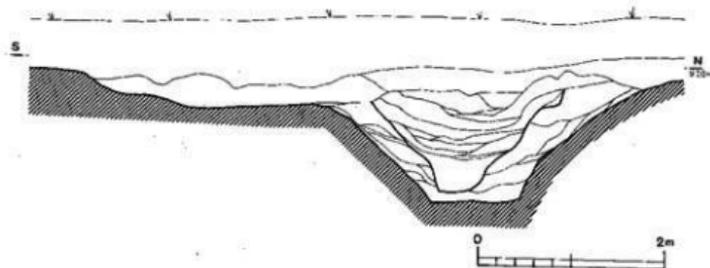
第55図 住居跡出土土器実測図 (10号: 19、11号: 20~24)



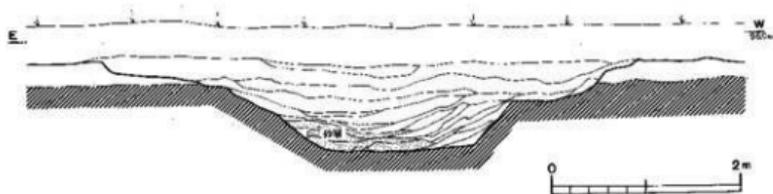
第56図 11号住居跡出土土器実測図

## 5 大溝跡の調査 (1号溝)

溝は、B区中央、道路の南側に北西—南東方向に延び、E区でも北西—南東に延びる。また、B区西方で下水道工事中に溝を検出した。これらの溝は、その規模（幅・深さ）・走向から同一の遺構と考えられる。



第57図 1号溝 (B区) 南北断面図



第58図 1号溝 (E区) 東西断面図

#### B区の溝断面

溝は、一度完全に埋没してから掘り直されていることが土層断面よりわかる。最初の溝 (I期) は、上幅3.7m、下幅0.9m、深さ1.4mの逆台形を呈す。溝の南側の肩部から南へ約3.5mの幅で溝に沿って遺構が存在する。遺構は深さ30~40cmで底部は、ハードローム上面に及び平坦である。埋土の状況から溝と同時存在であることがわかる。北側は道路になっているため同一の施設が存在するかは未確認である。

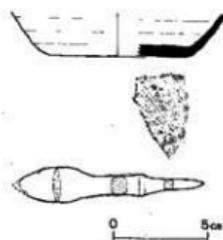
I期の埋土は、ローム粒子を含む黒色土を主体とした自然堆積土である。溝底部直上の埋土は、粘性の強い黒色土であり、この土層の存在は、溝に水が流れたことを意味するものである。掘り返しの溝 (II期) は、I期の溝と同様の位置・走向で、幅2.1mの断面V字形で、底部がU形を呈す。溝の南側にI期のような施設はない。

埋土は、I期の溝と同様ローム粒子を含む黒色土が主体であり、溝底に水の流れた明確な痕跡は認められない。

#### E区の溝断面

溝の規模は、上幅約3.5m、下幅約0.9m、深さ0.9mである。溝は、上端から下端に至る間に両側に一度平坦部を持つ。平坦部は、幅0.7m前後である。本区では調査区両端の断面でこの平坦部を確認した。溝埋土は、すべて自然堆積によるものであり、埋土上半は、ローム混じりの黒色土を主体とし、下半は1cm前後のローム・黒色土の丸いブロックを多く含む砂質土と、粘性の強い黒色土が互層を成している。これらの特徴から、溝下半の埋土は、水の作用によって堆積したものと考えられる。

以上、B (I期)・E区検出の溝は、その外側に平坦部を持ち、北西-南東方向に延び、水が流れた痕跡を示すことから同一の溝と考えられ、さらに、B区西方で確認した溝もその延長上



第59図 1号溝 (B区) 出土遺物実測図

であり、規模も類似することから、同一のものと考えられる。

確認した溝の長さは、約400 mに及び、B区とE区の溝底部の標高差は、E区が約0.8 m低い(標高94.8m)。つまり、水は北西から南東に流れたものである。溝は、北西に延長すると姿川に至る。

出土遺物(第59図、図版33)は、B区で埋土上半から出土した須恵器杯形土器と鉄鏃である。須恵器は、底部に蹴起し痕を有し、体部にはロクロ痕が見られる。また、底部には篋状工具による線刻が見られる。鉄鏃は、全長10cm、鏃身の長さ5.8 cmである。鏃は柳葉形で、茎の断面は方形である。

注1 遺構規模の計測値は、円形の場合は張り出しのある壁とそれに対する壁間の最大値を前に記し、ピットを伴うものは、ピットのない壁の間を測ってその最大値を前に記した。深さは、遺構確認面からの計測値である。

注2 本報告では、整壊とこれに相対する地下室奥壁の中央とを結ぶラインを主軸とした。

土器番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・施成・色調	備考
32-1	高台付碗 (青磁)	— (7.6)				
-2	杯	5.5 1.7 3.1	体部は、ややふくらみながら立ち上る。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は、黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	底部の承切り磨し痕の上に 磨目状の圧痕が見られる。
-3	杯	6.0 2.0 3.2	底部は平円で、体部は直線的 に立ち上る。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 褐色。	底部の承切り磨し痕の上 に磨目状の圧痕が見られる。 底部は焼成後穿孔さ れている。
-4	杯	(10) 3.0 (5.1)	底部と体部の境にはっきりし た線を有さない。	内外面にロクロ使用。	胎土は黄砂粒を多く含む良質。 焼成良好。 淡褐色。	底部に縦目状の圧痕を有 す。
-5	杯	10.2 2.7 4.2	体部は、ややふくらみながら 立ち上る。底部から体部に至 る部分がややくびれるような 形状。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	
-6	杯	9.7 2.8 4.3	体部は、ほぼ直線的に立ち上 り口縁部が内寄りである。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	底部の承切り磨し痕の上 に磨目状の圧痕が見られる。
-7	杯	— — 4.4	底部から体部に至る部分が、 ややくびれるような形状。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	底部の承切り磨し痕の上 に磨目状の圧痕が見られ る。
-8	杯	(11.8) 3.3 3.5	底部が小さく、体部は直線的 に立ち上る。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	底部の承切り磨し痕の上 に磨目状の圧痕が見られ る。
-9	杯	6.0 3.2 3.1	底部から体部に至る部分がや やくびれるような形状。 体部は内寄りである。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は良質。 焼成良好。 淡褐色。	口縁部の一部にススの付 着あり。底部の承切り磨 し痕の上に磨目状の圧痕 が見られる。
-10	杯	10.8 2.5 5.3	体部は、直線的に立ち上る。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	
-11	杯	(14.0) — —	口縁部は内寄りである。	内外面にロクロ使用。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	
-12	杯	(9.4) 2.7 3.7	食体的にゆがみが目立つ。	手捏の成型。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 褐色。	
-13	杯	9.0 2.6 3.9	体部は、ほぼ直線的に立ち上 る。	内外的にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 褐色。	内面は全面にわたってス スが付着し、それが口縁 部に及ぶ部分がある。
-14	杯	10.2 2.8 4.1	体部は、内寄りに立ち上る。	内外面にロクロ使用。 底部承切り磨し。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 淡褐色。	
-15	甕	— — —	大甕の口縁部。			口縁部に褐色の色が見られる。
23-18	内耳鉢	25.0 17.0 24.0	底部は平円で、胴部に直線的 に立ち上る。口縁部は平円。 内面に軽い段を有す。内写は 2張一組で、対見られ、その 位置は、口縁部直下である。	口縁部は内外両面磨で、 体部下部は鎌刀状の磨り。 内写は貼り付けによる。	胎土は金雲母を含み良質。 焼成良好。 色調は内面暗褐色、外面黒色。	底部を除く外面全体に灰 の付着が顕著。
-19	内耳鉢	(37.3) 9.0以上 —	口縁部は外反する。口縁部は 平円。内写は口縁部直下に貼 けられている。内面に軽い段 を有す。	口縁部は内外両面磨で、 内写は貼り付けによる。	胎土は金雲母を含み良質。 焼成良好。 色調は内面暗褐色、外面黒色。	外面全体に灰の付着が顕 著。
-20	内耳鉢	(52.5) 18.5以上 —	体部は底部から直線的に立ち 上る。口縁部は平円。口 縁部は平円で、内面に軽い 段を有す。内耳鉢は底存し ていない。	口縁部は内外両面磨で、	胎土は金雲母を含み良質。 焼成良好。 色調は内面暗褐色、外面黒色。	外面全体に灰の付着が顕 著。
-21	内耳鉢	15.0以上 —	体部は底部からやや外反さ みに立ち上る。口縁部は平円 でこの處下に内写が貼けら れている。	口縁部は内外両面磨で、 内写は貼り付けによる。	胎土は金雲母を含み良質。 焼成良好。 色調は内面暗褐色、外面黒色。	外面全体に灰の付着が顕 著。
34-1	杯	10.0 3 光沢	体部外面に軽い線を有す。 内面に軽い段を有す。	内面は全面磨で、 外面は口縁部磨で、底部 見限り。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 灰褐色。	
-2	杯	13.7 13 光沢	体部外面に軽い線を有す。 内面に軽い段を有す。	内面は全面磨で、 外面は口縁部磨で、底部 見限り。	胎土は黄砂粒を含み良質。 焼成良好。 灰褐色。	
-3	甕	13.4 14.1 光沢	口縁部は平円で、口縁部が外 反する。胴部は球形を呈す。 小形で光沢の優。	口縁部は内外両面磨で、胴 部・底部見限り。	胎土は黄砂粒を多く含む。 硬く焼きまわっている。 淡褐色。	

土器番号は、神田番号に従った。法量は、口径、器高、底径の順で示した。

工器番号	器種	法量	器形の特徴	装置の特徴	粘土・焼成・色調	備考
14-1	杯	12.2 3.9 丸底	扁平な半球状を呈す。	内面は滑で後蓋厚き。 外面は、口縁部積層で以下 見出し。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 5	杯	(12.0) (2.0) 丸底	扁平な半球状を呈す。	内面は滑で後蓋厚み。 外面は、先削り後蓋厚き。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 6	杯	14.5 4.6 丸底	外部外面に軽い稜を有す。 内面に軽い段を有す。 口縁部は内寄り。	内面は全面滑で、外面は、 口縁部積層で、後蓋厚み。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 7	杯	10.7 3.7 丸底	外部外面に軽い稜を有す。 内面に軽い段を有す。	内面は全面滑で、 外面は、口縁部積層で、後 蓋厚み。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 8	碗	(20.2) — —	半球形を呈し、外部外面に 明瞭な稜を有す。 内面に軽い段を有す。	口縁部の内外面積層で、口 縁部以外の内面は滑、口 縁部を除く外面は、口縁部 積層で後削り、その後削り。	粘土は微砂粒を多く含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 9	杯	12.6 3.9 丸底	扁平な半球状を呈す。	内面は全面滑。 外面は、削り後削り。	粘土は微砂粒を多く含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 10	杯	(14.2) — —	外部外面に軽い稜を有す。 内面に軽い段を有す。	内面は全面滑。外面は口 縁部積層で、後削り。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
11	杯 (スズ)	14.3 4.3 丸底	平底の杯に高さ4mmの凸台を 組み付けている。凸台部は外 側に開き、その開部は扁平で なく外面積層部でやや凸となる。 蓋面には口縁部を有す。	口縁部積層。蓋部及び外 部下面を両面積層。この 積層で凸部を取りつける。	粘土は、大粒の砂粒をほとんど 含まない精選されたもので ある。 焼成良好。 均一褐色。	外部外面に積層。
— 12	杯	(12.4) (2.0) 丸底	扁平な半球状を呈す。	内面は、滑で後蓋全面平定方 向の見出し。外面は、蓋削り 後全面平定方向の見出し。	粘土は微砂粒を含む良質。 焼成良好。 赤褐色。	
— 13	杯	14.3 4.4 丸底	外部外面に軽い稜を有す。 内面に軽い段を有す。 口縁部は内寄り。	内面は全面滑で、 外面は、口縁部積層で、蓋 部厚み。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 14	杯	(11.0) 3.0 丸底	扁平な半球状を呈す。	内面は全面滑。 外面は蓋削り後蓋厚き。	粘土は微砂粒を多く含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 15	杯	11.4 (2.4) 丸底	外部外面に軽い稜を有す。 内面に軽い段を有す。	内面は全面滑で、外面は口 縁部積層で、蓋部厚み。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 16	碗	24.0 — —	口縁部は、胴部から大きく外 側に開く。胴部は大粒は口縁 部直下にくる。	口縁部内外面積層で、胴部 外面積層。	粘土中に大粒の砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
17	碗	20.0 — —	胴部から口縁部に至る部分か くびみ。口縁部は外端に大き く開く。胴部は大粒はその中 位にあるものと思われる。	内面は内外面積層で、胴部 内面は木口状工具による 積層で、外面は蓋削り。	粘土中に赤苔の粒が目立つ。 焼成良好。 内面褐色。外側は滑。	
18	碗	(14.0) — —	胴部の前面に外寄る口縁部 を有す。胴部は大粒はその中 位にある。	口縁部内外面積層で、胴部 内面は木口状工具による積 層で、外面は削り後削り。	粘土中に砂粒を多く含む。 焼成良好。 深褐色。外側の一部は滑。	
19-20	碗	— — —	胴部の胴縁を有す。	外面は平定方向の見出し。 内面は木口状工具による積 層で。	粘土中に砂粒が含まれる。 焼成良好。 赤褐色。	
20	碗	— — —	胴部平定方向の積層。球部の胴部 であったと考えられる。	外面積層。内面滑で、	粘土中に砂粒が目立つ。 焼成良好。 均一褐色。	
— 21	杯	(16.5) 4.4 丸底	外部外面に軽い稜を有す。 内面に軽い段を有す。 口縁部は内寄り。	内面は全面滑で、外面は口 縁部積層で後蓋厚み。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 22	碗	(23.5) — —	胴部はほとんど平らで、口縁部 は外寄る。	口縁部内外面積層で、胴部 内面滑で、外面積層。	粘土中に砂粒を多く含む。 焼成良好。 赤褐色。	
— 23	碗	(20.0) — —	口縁部は外寄りに立ち上る。	口縁部内外面積層で、胴部 外面積層。	粘土は微砂粒を含む精選され たもの。 焼成は非常によい。 均一褐色。	
— 24	碗	(18.0) — —	口縁部は外寄りに軽い稜を有 す。口縁部は外寄りに立ち上 る。	口縁部内外面積層で、胴部 外面積層。胴部外面積層で 内面積層。	粘土は微砂粒を多く含む良 質精選されたもの。 均一褐色。焼成は非常によい。 均一褐色。	
24-25	碗	22.0 22.3 9.0	球部の胴部を有し、口縁部は やや外反する。	上部外面を磨いた工具で滑で した。口縁部内外面積層で 胴部直削り。	粘土は微砂粒を含む。 焼成良好。 均一褐色。	
— 26	碗	19.0 — —	口縁部が外反し、胴部はやや ふくらみを持つ。	口縁部内外面積層で、胴部 内面は木口状工具による積 層で、外面は斜方向の滑で、	粘土に砂粒を多く含む。 焼成良好。 均一褐色。	

## IV ま と め

### 土師質土器

本遺跡では土師質土器は、中世の遺構のうち火葬墓・墓墳・集石を除いたものに伴って出土している。また、これらの遺構からは、土師質土器に伴って内耳鍋・青磁碗・常滑大甕が出土している。

出土した土師質土器は、第32図の13個と多数の小破片である。

土師質土器は、その大きさから、大形品(4・6・8・10・12~14)と小形品(2・3・9)に大別できる。大形品には、さらに口径が底径の3倍を超えるもの(1例)と2~2.5倍(7例)のものがある。小形品は、口径が底径の1.7~2倍にあたる。

焼成は、すべてのものが歴史時代の土師器と比べると、それより硬く焼きしまった良好なものである。

色調は、大別すると明灰褐色と明褐色に分けられる。

次に、栃木県内で唯一のまとまった資料を出している石那田館跡<sup>(1)</sup>の土師質土器と本遺跡のもの(表参照)を比較してみよう。石那田館跡の土器は、口径が9.0~10.0cmと5.5~6.0cmに、器高が2.4~3.0cmと1.5~1.9cmに、底径が3.5~4.2cmと2.5~3.0cmに集中する。このような傾向は本遺跡出土土器とほぼ一致している。この他口クロ使用痕を有することや、底部に糸切り難し痕やさらにその上に板目状円痕を有する点も両遺跡の土器に共通した特徴である。

土器番号	口 径	器 高	底 径	口径：器高：底径	口径：底径
32-4	(10)	3.0	5.1	333 : 100 : 170	196 : 100
-5	10.2	2.7	4.2	378 : 100 : 156	243 : 100
-6	9.7	2.8	4.5	346 : 100 : 161	216 : 100
-8	(11.8)	3.3	3.5	358 : 100 : 106	337 : 100
-10	10.8	2.5	5.3	432 : 100 : 212	204 : 100
-12	(9.4)	2.7	3.7	348 : 100 : 137	254 : 100
-13	9.0	2.6	3.9	346 : 100 : 150	231 : 100
-14	10.2	2.8	4.1	364 : 100 : 146	249 : 100
-2	5.5	1.7	3.1	324 : 100 : 182	177 : 100
-3	6.0	2.0	3.5	300 : 100 : 175	171 : 100
-9	6.0	2.2	3.1	273 : 100 : 141	194 : 100

土師質土器法量比一覧表

単位 cm

## 内 耳 鍋

本遺跡では、内耳鍋は土師質土器同様、火葬墓・墓塚・集石を除いた中世遺構に伴って出土している。出土した内耳鍋は、第33図の4個体と小破片である。

土器は、器高が15～20cmで、口縁部がやや外反する。内耳は、口唇部に接して作られている。18は2個一組で対であるが他は不明である。また、ほうろくと呼ばれるような器高の低いものは、破片さえも検出していない。

これらの特徴は、中村氏の内耳土器編年によれば、第Ⅱ段階（14～15世紀）の土鍋にあたる。また、この段階では、石那田館跡のような器高の低いほうろくは出現しておらず、この点で中村氏の編年と一致する。つまり、本遺跡で器高の低い内耳鍋が検出されていないのは、それが出現していない段階であるためと考えられる。

## 常 滑 大 甕

井戸・楕円形遺構・方形竪穴遺構から出土している。図示した遺物(第32図15)は、5号井戸出土の大甕の口縁部である。

赤羽氏の常滑編年<sup>(3)</sup>によれば、この土器は第Ⅲ段階（13世紀後半～14世紀中葉）にあたるものである。すなわち、所謂N字状口縁になる前の段階で、口縁部が折り返されているものの密着するほどではないのが特徴である。

この他に、簾状の押印を有す大甕の胴部破片が1片出土している。

## 方形竪穴遺構

本遺跡の18基は、すべてC区で検出したものである。遺構は、それぞれの主軸方位がほぼ一致又は、直行する位置にあり、さらに長方形の土壇や、12号掘立柱建物・塀とも同じような関係にある。

方形竪穴遺構どうしの切り合いは、9号と11号の間で見られるのみである。

他の遺構との切り合い関係から判断できる前後関係は、次のようなものである。本遺構より新しい遺構は、ビット群・4号溝・5号溝・井戸（4号）・土壇である。また、古い遺構は、ビット群のみである。

遺構の平面形には、張り出し部を持つもの（16基）と持たないもの（2基）があり、これらの中には、相対する壁中央に一对のビットを持つものがある（表参照）。ビットは、2号の埋土断面観察から柱穴と考えられる。このことから、少なくともビットを有するものは、上屋が存在したことが想定できる。ただし、張り出し部を持つ場合、柱穴は、張り出し部を含まない相対する壁に設けられている。

また、遺構の平面形は、張り出し部を除けば、ほぼ正方形で最小1.2×1.3m（10号）、最大

2.5×2.5m (18号) であり、石那田館跡や矢島遺跡のように長方形のものは、本遺跡では3号のみである。しかし3号の柱穴の位置は、上記の2遺跡が長軸上にあるのに対し、短軸上に見られる。長軸上の一方の壁には、張り出し部が設けられている。

遺構床面には、全面に灰・木炭・茅状の炭化物が見られる例(6・7・10・14・18号)があり、14号ではさらに焼土が伴う。灰・木炭粒・焼土が遺構から検出されるという事実は、この中で火が焚かれたことを示すものであろうか。

しかし、他の12基の方形竪穴遺構には、全く火の焚かれた痕跡がない。また、灰等を伴う遺構の床は、全く焼けておらず、もし火を焚いたとしても、それは、何度も行なわれたものではない。

これらの遺構から検出された灰等が堆積したのは、火災によるものと考えた方がより理解できる。つまり、6・7・10・14・18号は同時存在であり、埋土中に灰層が見られる1号は、火災が起きたときには、埋設途中にあったもので、埋土中に木炭や灰を含まない2・5・8・9・11~13・15~17号はすでに埋没していたものと考えられる。

また、火災の裏づけとして、さらに、他のいくつかの土壌の埋土中位で灰まじりの層が検出されていること、溝43で木炭が数個検出されていることがあげられる。小ピットに関しては、埋土の観察が不十分であったため、木炭や灰の有無は不明である。

栃木県内で方形竪穴遺構が検出された遺跡は、本遺跡の他、石那田館跡(3基)・赤塚遺跡<sup>(5)</sup>(9基)・下古館遺跡<sup>(6)</sup>(1基)である。これらのうち張り出し部を持つものは下古館遺跡の例のみである。その遺構は、3.0×3.3mの規模で、床面に焼土が見られる。ピットの有無は不明である。

石那田館跡・赤塚遺跡の例は、本遺跡の2号に類する形態である。すなわち、方形の竪穴に一定の柱穴を有するものとそうでないものである。

赤塚遺跡では竪に関する遺構と考えているが、前に掲げた矢島遺跡や石那田館跡の例のように、館内の建物に接してそれらと同時存在していたことから考えて、妥当な見解ではないと思われる。

ここでは、遺構の機能については明確にはできないが、埋葬に関わるものではなく、集落内の建物に接して検出されることから、石那田館跡で述べているような厨房もしくは、貯蔵に関するものと考えることとする。

遺構 番号	平面規模	深さ	張り出し 部の有無	ピットの 有無	焼土・炭化物	出土遺物	その他
1	1.6×1.6m	0.5 (m)	○	×	埋土中に灰層	なし	
2	1.7×1.6	0.2	×	○	なし	なし	床面直上に黒色腐植土層
3	1.9×1.3	0.5	○	○	なし	なし	
4	2.1×2.3	0.3	○	×	なし	なし	床上に30cmの川原石
5	1.4×1.2	0.7	○	×	なし	なし	
6	2.4×2.3	0.5	○	×	床全面に木炭を伴う灰層	なし	
7	2.0×2.6	0.3	○	○	床全面に灰層	灰中から青磁碗出土	
8	1.6×1.4	0.6	○	×	なし	なし	
9	2.4×2.4	0.4	○	×	なし	なし	
10	1.2×1.3	0.5	○	×	床面に茅状の炭化物と木炭を含む層	木炭中から滑石の破片と土師質土器	
11	1.7×1.5	0.5	○	○	なし	なし	
12	2.3×2.1	0.5	?	○	なし	なし	
13	2.3×2.3	0.4	○	○	なし	なし	
14	2.0×1.8	0.3	○	×	床面に焼土・茅状の炭化物を含む灰層	なし	
15	2.0×2.3	0.2	×	×	なし	なし	床上に30cmの川原石
16	1.7×1.6	0.5	○	×	なし	なし	
17	2.5×2.5	0.6	○	×	なし	なし	
18	1.4×1.5	0.3	○	×	床全面に灰層	なし	
石部田 方 1	2.0×2.45	0.4	×	○	なし	なし	
方 2	2.0×2.0	0.5	×	○	埋土中に多量の炭化物	土師質土器、内耳鍋	北東隅に落ち込み
方 3	1.8×2.3	0.3	×	○	なし	土師質土器	
下古館	3.0×3.3	0.5	○	?	床面に焼土	?	付近に井戸

### 地下式土壇

本遺跡で検出したものは、4基である。これらのうち地下室が3室のものは2基で、他は、単室のものである。

構造は、入口部である竪堀とそれに続く地下室に分かれる。竪堀部の平面形は円形で、断面形はロート状を呈す。埋土は、自然堆積によるものである。

三室の地下室は、入口部竪堀から向って正面と左右に地下室が設けられており、竪堀の底部との高低差はほとんどない。単室のものは、その平面形が長方形であり、入口部はその長辺中央にとりつく形になる。

遺構の壁は、工具の痕跡が明瞭ではあるが、単室のものに比べると三室のものは非常に丁寧な造りである。

地下室内の天井部落下以前の埋土は、竪堀からの流れこみによるものである。

遺物は、竪堀埋土中から土師質土器・青磁・内耳鍋のいずれも破片が出土している。また、地下室内からは釘が出土している。

C区における本遺構の位置は、北東部と中央部にあたる。また、出土遺物から、土師質土器や内耳鍋の使用以降に造られたものであること、つまり中世以降の遺構であることがわかる。

本遺跡の地下式土壇に形態的に類似する地下式壇については、半田堅二氏の研究がある。<sup>(7)</sup>

氏は、その中で、地下式壇を「中世仏教を背景に発生した墓地の内部で機能している施設の一方で、再葬の際の第一次葬の施設等も含めた広い意味での墓であろう。」としている。本遺跡の地下式土壇は、遺跡内で最も新しい遺構である長方形の土壇より古いことから、掘立柱建物や井戸を中心とした中世の集落を営んでいく上で機能したものであった可能性が高く、墓として機能したとは考えがたい。

### 溝

3～7号溝は、C区の遺構群のうち南部を除く三方向の限界を示している。

埋土中からは、土師質土器や内耳鍋の出上がある。これらの溝はほとんどの長方形土壇より新しいが、1号井戸より5号溝は古く、遺物も方形竪穴や井戸から出土したものと同じことから、C区の遺構内でも新しい段階のものであると考えられる。

### 辻の内遺跡の中世集落

集落を構成する遺構は、土師質土器・内耳鍋等がその遺構に伴うという点を大略的な目安とした。

集落は、掘立柱建物・堀・井戸・方形竪穴遺構が構成することは、これまでに明らかとなった。これらの他に3～7号溝や土壇に伴うと考えられ、さらに、溝に囲まれる範囲にあるということで1～4号地下式土壇・2号火葬墓・1～4号墓壇も集落内に含まれそうである。

また、検出した遺構群には、何期かの変遷があるようで、例えば、火災にあった方形竪穴遺構とそうでないもの、5号溝の説明で述べた、5号溝が廃棄されて1号井戸が造られる間に井戸か地下式土壇が造られた可能性があることなどがそのことを示している。

中世の集落の年代決定の根拠となったのは常滑の大甕と内耳鍋である。これらの遺物の年代から、集落の営まれた年代は、13世紀後半～14世紀中葉と考えられる。

(1) 栃木県教育委員会『石那田館跡』昭和50年

(2) 中村食司「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古』土曜考古学研究会 1979. 12 創刊号

(3) 赤羽一郎「常滑—知多半島古窯址群—」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館

(4) 高崎市教育委員会『矢島遺跡・御布呂遺跡』1979

(5) 栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』昭和55年

(6) 栃木県下都賀郡国分寺町に所在する中世の館跡である。方形竪穴遺構については未報告である。

(7) 半田堅三「本邦地下式墳の類型学的研究」『伊知波良』2 1979, 5

#### 竪穴住居跡と出土遺物

竪穴住居跡は11軒検出されているが遺構どうしの切り合いはない。

遺構の平面形はほぼ正方形であり、それらのうち柱穴を持つものは、1号と10号のみである。また、その主軸方向はほぼ北にある。すなわち竈がどの住居跡でも北壁に施けられていたということである。

竈は、粘質土をつみあげて造られているが、その凸形や円形の掘方は特徴的である。

調査区が細長いため集落の範囲は明確にしない。しかし、その立地から検出した住居跡は2群に分けられる。第1群は、台地平坦部に立地している1～8号、第2群は姿川に開く小枝谷の西縁辺部に立地する9～11号である。

竪穴住居跡からの出土遺物は、須恵器と土師器である。須恵器は、図示した杯形土器と1号住居跡埋土中出土の蓋形土器の宝珠状のつまみの2点<sup>1)</sup>であり、他は破片も含めてすべて土師器である。

出土した土師器には、杯・甕・壺の種類がある。各々の住居跡の遺物を見ると、最も普遍的に出土しているのは、土師器杯形土器である。これらは、小片であってもその特徴から器形が推定できるという点で図化し得なかった土器でも比較することができる。このような点から、各々の住居跡の時間的な序列をつける資料として、ここでは土師器杯形土器をとりあげた。

本遺跡出土の土師器杯形土器は、その器形から2種類(A・B類)に分けることができる。

A類は、丸底の底部と大きく外に開く口縁部を持ち、体部と底部の境に稜を有することが特徴である。B類は、丸底の底部と扁平な半球状の体部を持つことが特徴である。しかし、A・B類が時期を異にした土器でなく、同時期の器形のバリエーションであることは、4・5号住居跡で両者が伴出している(第54図5・6・7・9)ことから明らかである。同様のことが出土遺物が小片ではあるが、2・3・6・8・9・11号住居跡出土遺物でも言える。

A・B類の同時性が明らかとなったが、ではそれぞれの中で遺物の特徴から時間的な差異を求めることができるのであろうか。

A類の杯形土器は、底部と体部を分ける稜が明確か否かで時間的な差異を求めることができる。すなわち、後者が時間的には後出である。このことは薬師寺南遺跡<sup>2)</sup>の31号と30号住居跡の切り合いから明らかである。

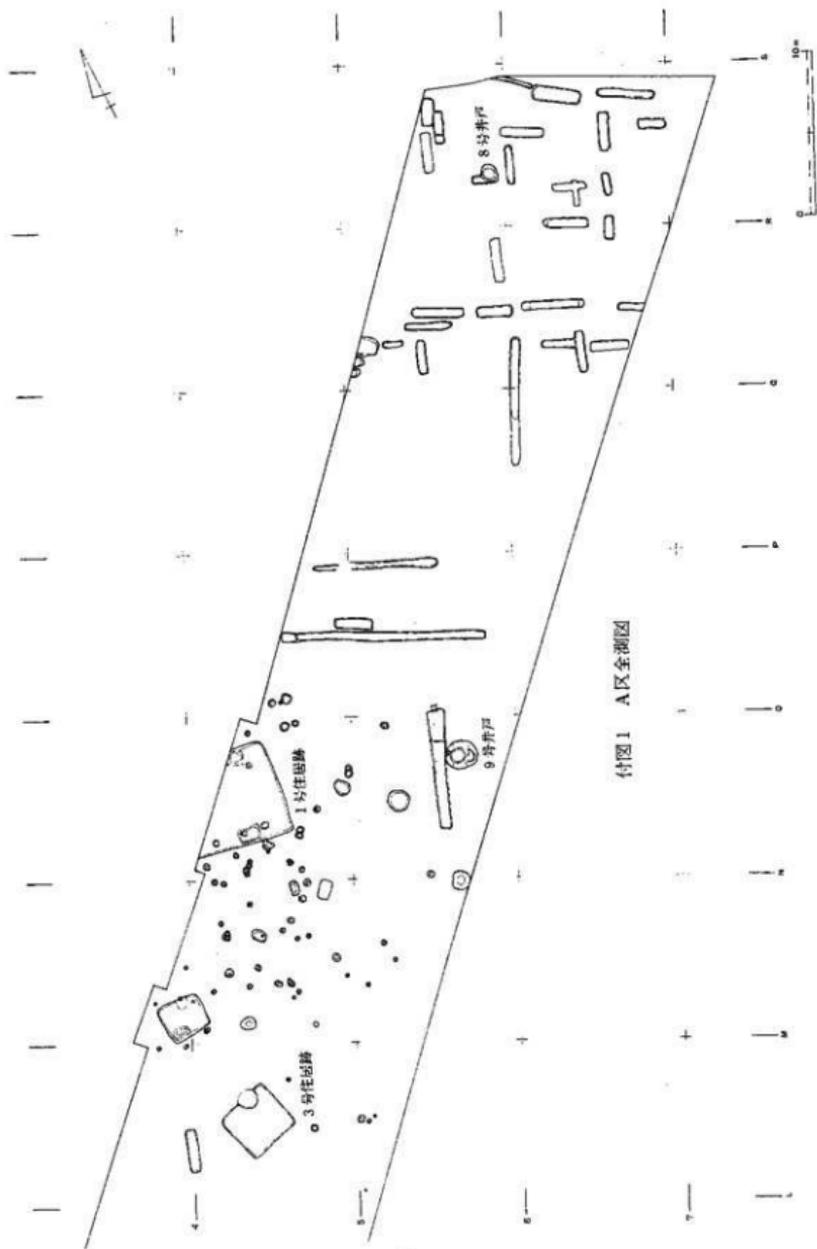
図示したA類の土器は、1・2・6・7・10・13が稜の明確なもので、15・21はそれが明確でない。つまりこの点からは、少なくとも1・4・5・8号住居跡は、10・11号住居跡に先行するものであると言える。

B類の杯形土器は、内外面撫での後、内面を宛磨きすることでは共通するが、外面はその後で宛削りのままのもの(4)と宛削り後宛磨きがなされているもの(5・9・12・14)がある。個体数は少ないが、このような差異が認められる。しかし、B類のこの調整技法の差が時間的なものなのかは明確でない。

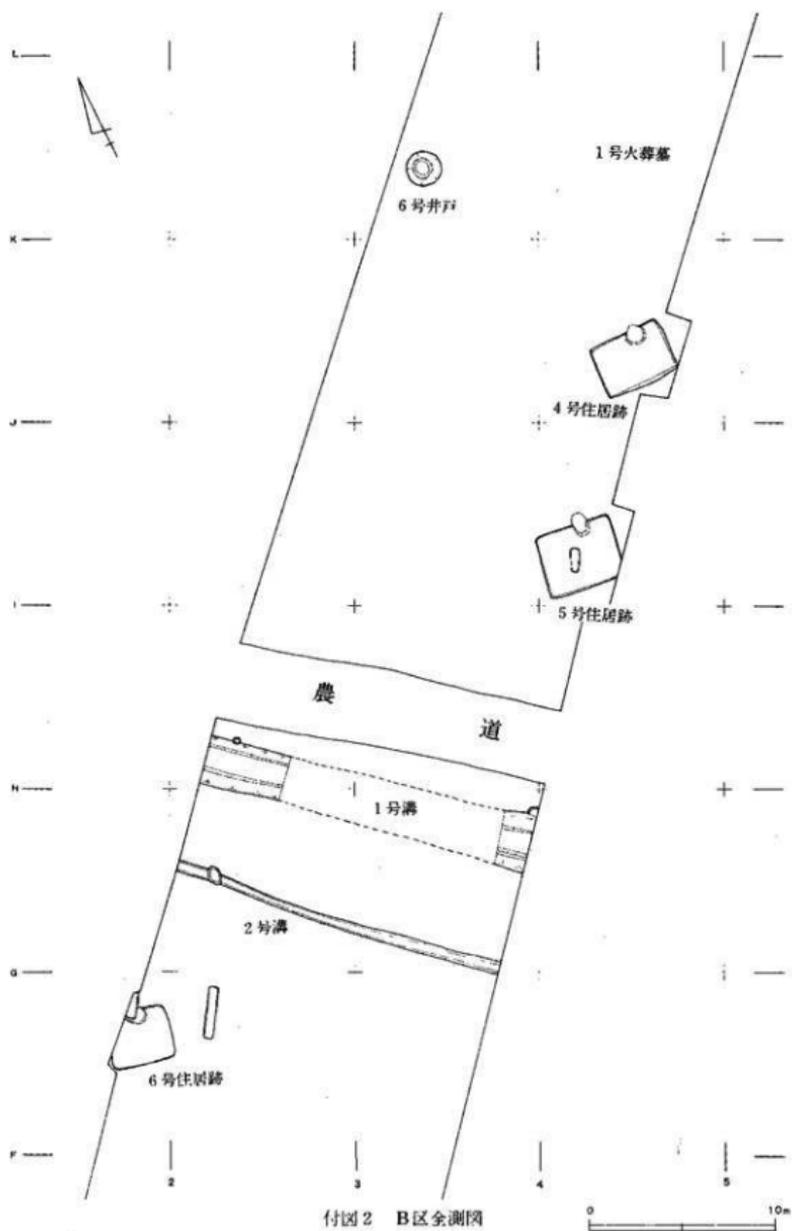
以上のように、A・B類の特徴とその先後関係について検討したが、それが明確に証明されるためには遺構の切り合い等から明らかとなる例の増加を待つべきであろう。本報告では、土師器杯形土器A・B類が7号を除くすべての住居跡から出土しているという事実から、11軒の住居跡はほぼ同時存在と考えておくことにする。

遺構の年代を決定する比較資料として前記と同様の理由で土師器杯形土器とそれに加えて11の須恵器高台付杯をあげることができる。11の須恵器は、底部及び体部下端に回転宛削り調整がなされている。この特徴は、前掲の薬師寺南遺跡30・31号住居跡出土の須恵器杯にも見られる。そこで、本遺跡の土器をA・B類の土器と11の須恵器に類するものを第Ⅱ期としている薬師寺南遺跡の編年にあてはめると、8世紀中葉となる。

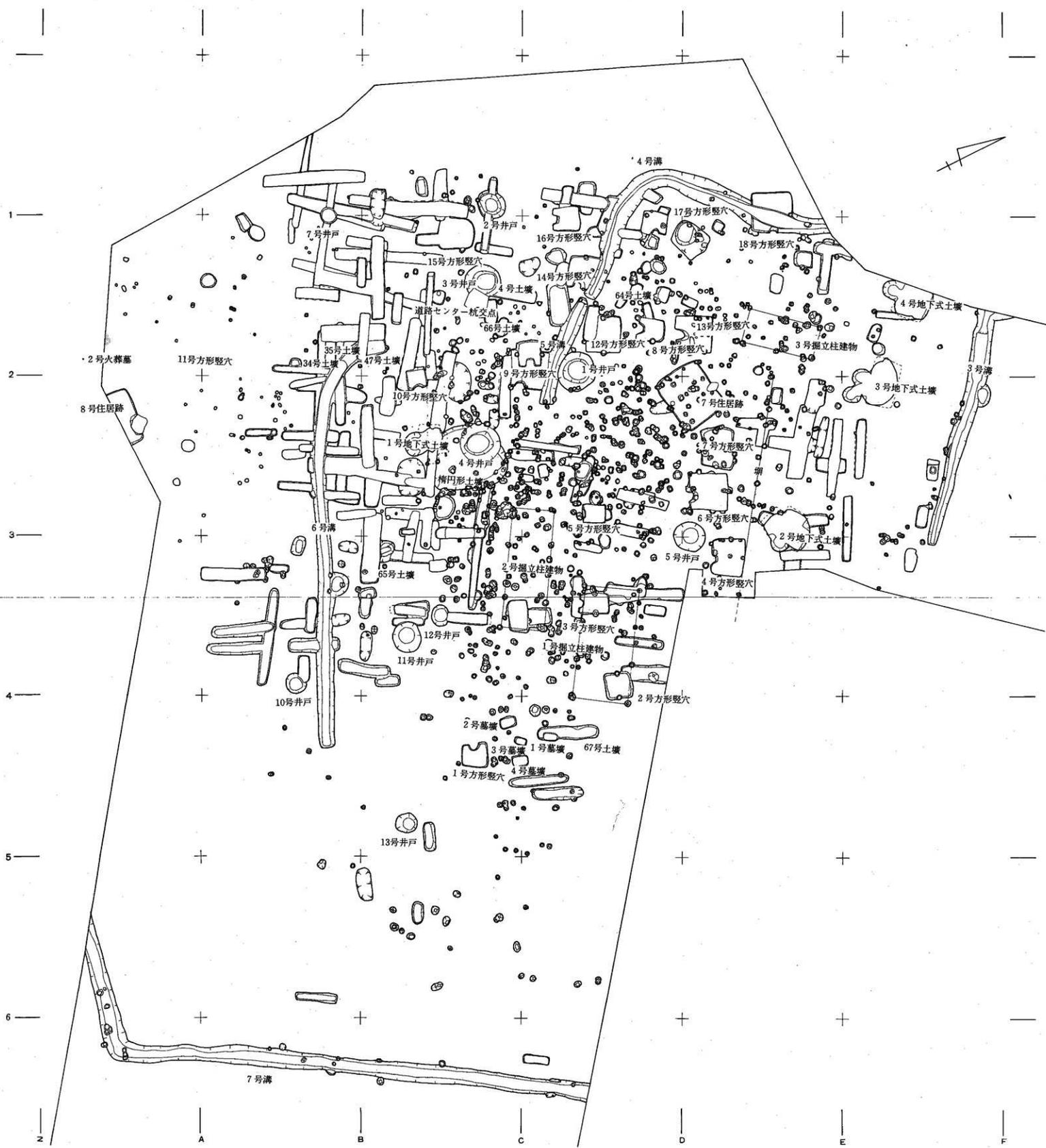
- (1) 中世遺構埋土中から須恵器杯形土器の小片が数片出土している。これらは底部切り離し後無調整であることから、本遺跡の住居跡群より新しい時期の遺構群の存在が周辺に予想される。1号溝出土の須恵器も無調整のものである。
- (2) 栃木県教育委員会『薬師寺南遺跡』昭和54年



付图1 A区全部图

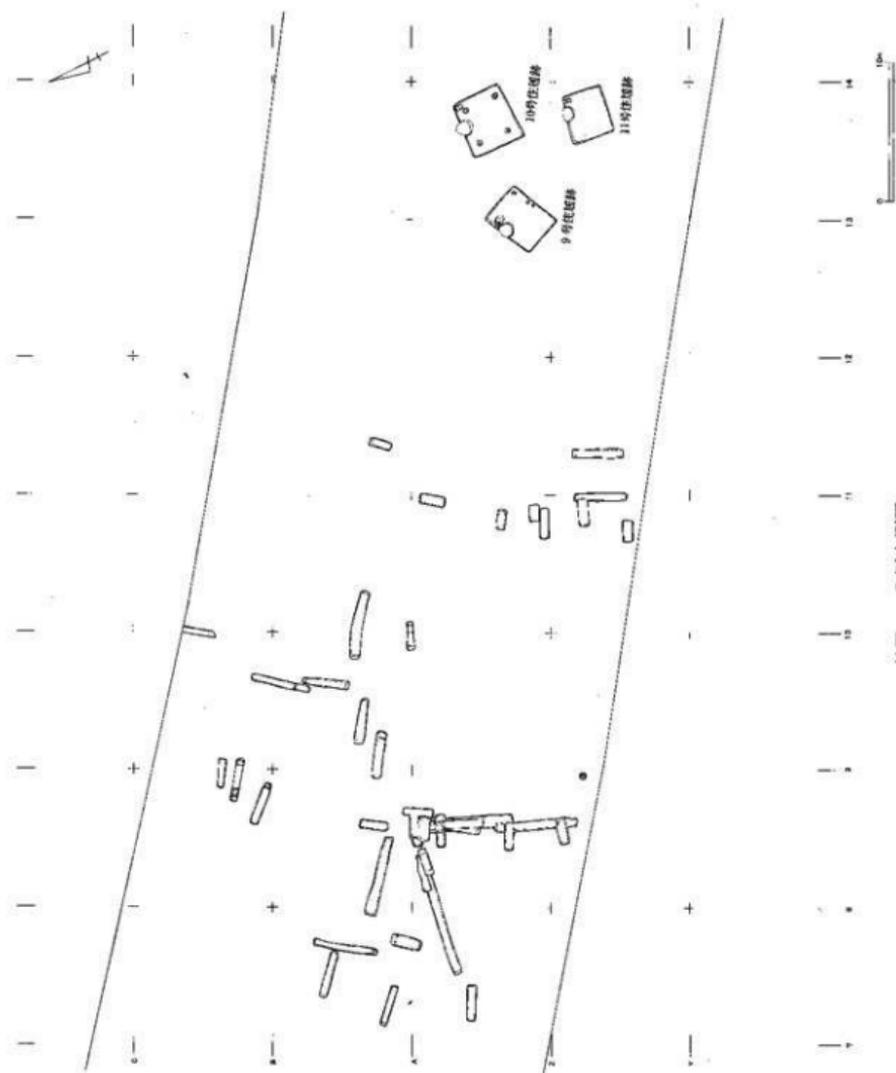


付图2 B区全测图

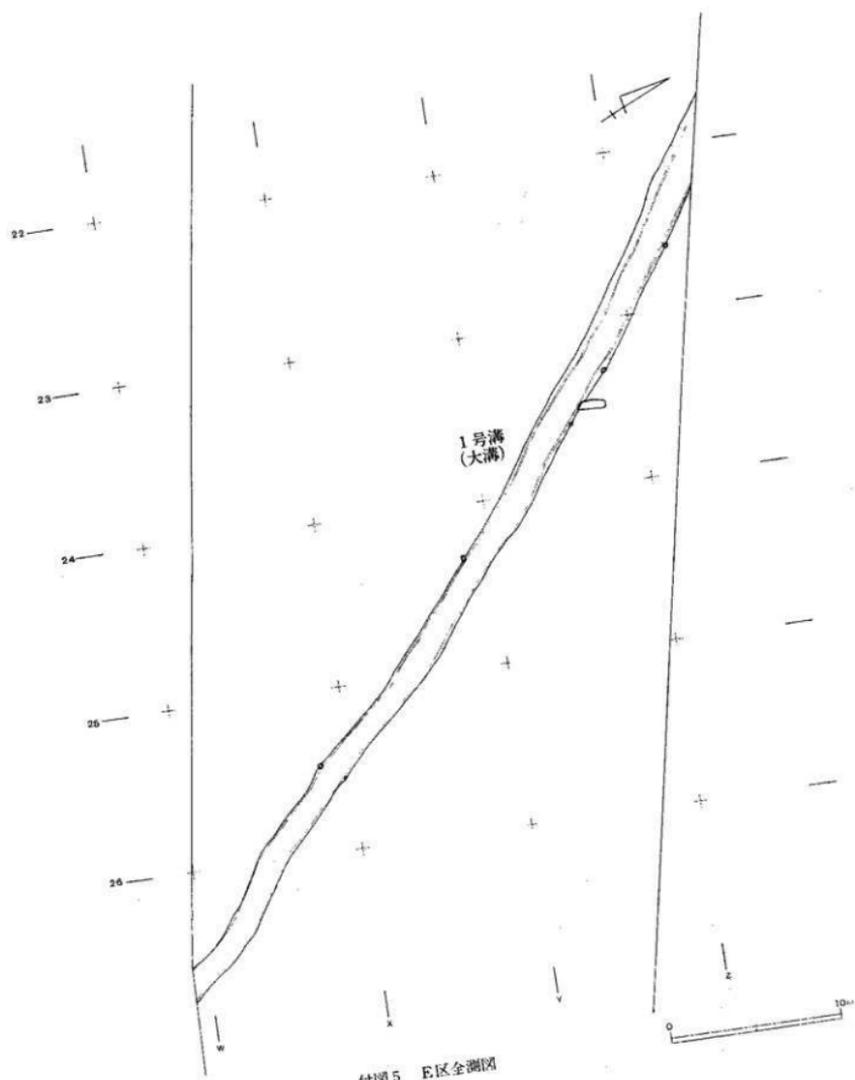


付図3 C区全測図

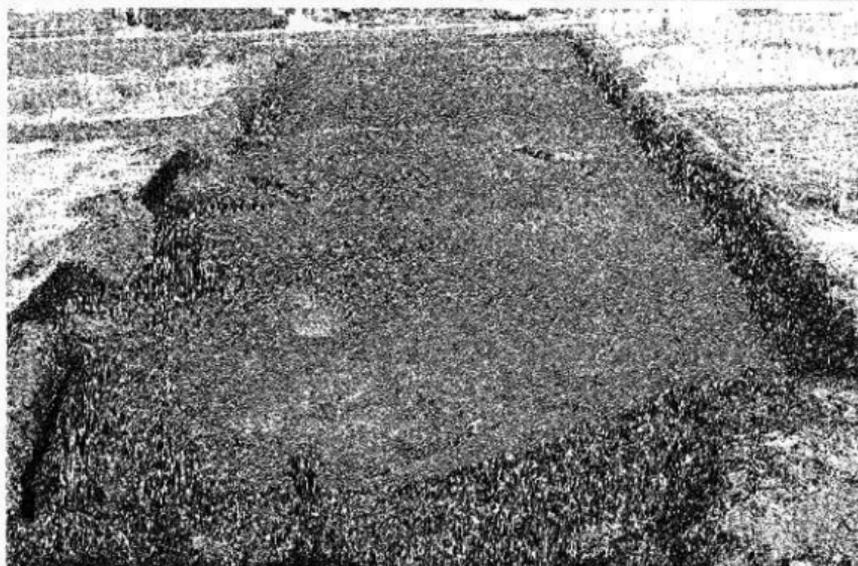
0 10m



付图4 D区全测图

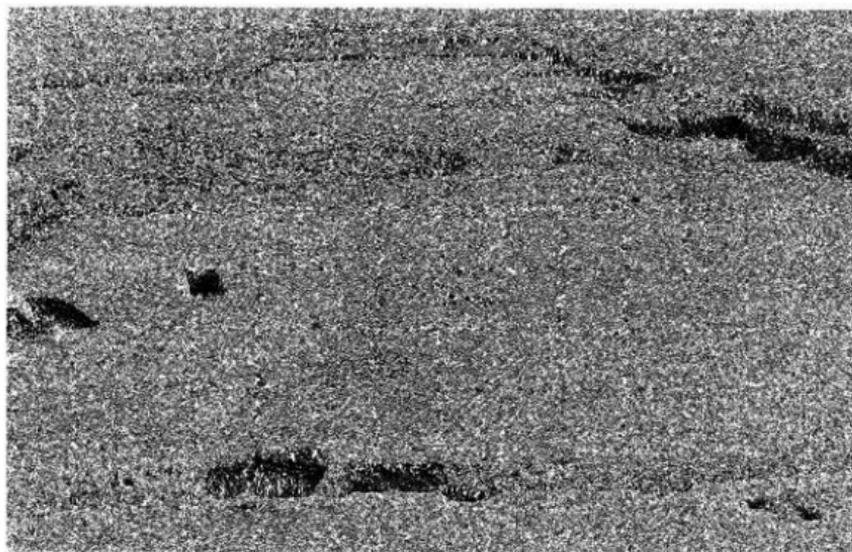


付图5 E区全图



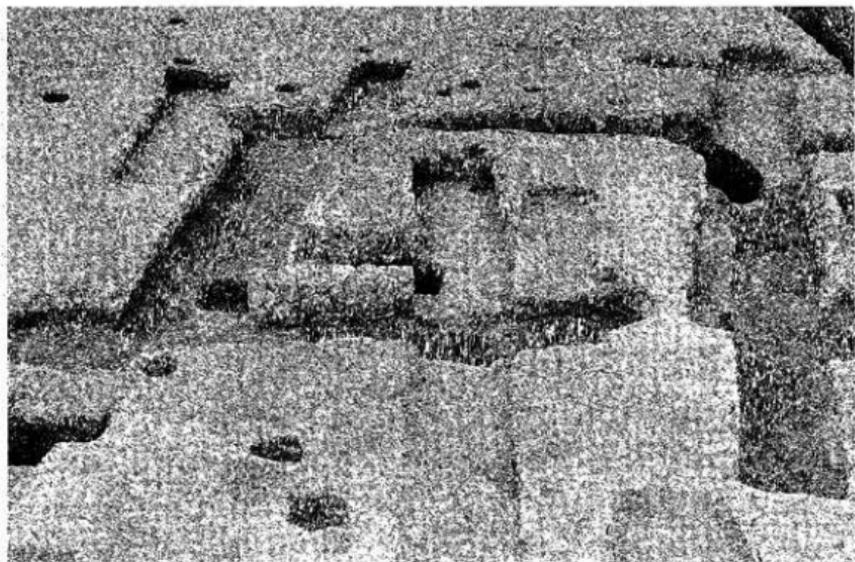
上 調査区遠望（北から）

下 A区全景（南から）



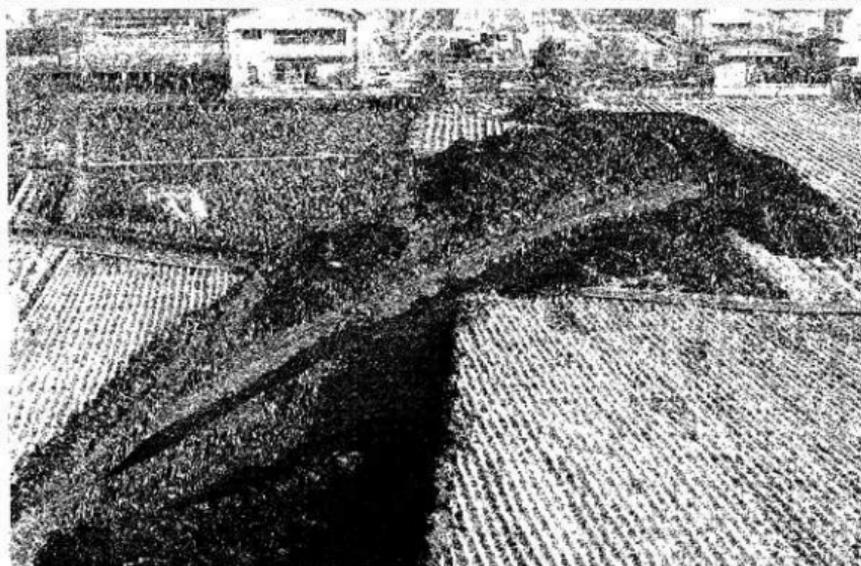
上 B区全景 (南から)

下 C区北部全景 (北から)



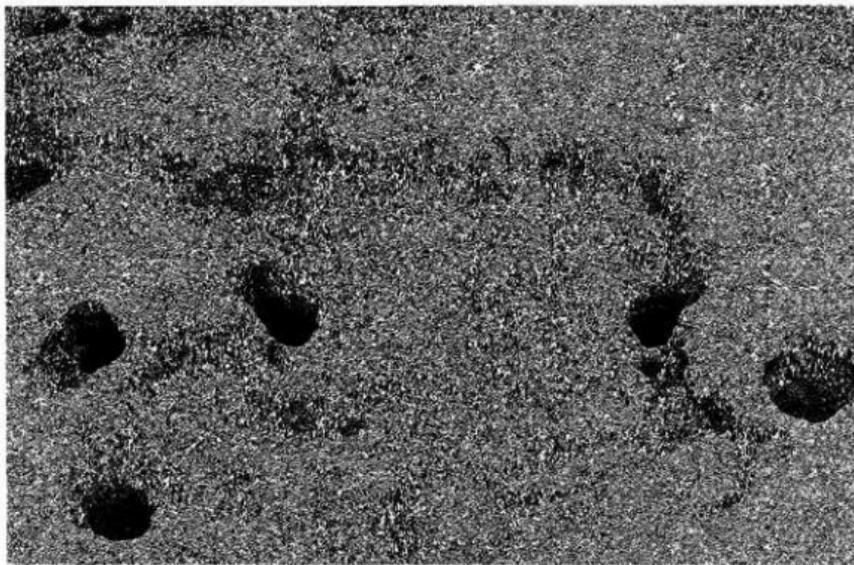
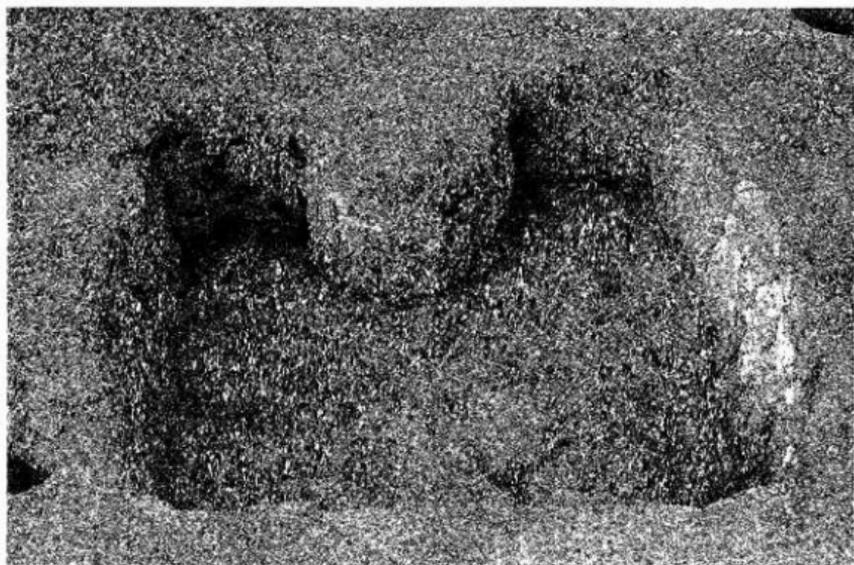
上 C区西部全景（北から）

下 C区東部全景（西から）



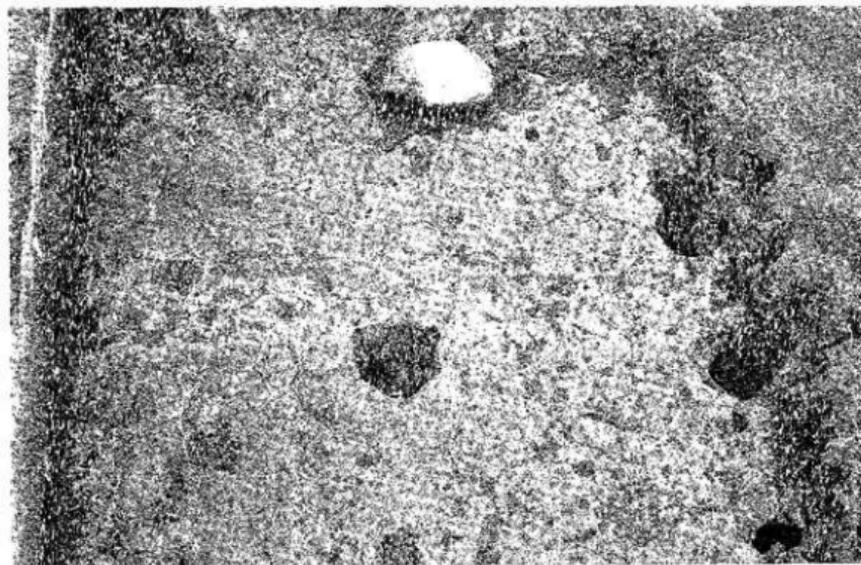
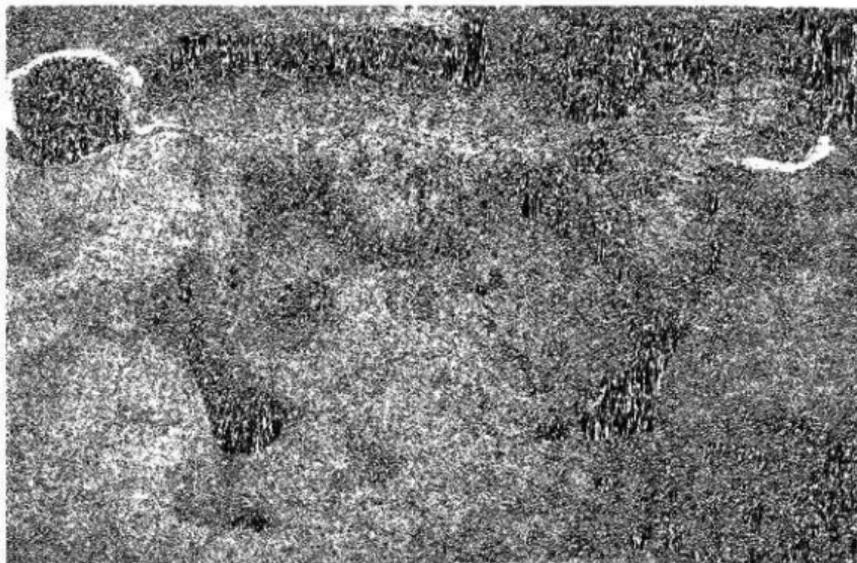
上 D区全景 (東から)

下 E区全景 (西から)



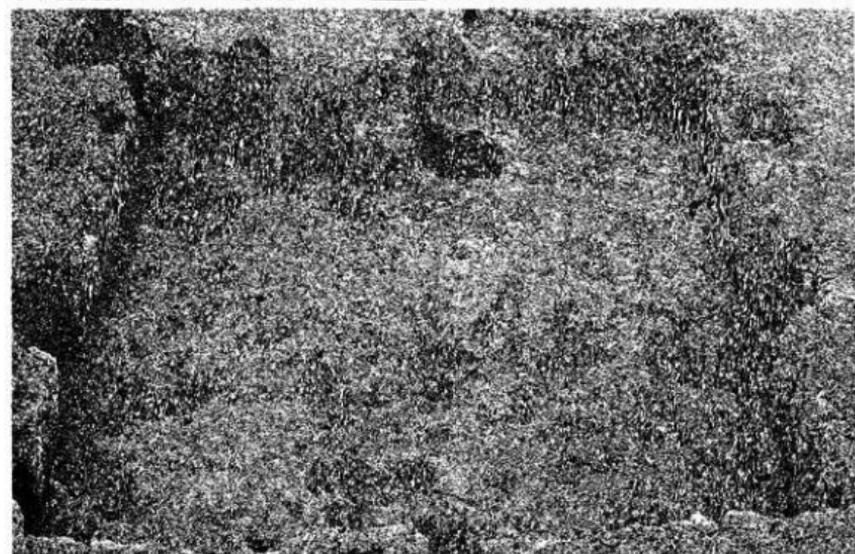
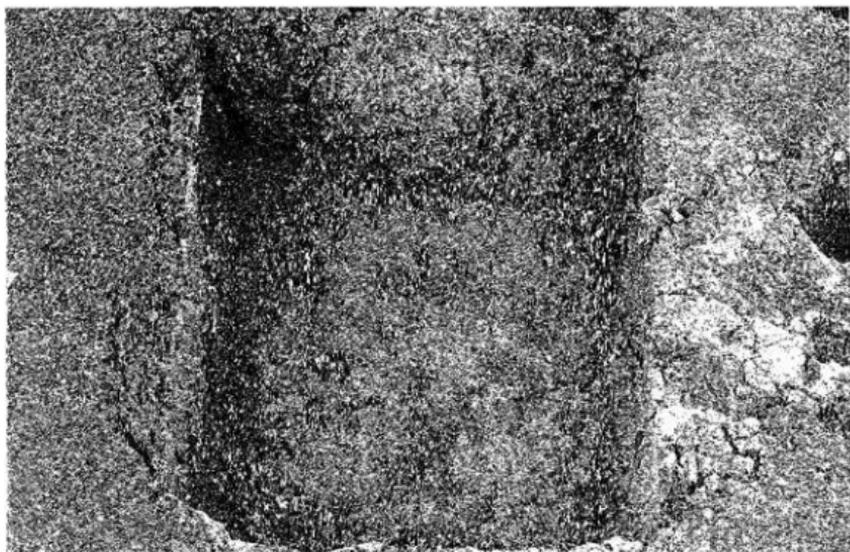
上 1号方形竪穴遺構（東から）

下 2号方形竪穴遺構（北から）



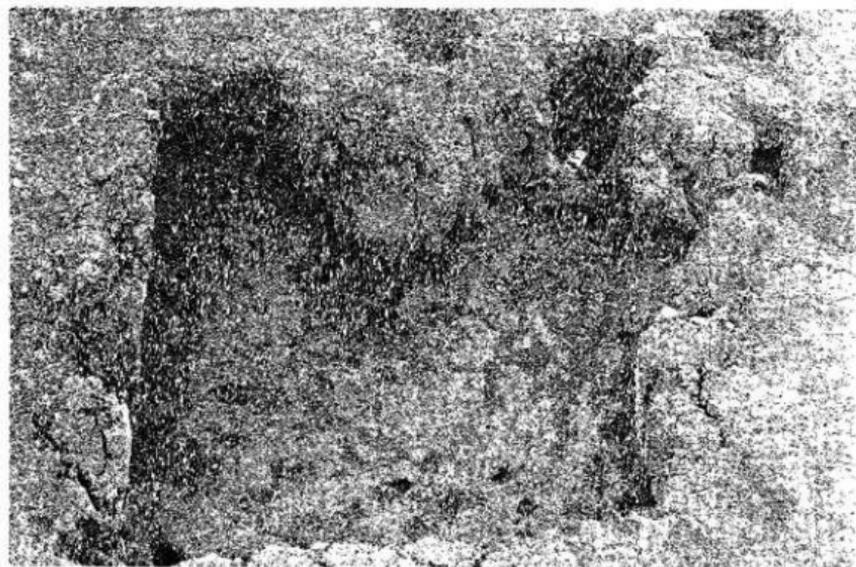
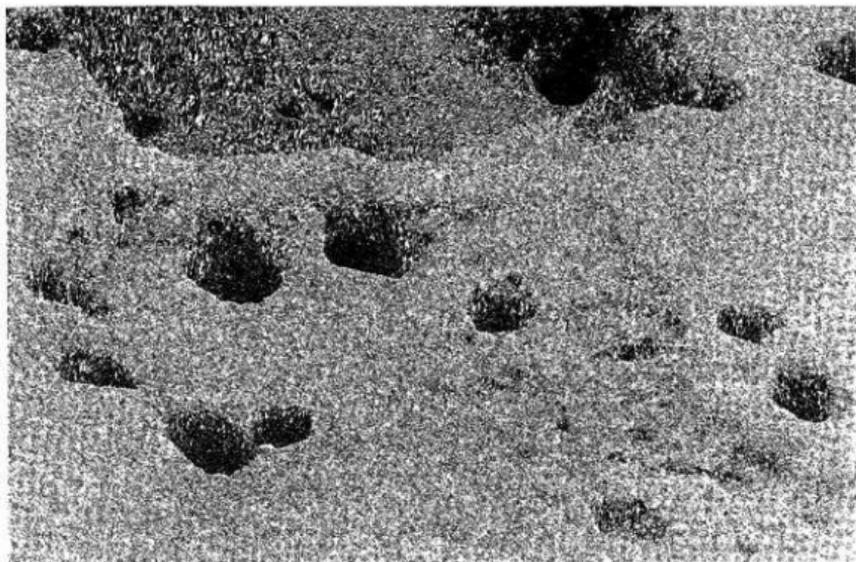
上 3号方形竪穴遺構（北から）

下 4号方形竪穴遺構（北から）



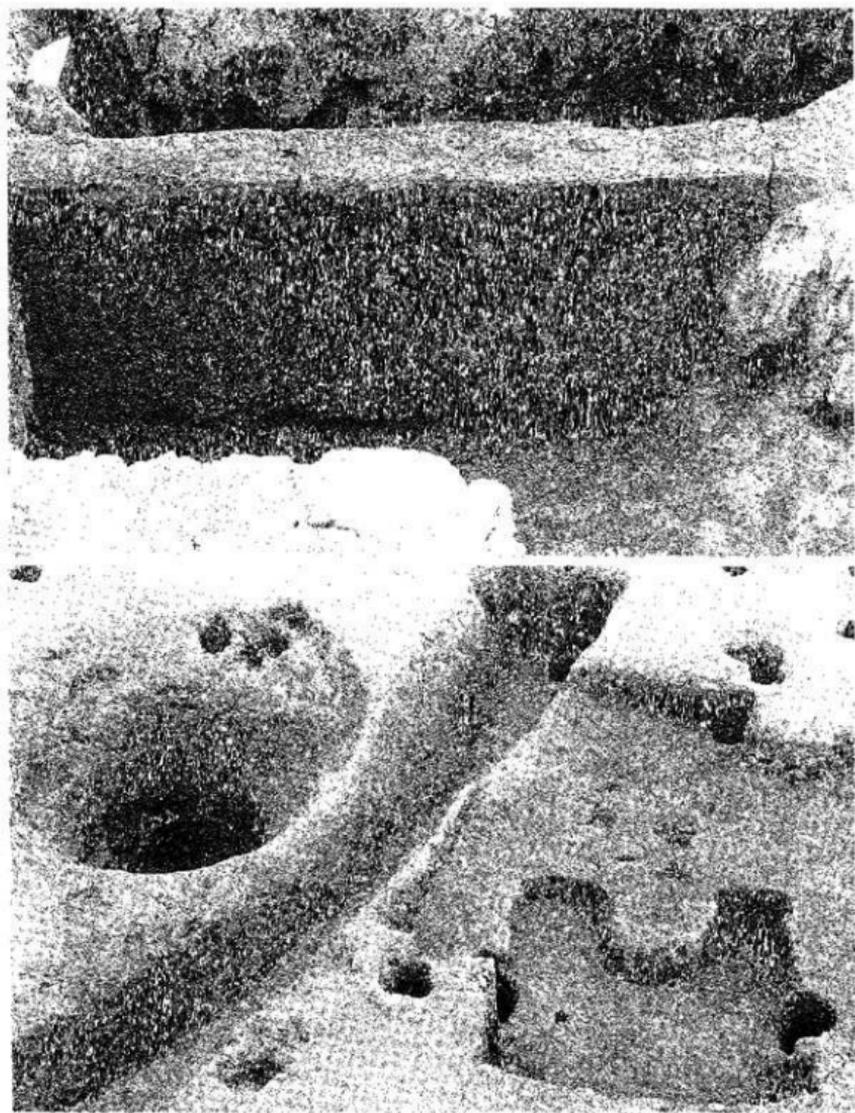
上 5号方形竪穴遺構（北から）

下 6号方形竪穴遺構（北から）



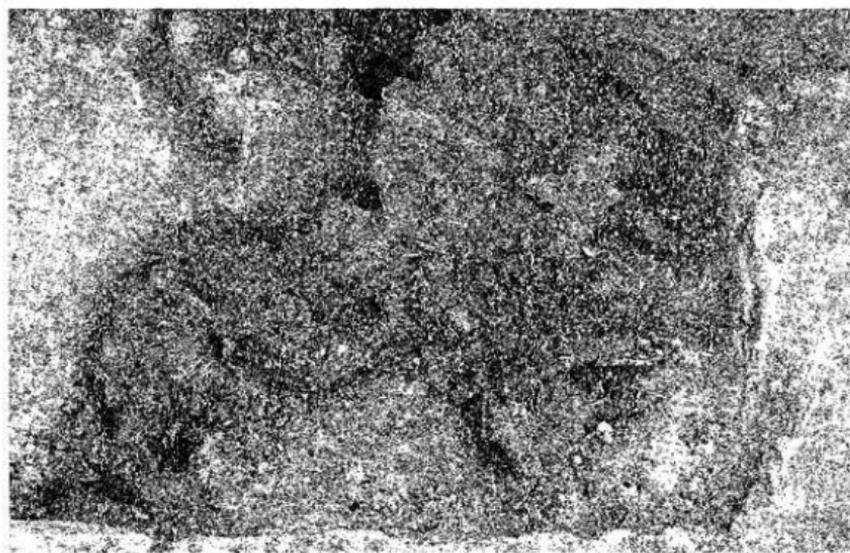
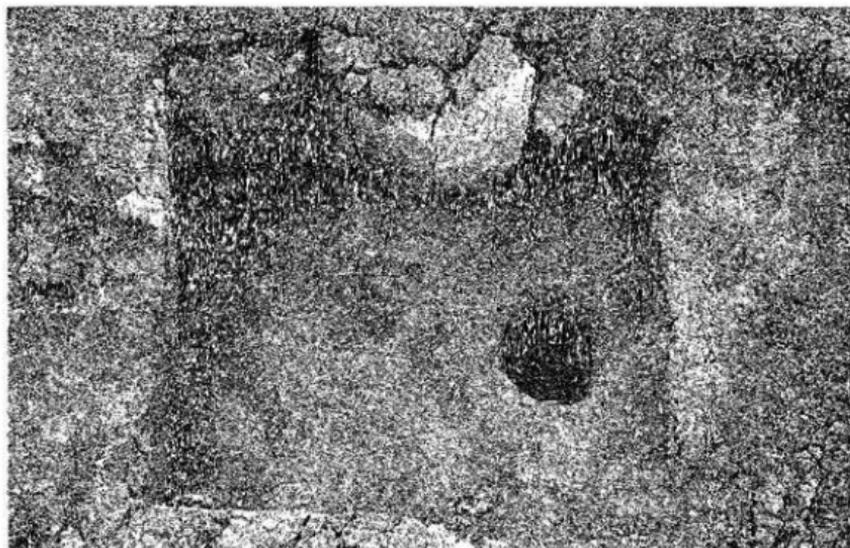
上 10号方形竪穴遺構（西から）

下 10号方形竪穴遺構内木炭出土状況



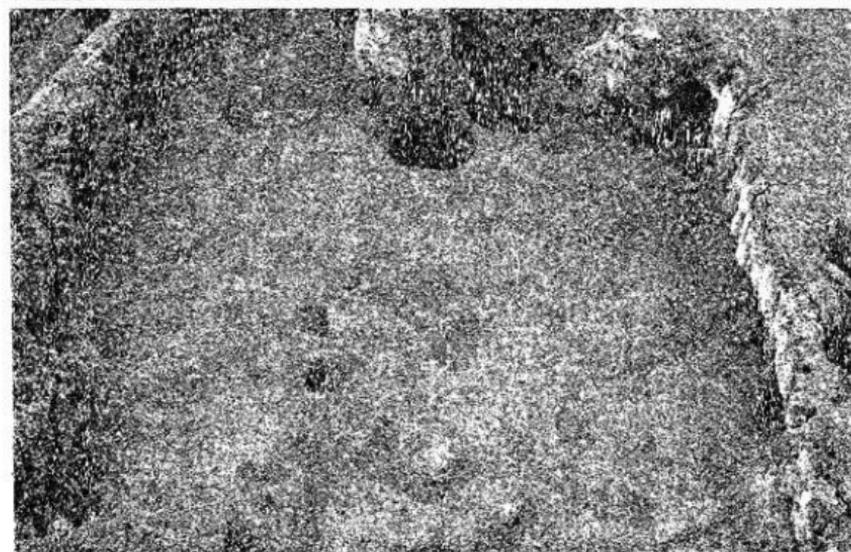
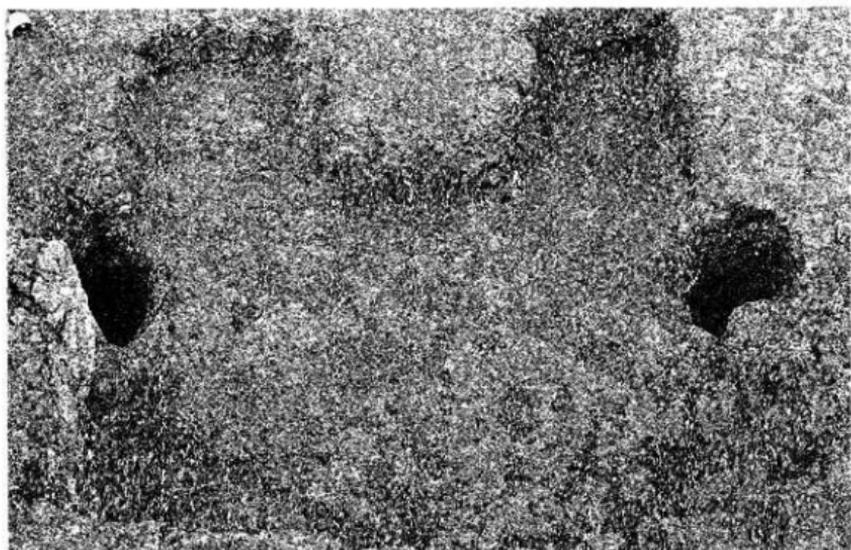
上: 8号方形竪穴遺構埋土断面(西から)

下: 9・11号方形竪穴遺構、5号溝、1号井戸(西から)



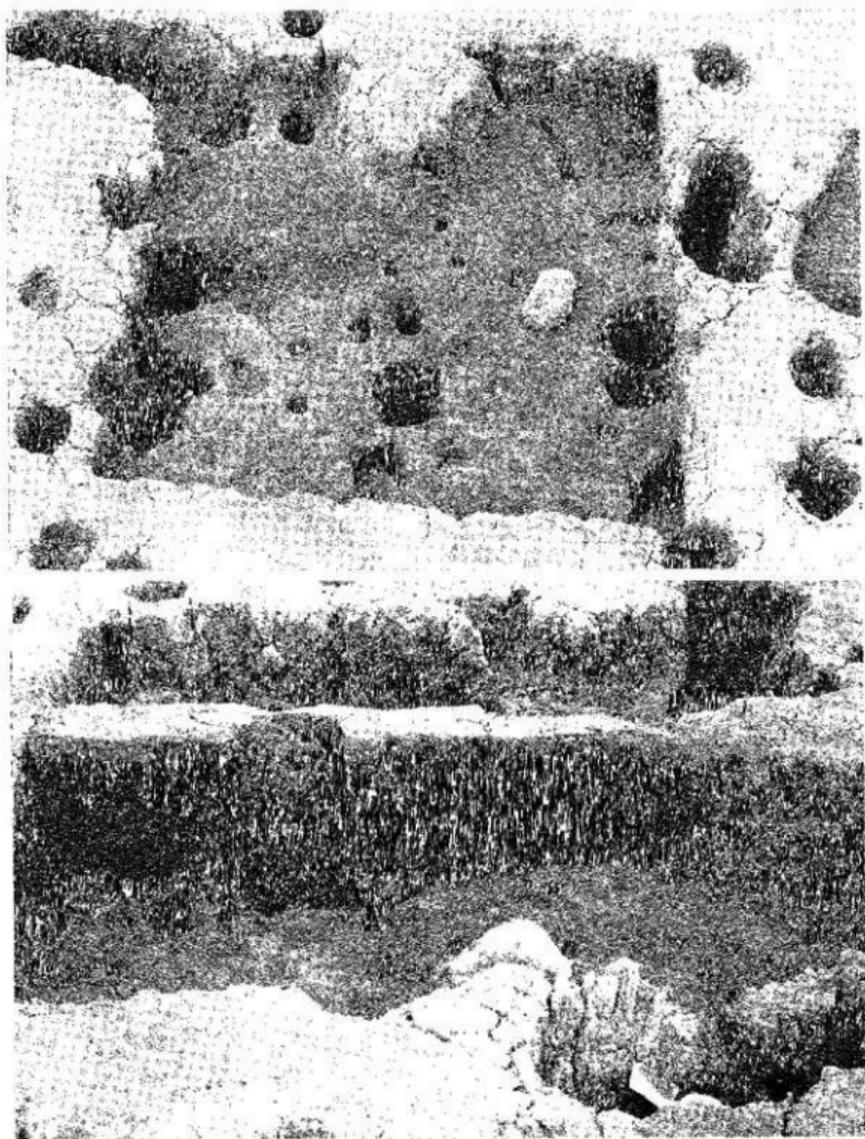
上 7号方形竪穴遺構（西から）

下 8号方形竪穴遺構（北から）



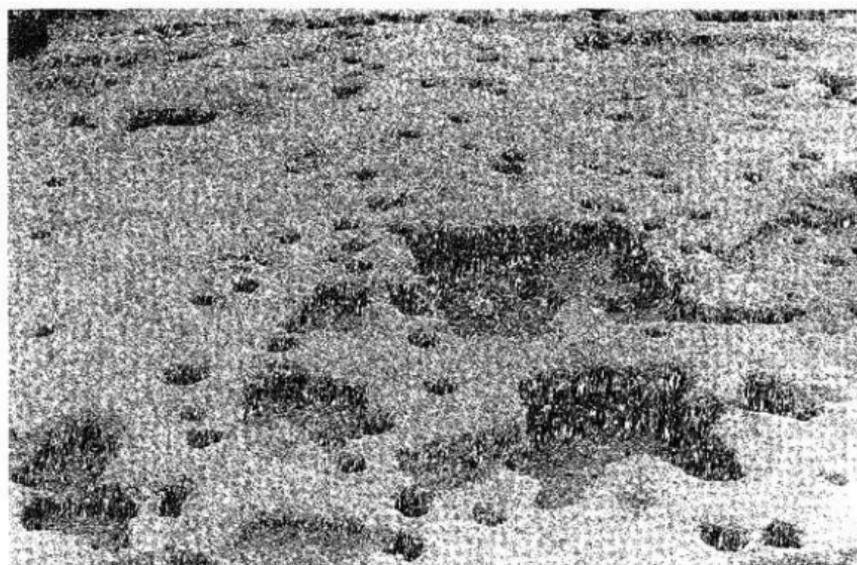
上 11号方形竪穴遺構（西から）

下 12号方形竪穴遺構（東から）



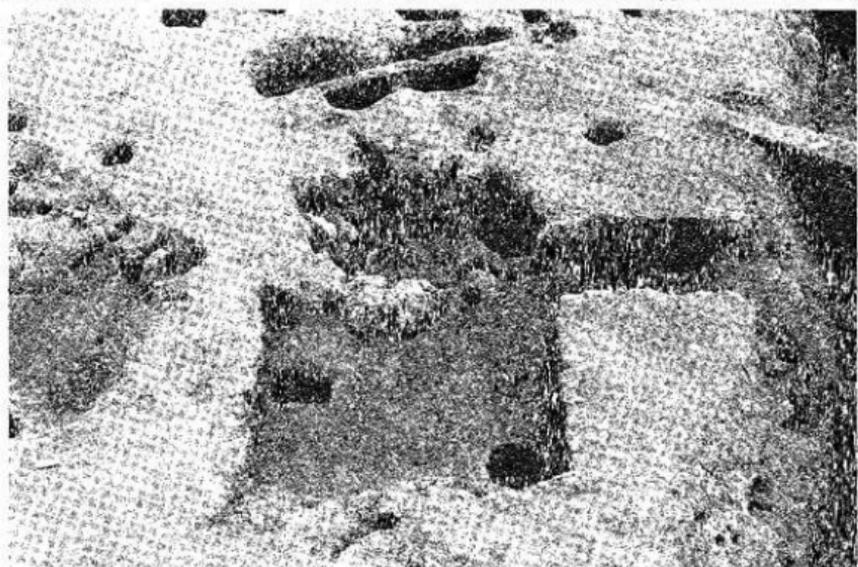
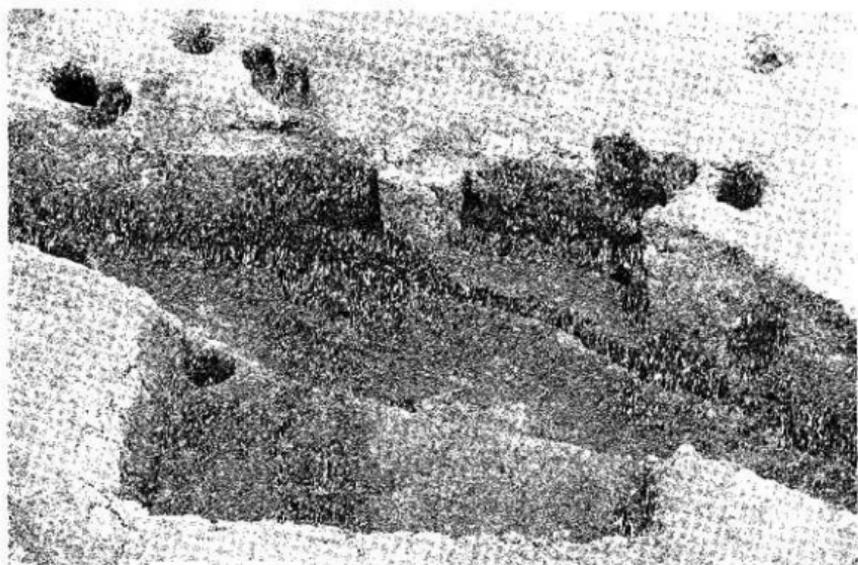
上 8・13号方形竪穴遺構（南から）

下 16号方形竪穴遺構（北から）



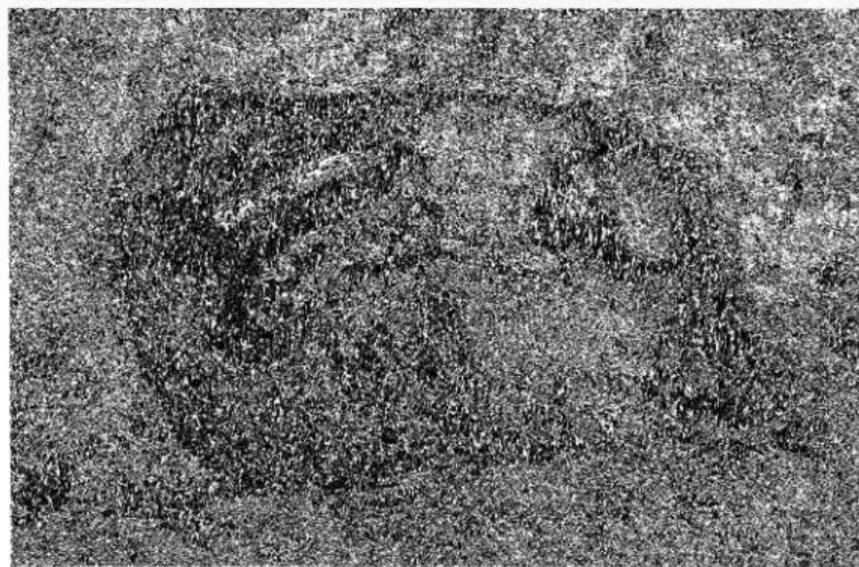
上 13号方形竪穴遺構（南から）

下 13号方形竪穴遺構土断面（西から）



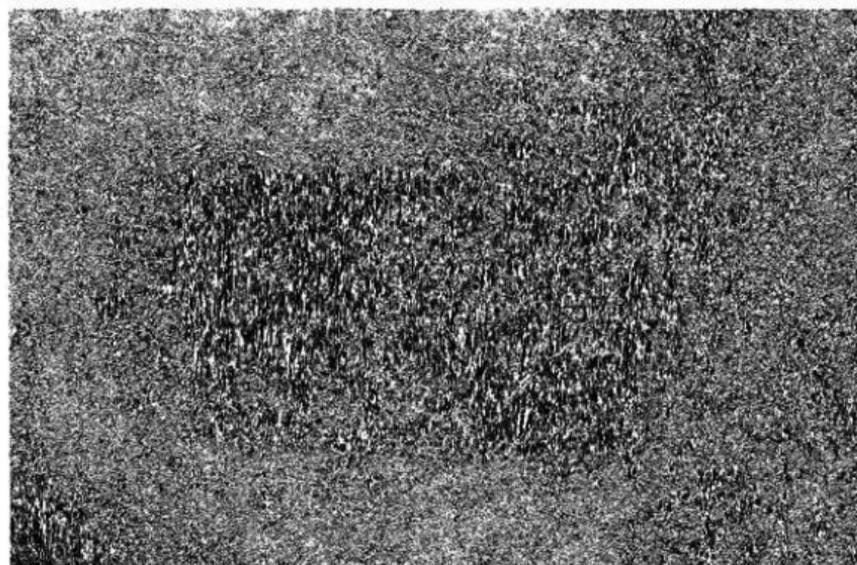
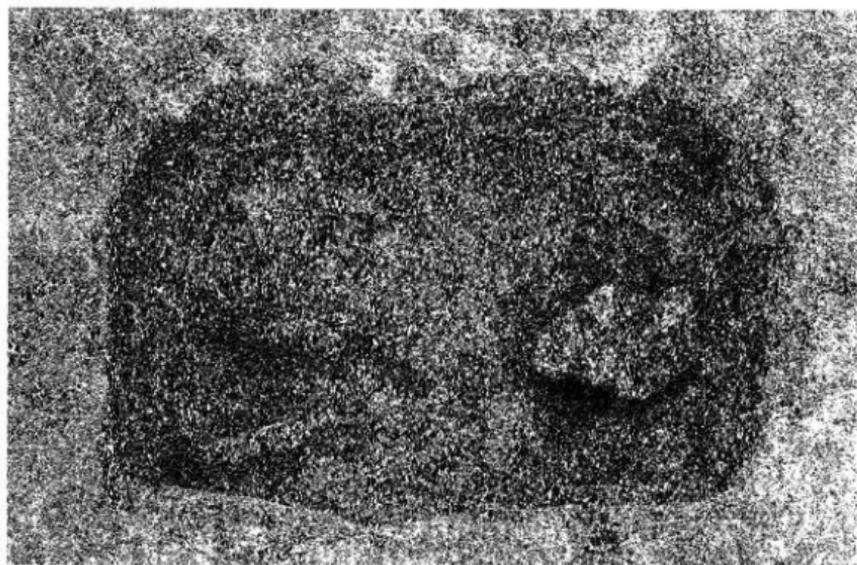
上 18号方形竪穴遺構 (西から)

下 17号方形竪穴遺構 (西から)



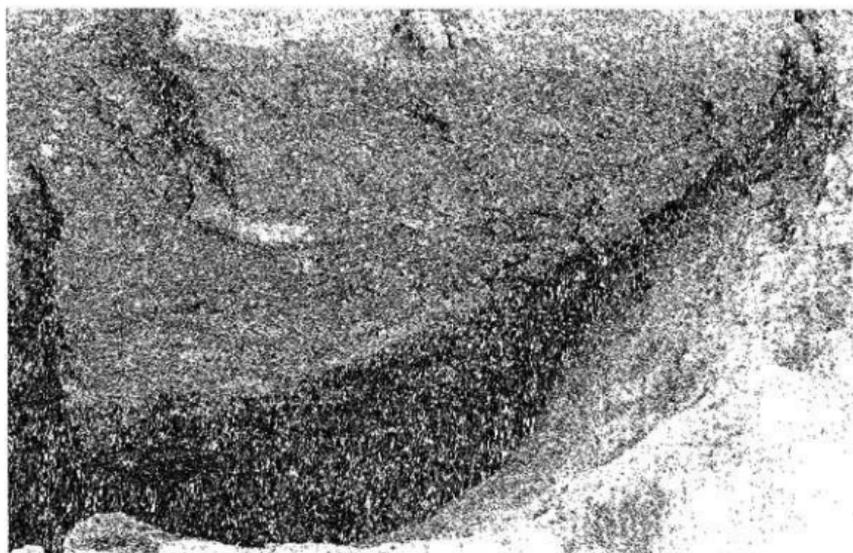
上 1号掘立柱建物（西から）

下 1号墓壕人骨検出状況



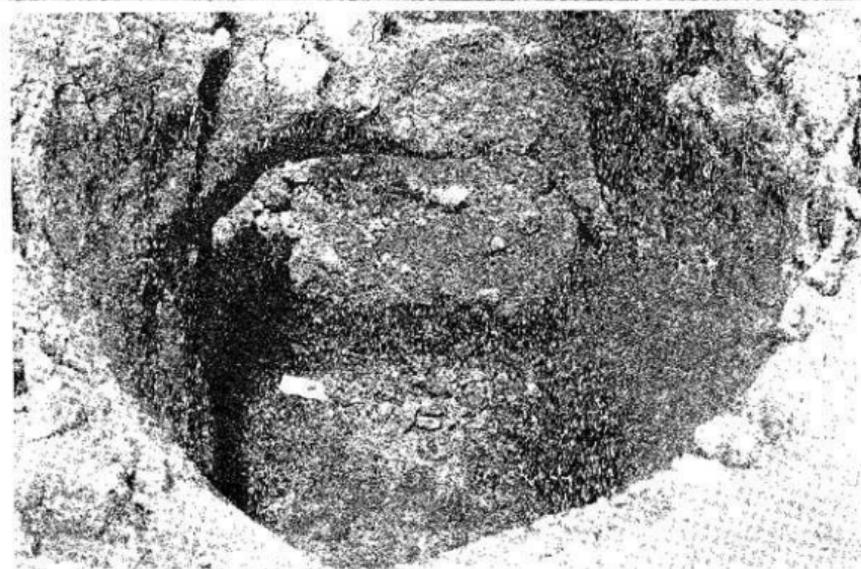
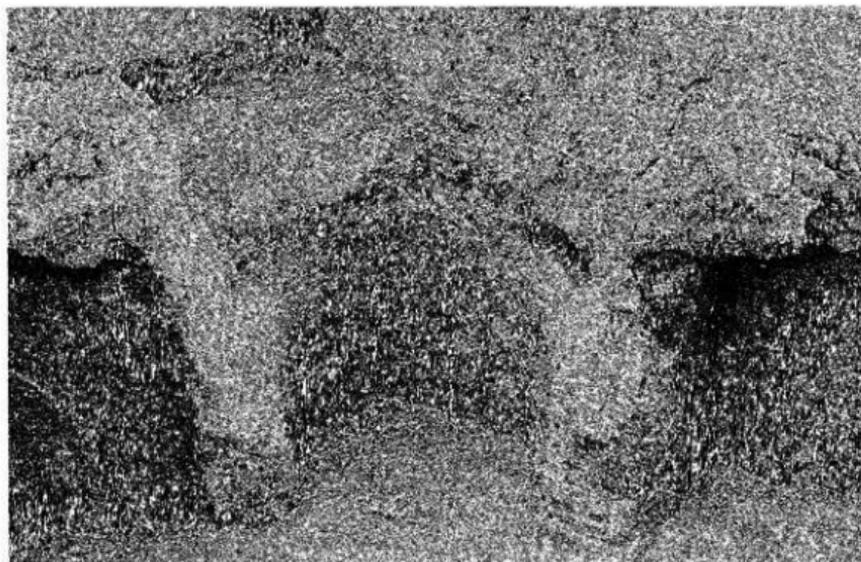
上 3号墓填人骨檢出狀況

下 2号墓填人竹檢出狀況



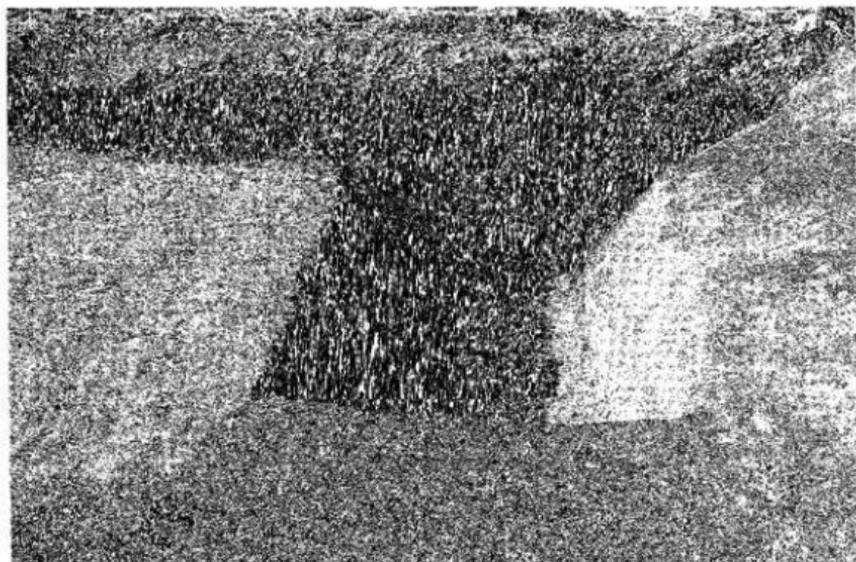
上 1号地下式土壌整地埋土断面(西から)

下 2号地下式土壌(南西から)



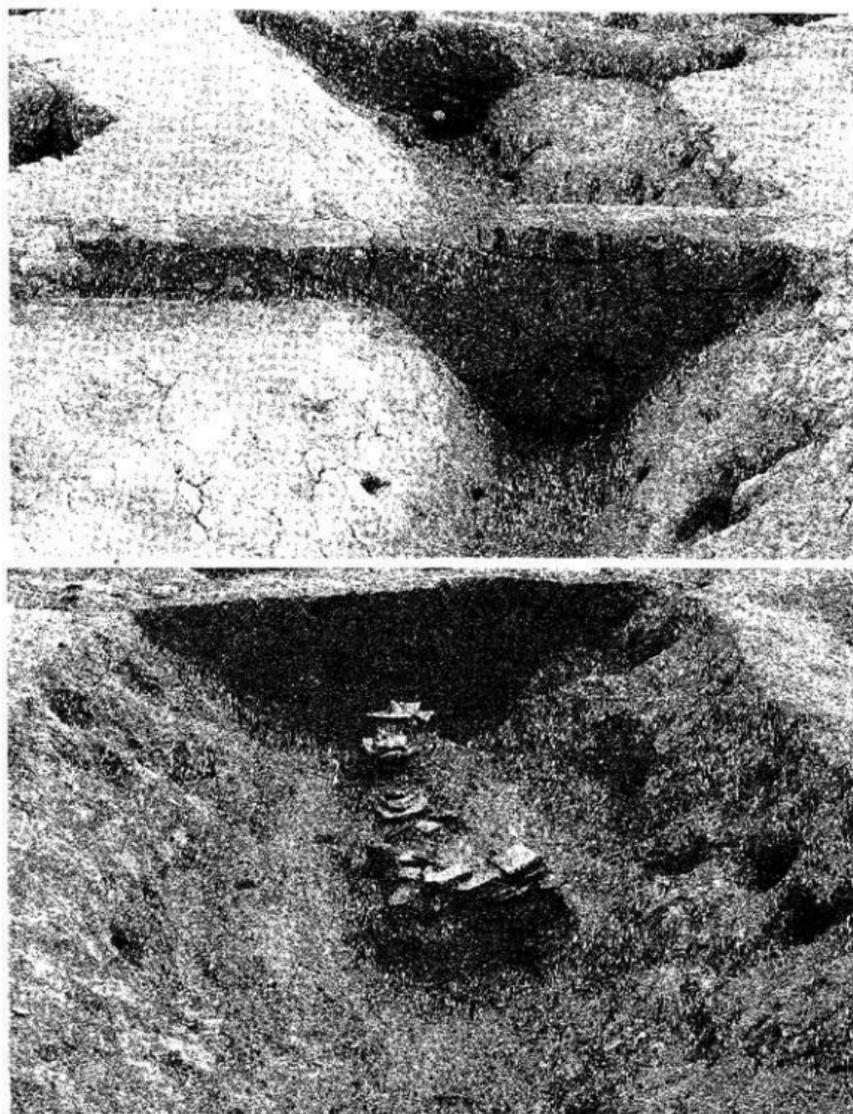
上 2号地下式土城竪堀（西から）

下 3号地下式土城竪堀 2（南から）



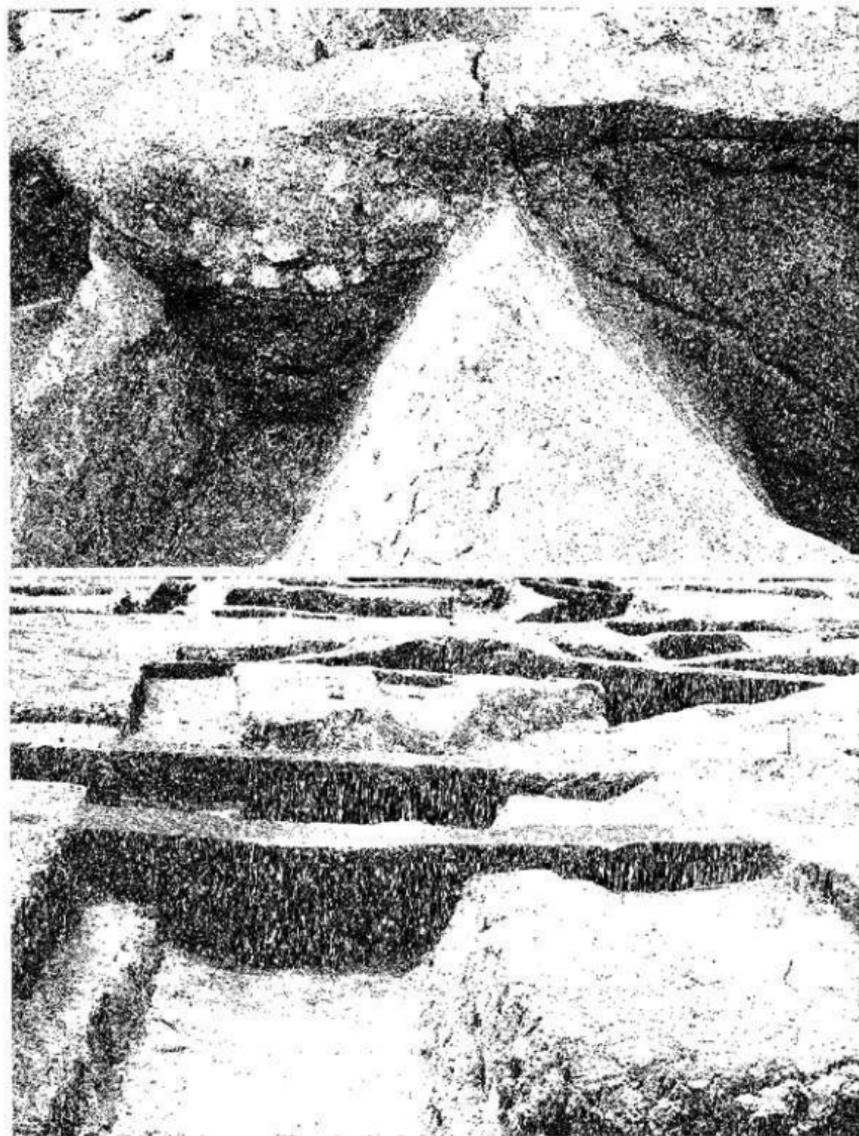
上 1号溝 (B区, 東から)

下 1号溝 (E区, 北西から)



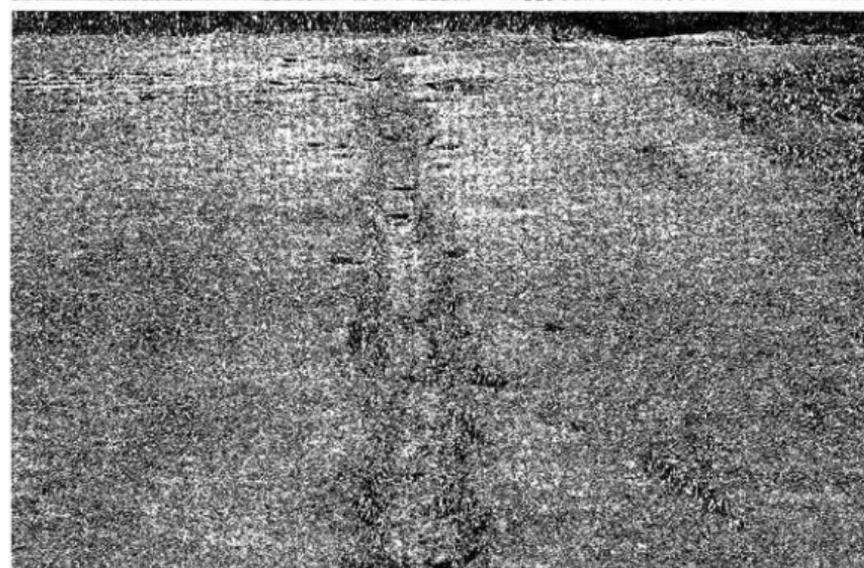
上 4号溝埋土断面（東から）

下 4号溝内遺物出土状況



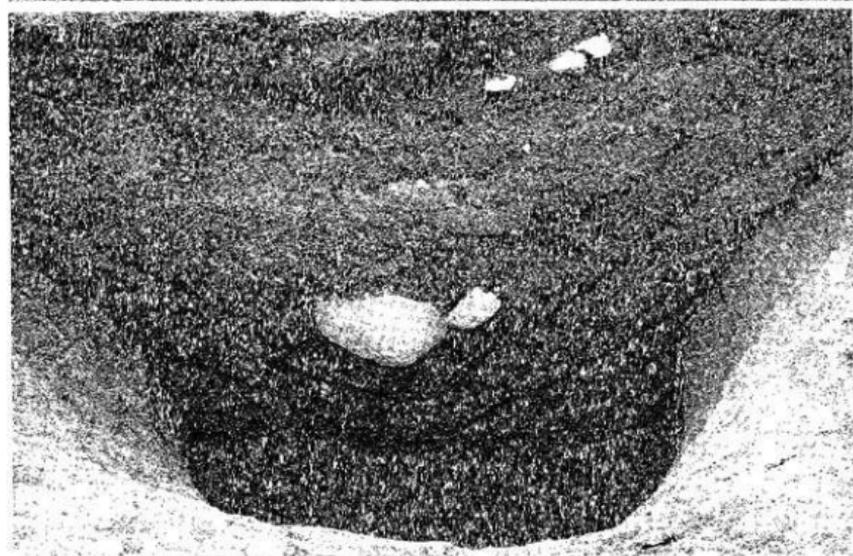
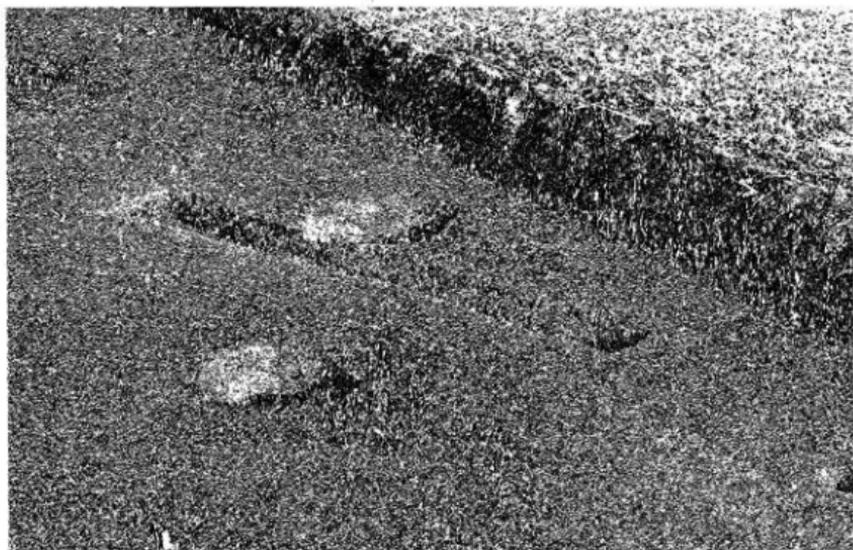
上 5号溝埋土断面 (東から)

下 6号溝埋土断面 (東から)



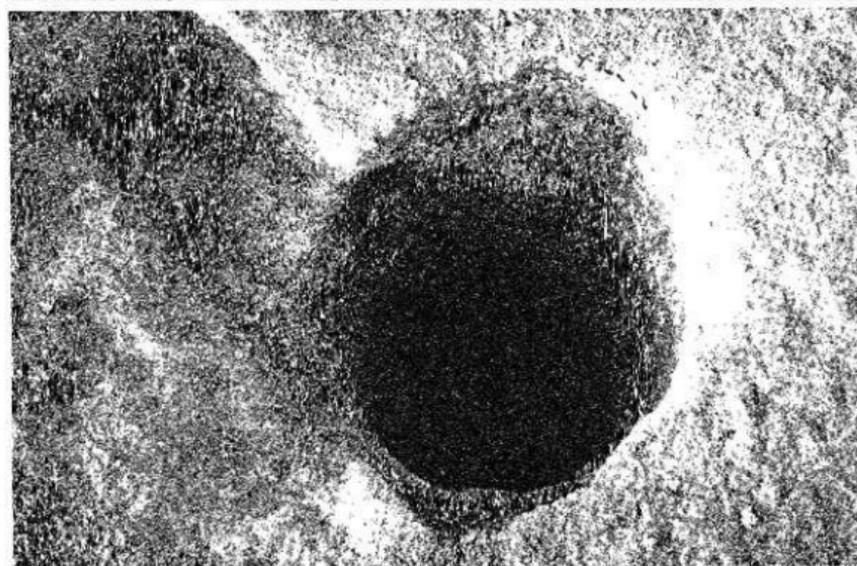
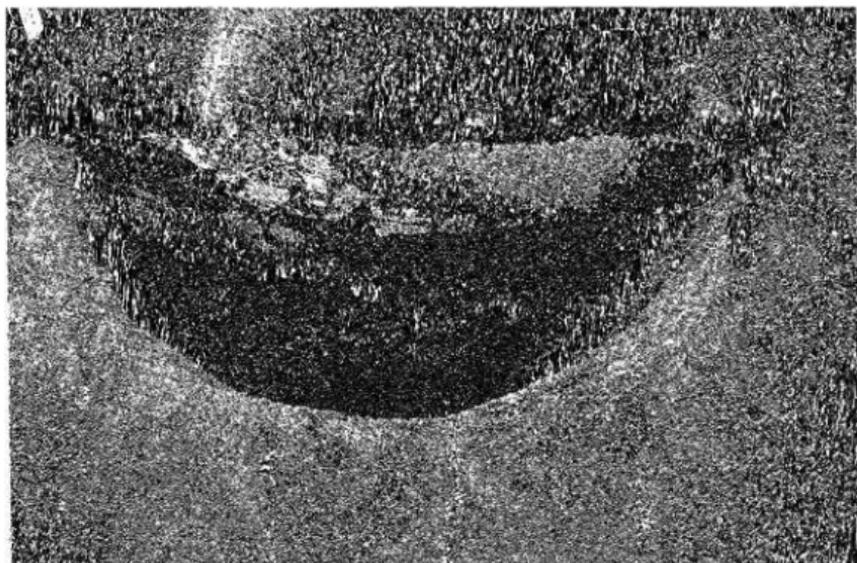
上 7号溝埋土断面 (南から)

下 7号溝 (北から)



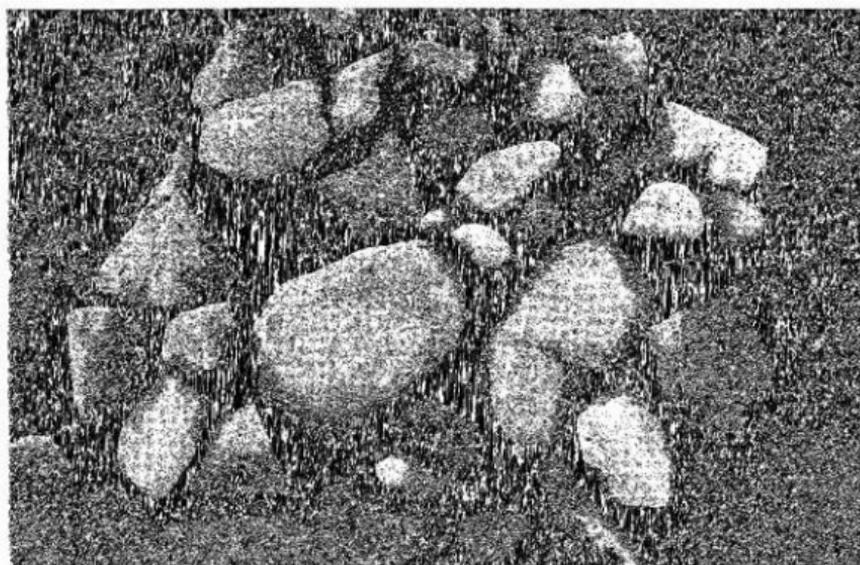
上 9号井戸（南西から）

下 1号井戸埋土断面（東から）



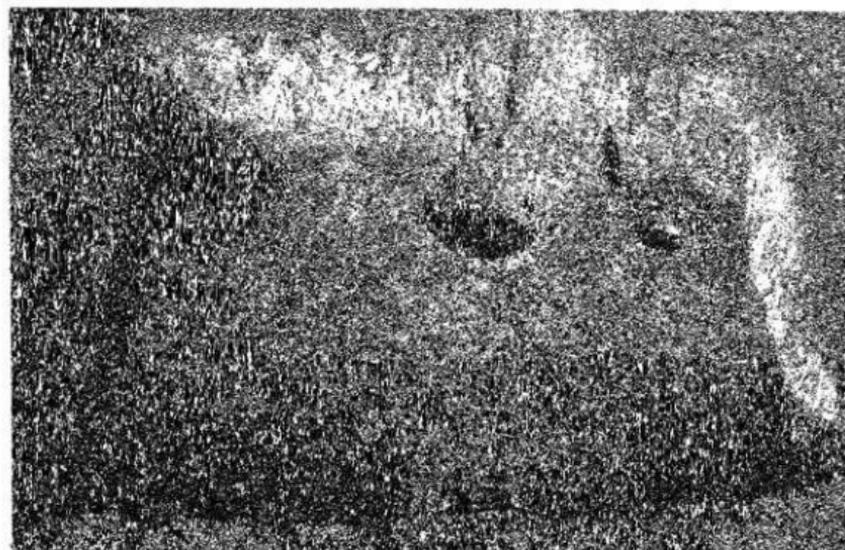
上 11号井戸埋土断面 (南から)

下 11号井戸 (西から)



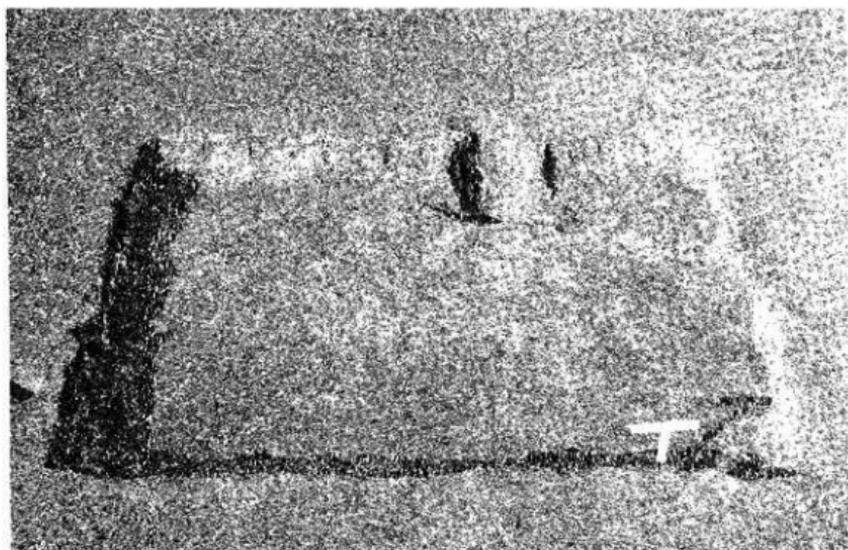
上 集石

下 土師質土器出土状況（小ピット中から）



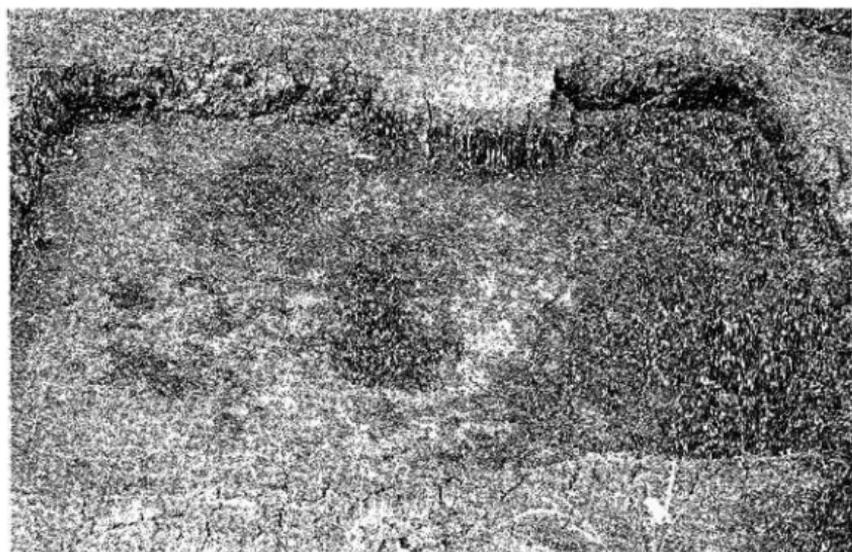
上 1号住居跡（南から）

下 2号住居跡（南から）



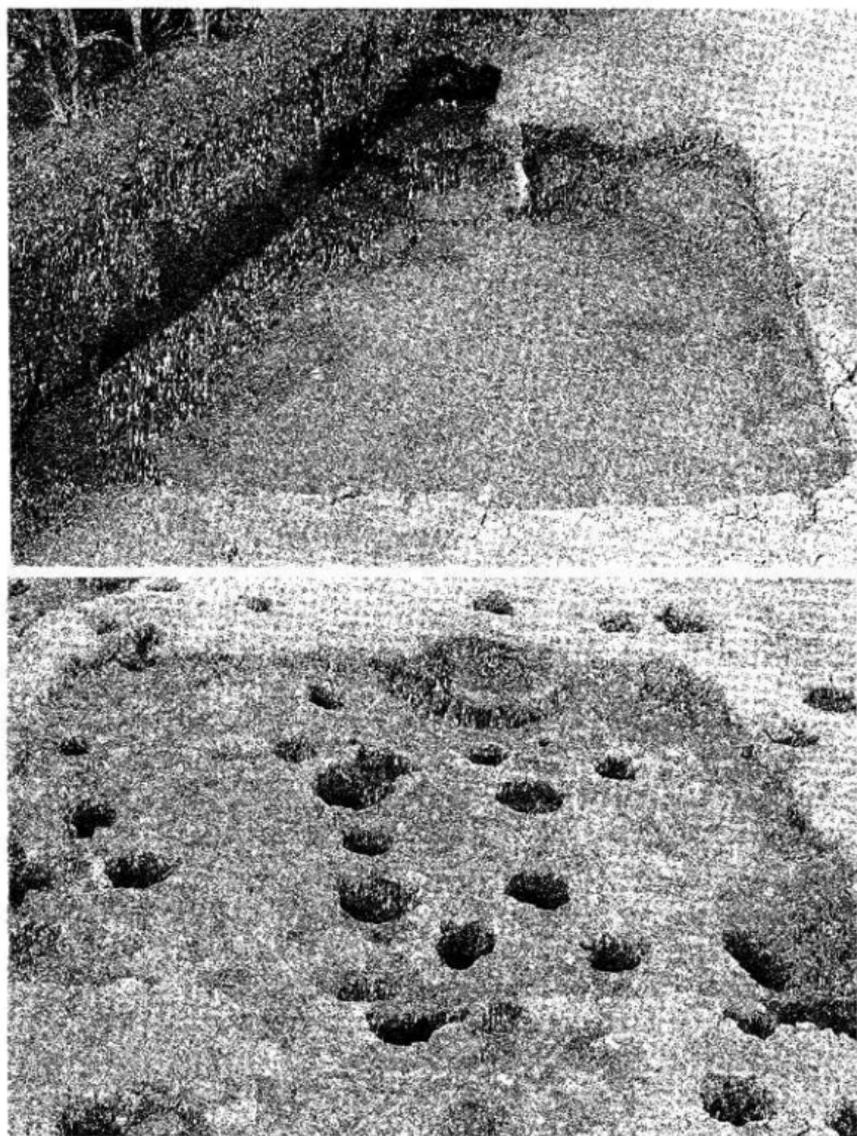
上 3号住居跡（南から）

下 4号住居跡（南から）



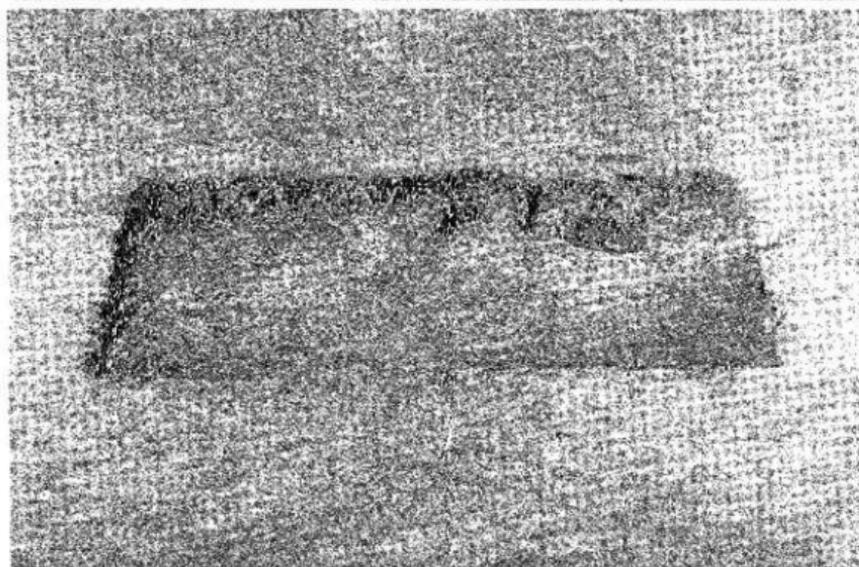
上 5号住居跡(南から)

下 5号住居跡竈(南から)



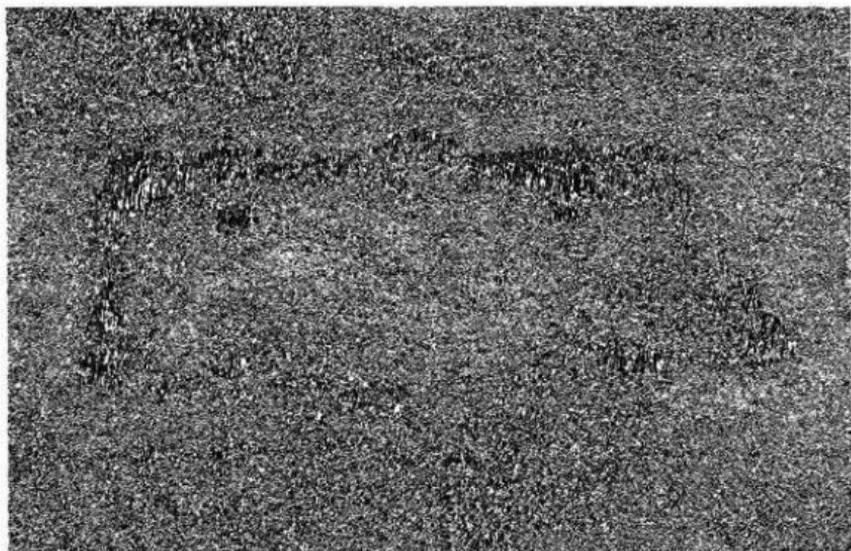
上: 6号住居跡 (南から)

下: 7号住居跡 (南から)



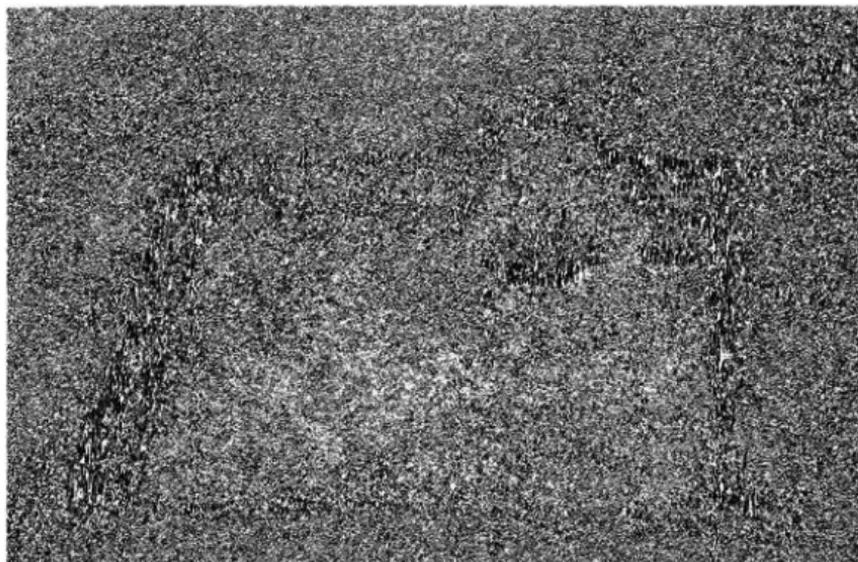
上: D区検出住居跡 (南東から)

下: 9号住居跡 (南から)



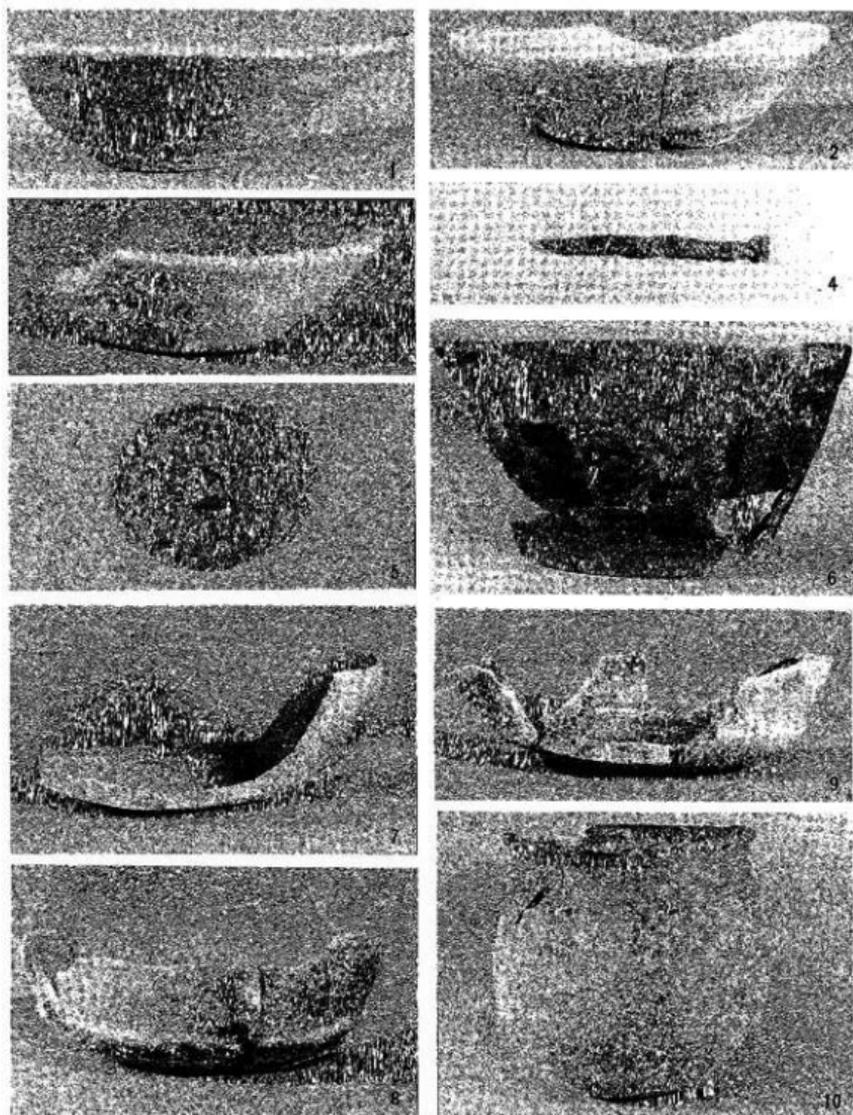
上 10号住居跡（南から）

下 10号住居跡竈（南から）



上 11号住居跡 (南から)

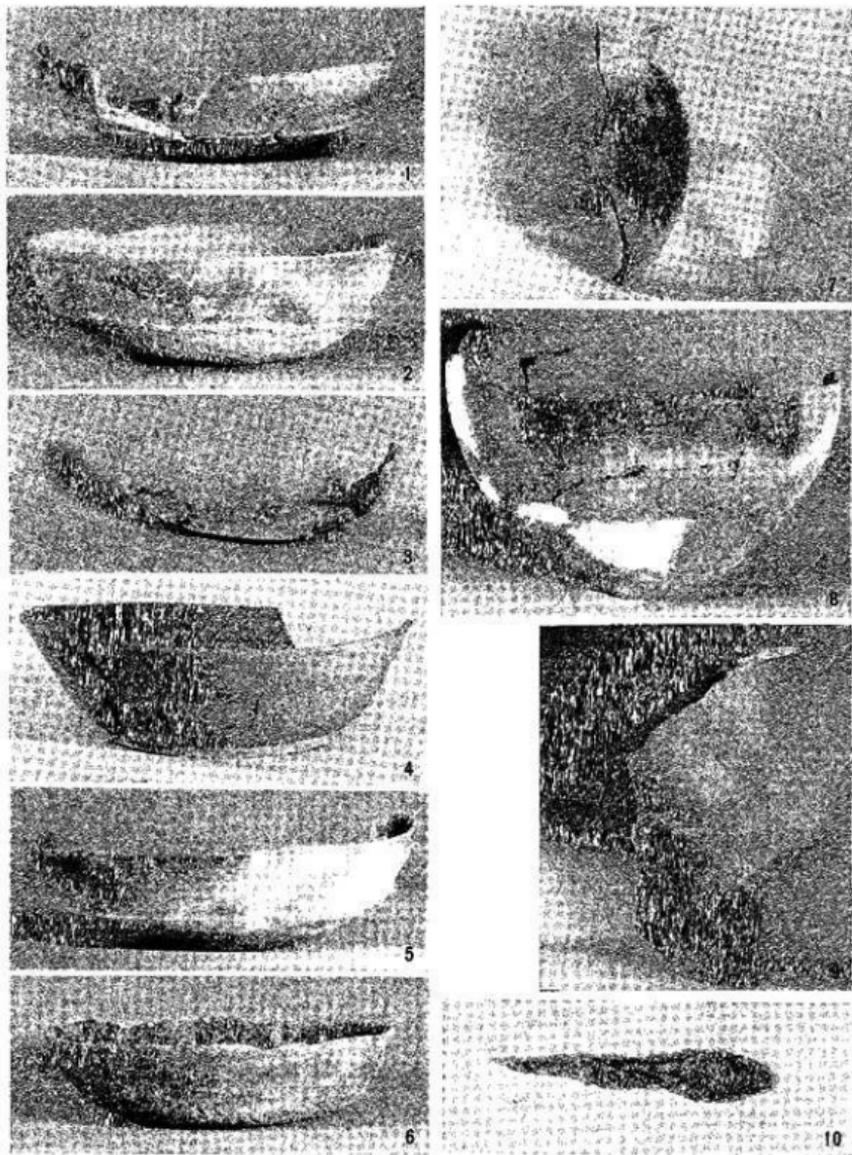
下 2号住居跡 (南から)



中世遺構および住居跡出土遺物

(1:66号土城、2:3号溝、3:小ピット、4:3号地下式土城、

5:1号火葬墓、6:4号溝、7・10:3号住居跡、8・9:1号住居跡)



住居跡・1号溝出土遺物

(1 : 4号住居跡、2・3 : 5号住居跡、4・5 : 8号住居跡、7・8 : 10号住居跡  
9 : 11号住居跡、10 : 1号溝)

栃木県埋蔵文化財調査報告 第39集

道路建設地内遺跡発掘調査報告

辻の内遺跡

昭和56年3月31日 印刷・発行

発行者 栃木県宇都宮市鳩田1-1-20

栃木県教育委員会 文化課

印刷 (有) 正栄社印刷所

宇都宮市下紙上町1439

TEL 0286483624 代